琵琶湖の水中遺跡保存活用基本構想



滋　　賀　　県

令和８年（2026 年）３月

表紙写真：令和７年度日本における水中遺跡保護体制の整備充実に関する
調査研究事業にともなうパイロット事業　葛籠尾崎（つづらおざき）湖底遺跡の調査
（背景の山が葛籠尾崎、長浜市湖北町尾上（おのえ）沖の調査船上から。令和 7 年 10 月 10 日撮影）

ごあいさつ

滋賀県は「母なる湖　マザーレイク」を真ん中に、ともにいきる「健康しが」を作ろうと取り組んでいます。

「健康しが」とは、私たち人の健康、体の健康や心の健康ばかりではありません。人と人との関わり合いのなかに社会の健康があり、経済の健康があります。さらに全ての土台に自然の健康があり、その中心に「母なる湖　マザーレイク」が位置します。琵琶湖は「健康しが」の象徴的な存在であり、「人」、「社会（経済、社会）」、「自然（環境）」という３つすべての健康の中心にあります。琵琶湖を中心とした健康を保ち高めていくことで「健康しが」を作ろうと強く望み、そのための知恵を色々な形で求めている求道の日々です。日々進化する科学技術もそうですが、滋賀の未来を考える時に最も大切にしなければならないのは歴史ではないかと考えています。

ちょうど今から１世紀前、葛籠尾崎（つづらおざき）湖底遺跡から重要な文化財が発見されました。それを知った時、どのような物を食べ、どのような物を作って、どのような人と人との関わり合いの中で、私たちは生きてきたのかということについて、もう一度真摯に学ぶことで、これからを歩んでいく知恵を授かることができないだろうかと考えました。

本県には琵琶湖の湖底や湖岸に多くの遺跡や文化財があります。それらを大切に調べ、まとめて紐解き、伝えていくことで滋賀の未来に資するような取組ができないだろうか。それに取り組むためには、どうやって調べるのか、どうやって保存・活用するのか、その方針、基本構想を作りたい。そして、調査して分かったことを保存・保管し、さらには活用しながら、その魅力や辿ってきた道について、県民をはじめ多くの皆様に知っていただくための発信をしていきたいと考えました。

琵琶湖の水中（すいちゅう）遺跡は、持続可能な「健康しが」をつくっていくための大切な資産のひとつです。この基本構想はこうした思いから、琵琶湖の水中遺跡について考え、未来の県民のために、その保存と活用の方向性をまとめたものです。今後は、この構想に基づく様々な取組を、大きな志、未来への責任・使命感をもって推進してまいりたい。子どもから大人までの幅広い世代の方々が、琵琶湖の水中遺跡の価値を共有し、歴史を学び、本県と琵琶湖への誇りと愛着を深めることが、滋賀の未来の発展につながると考えています。

令和８年３月

滋賀県知事　三日月　大造

例　　言

1　本書は、滋賀県が策定した琵琶湖の水中遺跡保存活用基本構想（以下、「本構想」という。）です。

2　策定にあたっては、有識者から専門的見地からの助言・指導を得るための「琵琶湖の水中遺跡保存活用基本構想検討会議」を設置し、令和６（2024）年８月から令和８（2026）年１月までに６回の会議を開催して検討を行い、その内容を踏まえて策定しました。

3　検討会議には、文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門文化財調査官にオブザーバーとして出席いただき、助言・指導を受けました。また、検討内容について滋賀県記念物等保護行政担当者連絡会議等で関係市に説明と意見聴取を行ないました。

4　本構想の対象とする琵琶湖の水中遺跡の定義は、次のとおりです。

・琵琶湖（本構想でいう琵琶湖は瀬田川洗堰より上流とする。河川法上の琵琶湖は、瀬田川にかかる JR 琵琶湖線の鉄橋から約 250m北側に設置された標識の位置より上流であり、面積等はこれに従う。）の水中もしくは水域に接して所在する遺跡。
・琵琶湖の集水域の湖（琵琶湖の内湖と余呉湖）の水中もしくは水域に接して所在する遺跡。
・もとは水中にあったが、現在は陸地にある遺跡（干拓等によって陸化した内湖跡に所在する遺跡等）。

5　本構想の対象とする琵琶湖の水中遺跡は、『令和３年度　滋賀県遺跡地図』（令和４（2022）年３月　滋賀県。以下『県遺跡地図』という。）所載の周知の埋蔵文化財包蔵地です。

6　本構想で使用する遺跡名は原則として『県遺跡地図』によるものとし、遺跡名の後ろに括弧書きで所在市町名を記載しています。

7　本構想で使用した図・表・写真の出典等は、資料編の資料６に記しました。

8　本書の執筆・編集は、滋賀県文化スポーツ部文化財保護課が行いました。

目　次

ごあいさつ

第１章　は じ め に　……1
第２章　構想の目的　……7
　第１節　構想策定の経緯と目的　……7
　第２節　構想の対象範囲　……11
第３章　琵琶湖の水中遺跡の概要　……13
　第１節　琵琶湖の概要　……13
　第２節　琵琶湖との共生　……15
　第３節　調査研究の歴史と成果　……17
　第４節　琵琶湖の水中遺跡の特性　……20
第４章　保存活用上の課題　……23
　　１　調査研究上の課題　……23
　　２　保存保管上の課題　……26
　　３　公開活用上の課題　……28
第５章　保存活用を推進するための基本構想　……30
　第１節　基本構想を推進するための方針　……30
　　１　調査研究を推進するための方針　……30
　　２　保存保管を推進するための方針　……31
　　３　公開活用を推進するための方針　……32
　第２節　基本構想を実現するための体制　……37
第６章　おわりに　……38

資料編　……41
　資料１　古代湖について　……42
　資料２　マザーレイクゴールズ（MLGs）について……44
　資料３　調査研究の歴史　……46
　資料４　遺跡の分布と種類　……55
　資料５　出土遺物等の概要　……60
　資料６　基礎データ　……65
　資料７　検討体制と経過　……98
　資料８　図表・写真の出典等　……101

第１章　は じ め に

「変わる滋賀　続く幸せ」滋賀県(以下「本県」という。)は「変わる滋賀　続く幸せ　-Evolving SHIGA-」を掲げ、平成31(2019)年３月に『滋賀県基本構想』を策定しました。これはみんなの力を合わせて、目指す未来をつくるための将来ビジョンです。この構想では「人」、「経済」、「社会」、「環境」の４つの視点で、目指す令和12(2030)年の姿を描いています。自分らしい未来を描くことができる生き方と、その土台として、「経済」、「社会」、「環境」の三側面のバランスの取れた持続可能な滋賀を目指す構想です。



図１　みんなで目指す 2030 年の姿

　そして、さまざまな社会的変化に直面するなか、伝統・文化や先人の知恵等を生かしながら時代に合わせ、しなやかに変わり続ける滋賀の姿を「evolving(進化)」という言葉で表現しています。

「母なる湖 マザーレイク」　こうした目指す姿の実現に向けて活かすべき滋賀の特徴として、豊かな滋賀の歴史、さまざまな価値をもつ琵琶湖があげられます。琵琶湖は、国内最大の淡水湖です。そして、およそ 400 万年もの長い歴史を持つ日本最古の湖であり、世界中で 20 ほどしかない古代湖のうちの一つでもあります（資料１参照）。そこには日本の湖としては最多となる 60 種以上の固有種が生息するといった貴重な自然環境があり、近畿圏 1,450 万人の生活や産業の発展に欠かすことができない水資源があります。琵琶湖は本県だけでなく、まさに「国民的資産」です。こうした琵琶湖を本県は「母なる湖　マザーレイク」と呼び、その保全再生に関わるさまざまな施策を推進しています。

「マザーレイクゴールズ」　マザーレイクゴールズ（以下「MLGs」という。）とは、「琵琶湖」を切り口とした 2030 年の持続可能社会への目標（ゴール）です。MLGs は「琵琶湖版の SDGs」として 2030 年の環境と経済・社会活動をつなぐ健全な循環の構築に向け、独自に 13 のゴールを設定しています（資料２参照）。

図２左のロゴマークは、円形が琵琶湖をとりまく湖国・滋賀、そして地球を表現しています。「琵琶湖は生活を写す鏡」「琵琶湖は地球の問題を映す」ことを表し、琵琶湖・滋賀から世界を変えるための目標であることを表しています。



図２　マザーレイクゴールズ　ロゴ



「健康しが」　本県は健康増進計画として、令和６（2024） 年３月に『健康いきいき 21－健康しが推進プラン（第３次）』を策定しました。その基本理念は、誰もが自分らしく生き生きと活躍し、みんなでつくり支え合い、幸せを感じられる「健康しが」の実現です。私たち「人」の健康には体の健康、心の健康があります。そして、人と人との関わり合いのなかに「社会（経済、社会）」があります。さらに全ての土台に「自然（環境）」があり、その中心に「母なる湖　マザーレイク」が位置します。この「健康しが」の実現のためには「人」ばかりでなく「社会（経済、社会）」の健康、「自然（環境）」の健康を保ち高めることが重要です。

本県では、「母なる湖　マザーレイク」である琵琶湖と共に生きる「健康しが」をつくろうと、あらゆる分野が連携した機運醸成の取組を進めています。



図３「健康しが」のロゴマーク

滋賀県基本構想実施計画における「健康しが」　滋賀県基本構想実施計画（第２期：2023 年度～2026 年度）において、目指す姿である「健康しが」とは、滋賀では誰もが自分らしくそれぞれの「幸せ」を感じることができ、滋賀を誇りとして、滋賀に住み続けたいと思えるような状態にあること、それが「健康しが」の実現であるといいます。それは「ひとの健康」「社会・経済の健康」「自然の健康」の全てが充

足し、またこれらの全てが複合的・有機的に連動することで実現するといいます。

そして「健康しが」の実現に向けた 13 の政策の柱の１つに「からだとこころの健康づくり」があり、この政策の推進にあたっては「誰もがこころもからだも元気で、豊かさが溢れる地域づくりを進める」という方向性を示しています。「文化財」はこの政策に位置付けられ、その具体的な施策として「文化財の保存と活用」を通して、文化財の保存継承を支える人づくりや地域づくりに取り組むといいます。

『滋賀県文化財保存活用大綱』と「健康しが」　本県ではこうした政策の方向性のもと、令和２（2020）年３月に文化財保護法第 183 条の２第１項に基づき『滋賀県文化財保存活用大綱　－知る・守る・活かす　滋賀の宝　わたしたちの文化財－』（以下「大綱」という。）を策定し、本県の文化財を確実に次世代に継承していくため、文化財の保存と活用に関する種々の取組を適切に進める上で共通の基盤となる方針を示し、今後の総合的な施策を定めました。

滋賀県基本構想実施計画（第２期：2023 年度～2026 年度）に示されたとおり、文化財は「健康しが」を実現するための大切な資産ですが、大綱は基本構想実施計画において現在（第２期）ほどは「健康しが」との関係性が明確に示されていなかった段階（第１期）で策定されており、「健康しが」については『「健康しが」ツーリズムビジョン２０２２』（平成 31 年３月策定）において定めた文化財に関連する観光戦略について取り上げ、それとの整合を図るにとどまっています。

「健康しが」につなぐ水中遺跡の保存活用　琵琶湖の周辺に住まう人々は琵琶湖とかかわることでしか生活が成りたたず、本県の歴史は琵琶湖という水域の環境のなかで、いかに人が生きるかという模索を繰り返して、今日にたどり着きました。県内各地に数多くある遺跡は土地に刻まれた先人たちの足跡（そくせき）であり、その中でも 102 遺跡（令和８（2026）年３月現在）にものぼる琵琶湖の水中（すいちゅう）遺跡は、琵琶湖と共生することなしには生きることが出来なかった人々の活動の痕跡を見事に示しています。琵琶湖の水中遺跡は、琵琶湖と共に生きた人々によって育まれた歴史を学ぶ上で欠くことのできない文化財です。

琵琶湖の水中遺跡の調査研究、保存保管、公開活用の取組を通して、私たちは滋賀の歴史を学び、先人の知恵を授かることができます。子どもから大人までの幅広い世代の方々が、琵琶湖の水中遺跡の価値を共有し、歴史を学び、本県と琵琶湖への誇りと愛着を深めることは、「誰もがこころもからだも元気で、豊かさが溢れる地域づくり」へとつながり、本県が目指す「健康しが」の実現に資するものです。

本県ではこうしたことを背景として、令和６（2024）年に本構想の策定に着手しました。令和６年は葛籠尾崎（つづらおざき）湖底遺跡（長浜市）の発見（大正 13（1924）年）から数え

て 100 年にあたることから、これを好機ととらえ、「健康しが」の実現を目指して琵琶湖の水中遺跡に光をあて、調査研究、保存保管、公開活用の取組の道筋を構想し、策定しました。今後、本構想に基づいて琵琶湖の水中遺跡の保存と活用の充実のためのさまざまな取組を推進していきます。

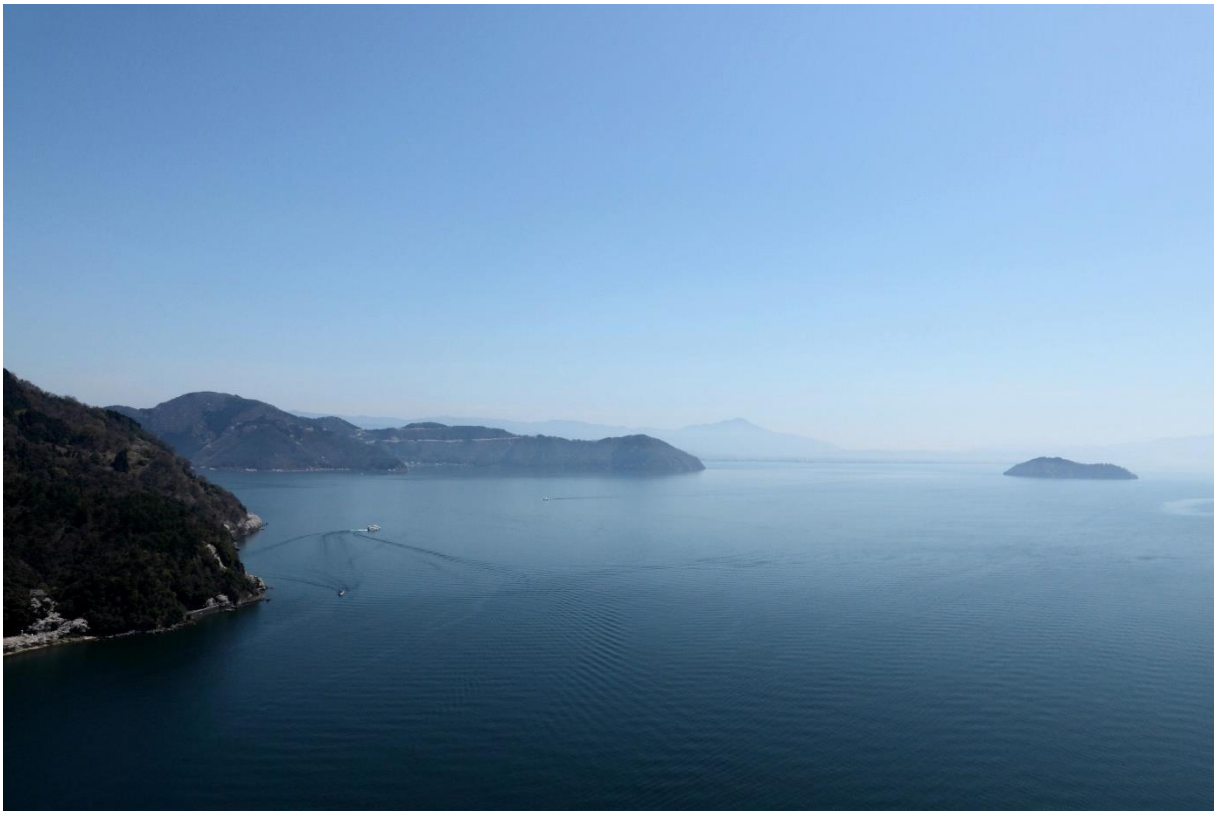


写真１　左手奥から右側に延びる半島が葛籠尾崎、その右側が竹生島（西方の上空から）



写真２　葛籠尾崎湖底遺跡は葛籠尾崎の東沖から南沖の湖底に眠る（南方の湖上から）

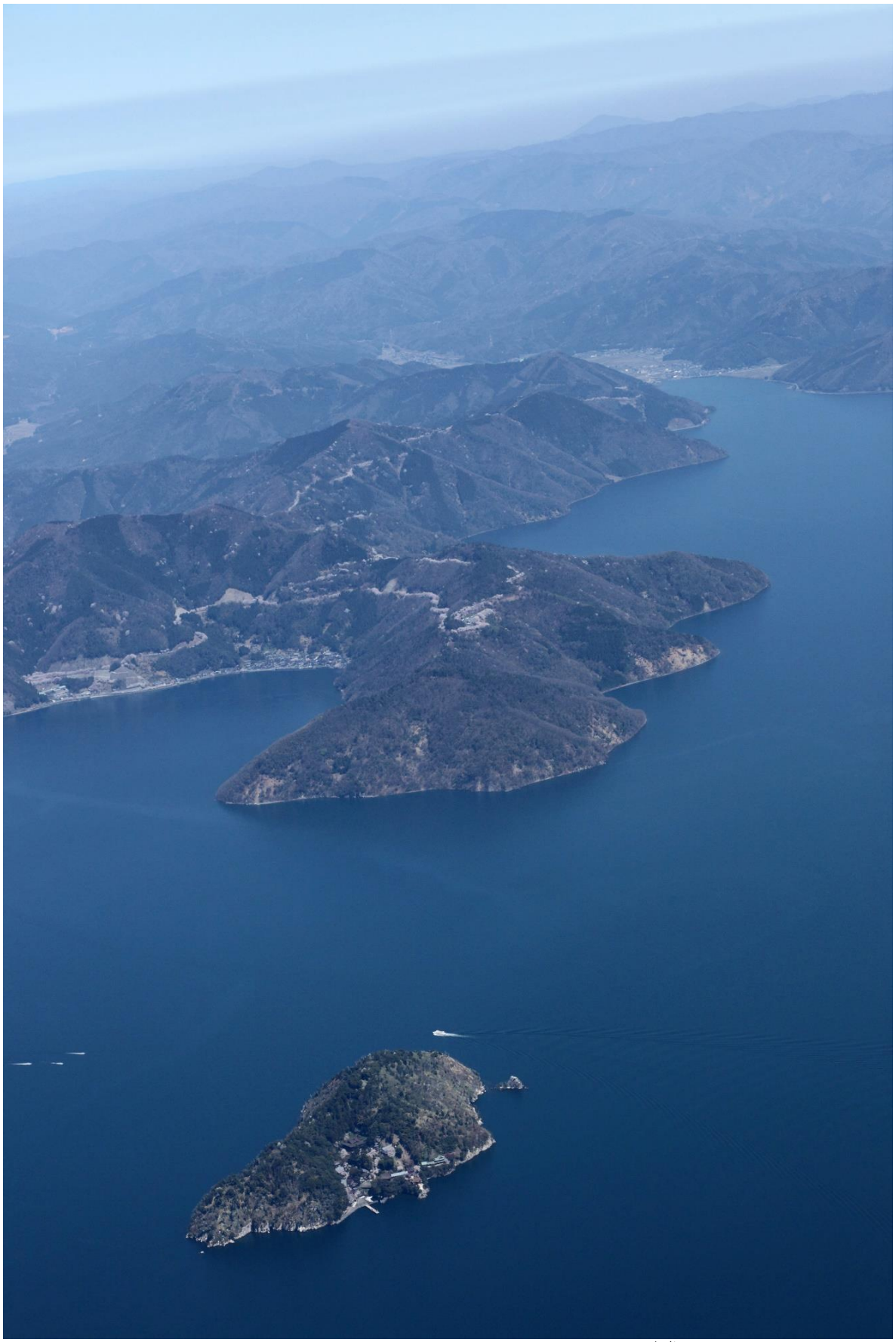


写真３　竹生島の南西上空から見た葛籠尾崎（右奥は塩津港）

葛籠尾崎湖底遺跡は葛籠尾崎の南沖（竹生島の北沖）から東沖の湖底に眠る

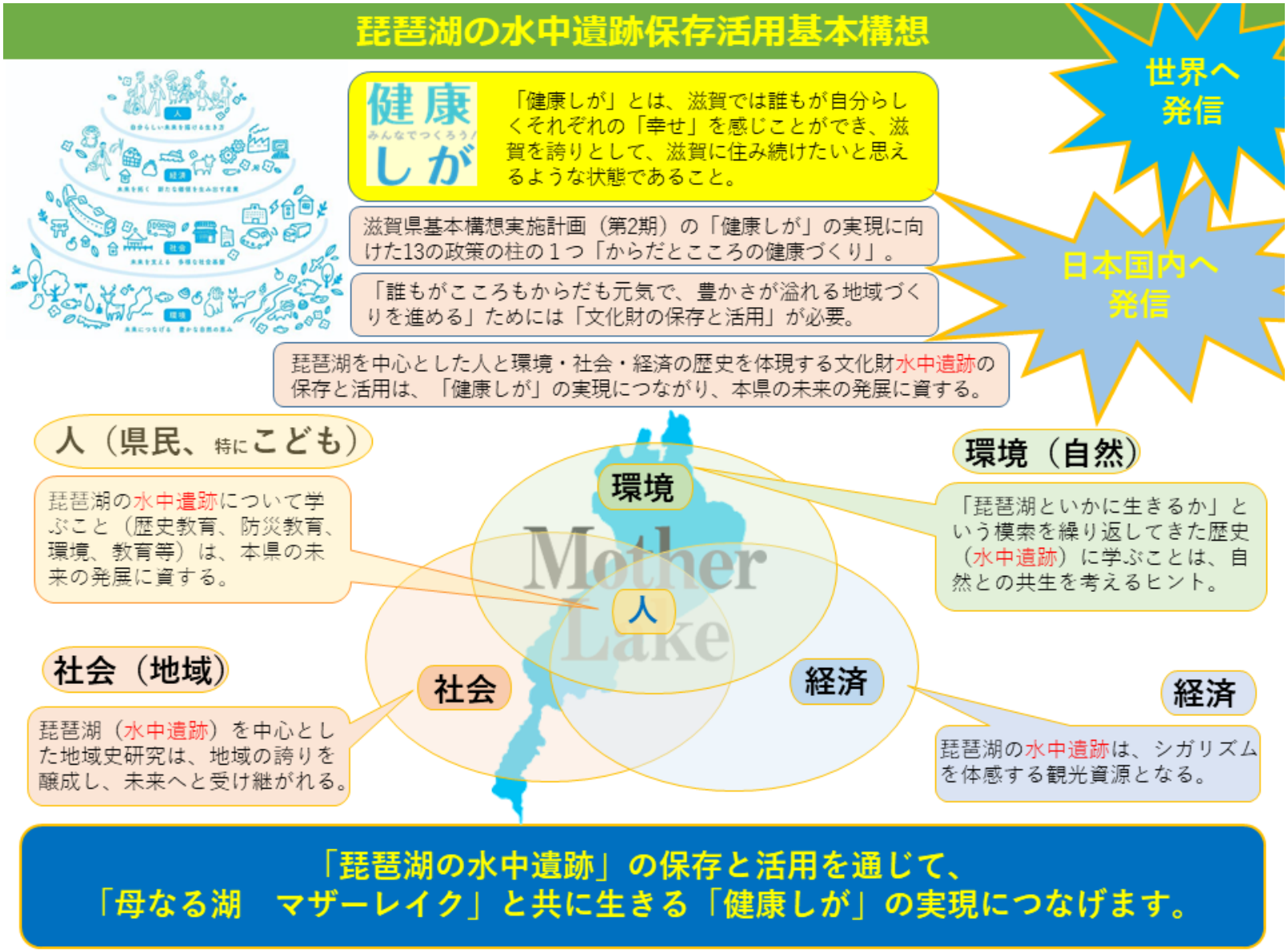


図４　琵琶湖の水中遺跡基本構想の概要

第２章　構想の目的

第１節　　構想策定の経緯と目的

『滋賀県文化財保存活用大綱』　本県では、令和２（2020）年３月に『滋賀県文化財保存活用大綱』（以下「大綱」という。）を策定しました。文化財を確実に次世代に継承するために、文化財の保存と活用に関する種々の取組を適切に進める上で共通の基盤となる方針を示し、滋賀県として優先的に取り組むテーマを「みんなで文化財の保存継承を支え合う地域づくり・人づくり」としました。

大綱は、本県の歴史文化について５つの特徴を挙げています。

滋賀県の歴史文化の特徴

（１）琵琶湖によって育まれた歴史・文化
（２）人と物資が行き交う東西日本列島の結節点
（３）政治文化の中心に近い立地性
（４）力強い自立と自治
（５）神と仏の国

（１）琵琶湖によって育まれた歴史・文化は、本県の歴史、文化の５つの特徴の第一に掲げています。本県の歴史と文化は全時代を通じて琵琶湖の存在、琵琶湖と水との深い関わりの中で織りなされてきたとしています。そして、このことは他の都道府県にはない、本県ならではの唯一無二の風土であり、最大の特徴、大きな価値であるとしています。他の４つの特徴もこれを背景として生み出されたといえます。

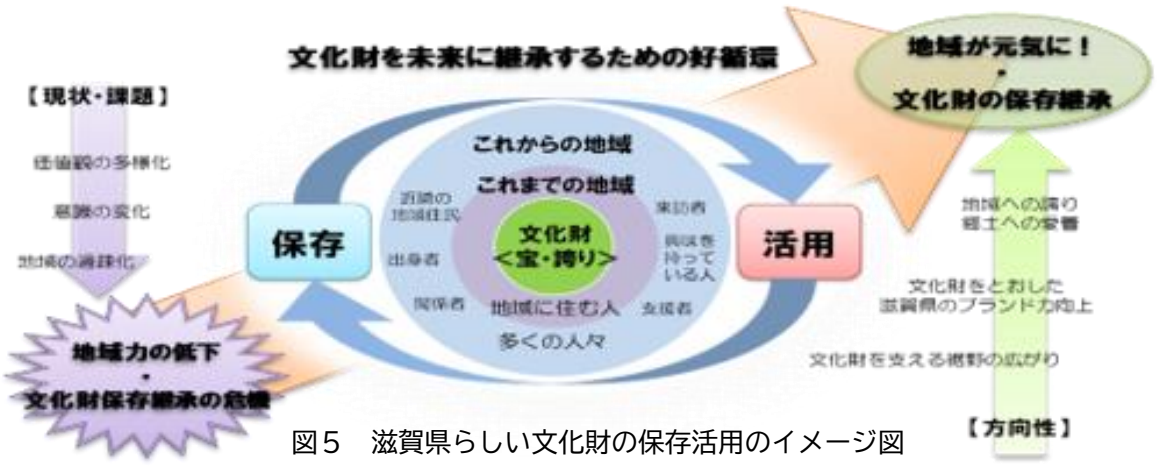


図５　滋賀県らしい文化財の保存活用のイメージ図

大綱と水中遺跡　大綱では、本県の文化財は琵琶湖と共にあるとしています。琵琶湖の水中遺跡はこれを代表する一つであり、琵琶湖に近接した人々の生活実態とともに、琵琶湖そのものの歴史、災害の歴史を知る上でも大切な文化財としています。

『県遺跡地図』によると、県内には約 4,600 遺跡の周知の埋蔵文化財包蔵地があります。そのうち水中遺跡は琵琶湖（大津市南郷地先の瀬田川洗堰より上流）に 77 遺跡と余呉湖に 1 遺跡が知られます。その数 78 遺跡は都道府県別で沖縄県に次いで全国第２位です。本構想においては「琵琶湖とその集水域の湖にある遺跡」を「琵琶湖の水中遺跡」と定義し、上述の 78 遺跡に琵琶湖の内湖（陸化した内湖を含む）にある 24 遺跡を加えた 102 遺跡を対象としています（資料６図 26～33、表８）。

歴史文化の特徴と水中遺跡　こうした水中遺跡について、大綱が掲げる本県の歴史文化の５つの特徴との関係を述べると、まず第１に（１）琵琶湖によって育まれた歴史・文化という特徴は、時代・種類とも多種多様な数多くの水中遺跡の存在がこれを示しています。ついで（２）人と物資が行き交う東西日本列島の結節点については、古代の勢多橋の橋脚が見つかった唐橋遺跡（大津市）が示すような陸上交通はもとより、琵琶湖そのものが重要な運河として機能してきた水上交通の歴史があります。このことは平安時代の港護岸等が発見された塩津港遺跡（長浜市）といった湖岸の遺跡ばかりでなく、葛籠尾崎湖底遺跡（長浜市）のように多くの物資が湖底に沈む遺跡の存在が示しています。こうした水中遺跡の存在は坂本城跡や大津城跡、膳所城跡（いずれも大津市）等が湖岸に築かれたことにつながり（３）政治文化の中心に近い立地性という特徴と深くかかわります。また（４）力強い自立と自治については浮御堂遺跡（大津市）があげられます。発掘調査で見つかった大量の遺物からは、中世の自治都市として知られる堅田の経済力や文化の高さ、生業のあり様をうかがうことができます。さらに（５）神と仏の国については、多景島遺跡（彦根市）を例示できます。島周囲の湖底からは、室町時代の懸仏や、灯明皿として使われた土師器皿、小型銅鏡等、江戸時代に至るまでの祭祀や信仰に関わる遺物が多く出土しています。

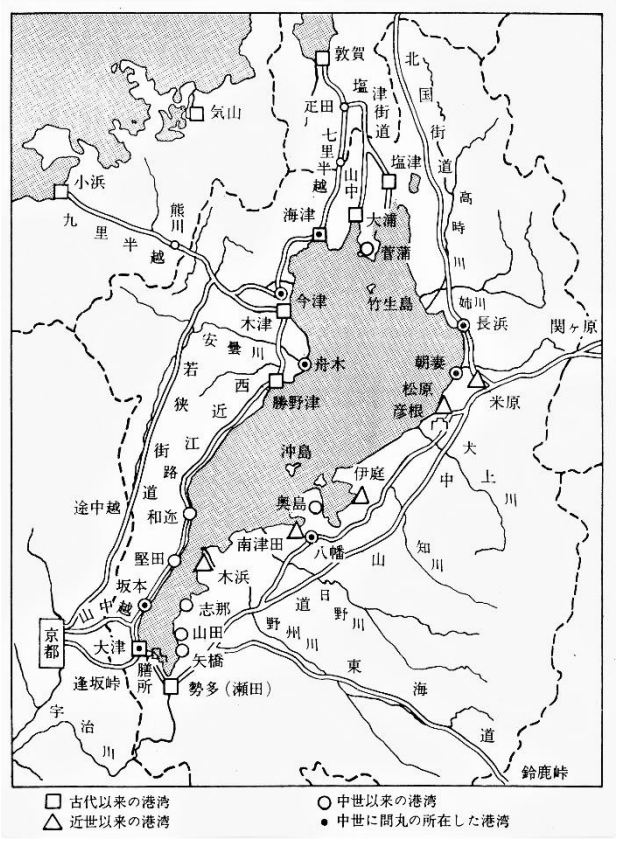


図６　琵琶湖をめぐる交通路と港湾

災害史と水中遺跡　大綱では、水中遺跡は本県の歴史を知る上で欠くことのできないものであり、琵琶湖に近接した人々の生活実態とともに、琵琶湖そのものの歴史についても新たな知見をもたらす大切な文化財であると述べています。

とりわけ湖底に沈む水中遺跡は、災害の歴史を知る上でも大切な文化財です。例えば、針江浜遺跡（高島市）では、弥生時代中期から後期頃の地震による噴砂の痕跡やヤナギの埋没林が見つかっています。埋没林は同一方向（琵琶湖側）に倒れているので、地震による土地の液状化あるいは津波の影響を示すとされています。

また、琵琶湖には集落が湖中に水没したという「千軒伝承」が北湖を中心に点在します。高島市の舟木、藤江千軒、三矢千軒、長浜市の相撲湖底遺跡（西浜村）、米原市朝妻筑摩の尚江千軒等です。伝三矢千軒遺跡（高島市）は、寛文２（1662）年の寛文近江若狭地震で水没した集落跡と考えられており、現在の湖岸の沖合に石塁があり、正中２（1325）年の水没伝承がある尚江千軒遺跡では中世の土器や瓦の散布が確認されています。また、昭和２（1927）年刊『高島郡誌』には「口碑に上古善積郡の地は地変によりて湖中に陥没したりと云ふ。」とあります。



図７　琵琶湖に水没した千軒伝承等と水中遺跡（埋蔵文化財包蔵地）

水中遺跡の調査・保存・活用

大綱では、文化財の保存を計画的かつ着実に進めるために、価値付けが未確定な文化財に対して、県として必要な調査研究を進めるとともに、地域計画に基づく市町による調査と連携しながら、今後の保存の方策を検討することにより、着実な指定・選定等によって保存措置を講じるとしています。

琵琶湖の水中遺跡については、本県ではこれまでに琵琶湖総合開発事業等（資料３、資料５表３～７）に伴い、遺跡の分布調査や発掘調査を実施し、その奥深さや内容、重要性を明らかにしてきました。しかしながら、いまだ琵琶湖の水中遺跡の全容解明、詳細把握には至っておらず、これまでの調査成果や出土文化財の活用も部分的なものに留まっています。

本県ならではの文化財である水中遺跡を、滋賀の宝として大切に守り継いでいくためには、より多くの人がその価値や魅力を共有することが重要です。さらなる調査研究によって水中遺跡を解明し、その価値や魅力を高め、展示公開等の活用事業を通して、広くこれを発信していく取組を推進する必要があります。

「琵琶湖に眠る水中遺跡魅力発掘・発信事業」　令和６（2024）年は、葛籠尾崎湖底遺跡の発見から 100 年の年でした。本県は、この節目の年を好機として「琵琶湖に眠る水中遺跡魅力発掘・発信事業」を令和６年度に起ち上げました。その目的は、琵琶湖の水中遺跡に光をあて、その価値と魅力を県民と共有し、広く発信することにより、これを「滋賀の宝　わたしたちの文化財」として一層の保存と活用を図ることにあります。この事業は、「水中遺跡の調査と保存の推進」「水中遺跡と出土文化財（遺物）の活用推進」を方向性の２本柱として、文化庁や関係市等とも協働を進めながら、また滋賀県の他事業とも連携を図りつつ、長期的な視点と大きな志を持ち、腰を据えて中長期的な計画で取り組むこととします。

本構想策定の目的　令和６（2024）年度から、まずは県内北部地域において水中遺跡の魅力発信の講演会や展覧会に取り組むとともに、有識者の専門的見地からの助言・指導を得るための「琵琶湖の水中遺跡保存活用基本構想検討会議」を設置しました。会議では水中遺跡にかかる調査研究、保存保管、公開活用の現状と課題について意見を交換し、それを踏まえて本構想を策定しました。これは琵琶湖に眠る水中遺跡の魅力発掘・発信事業を推進する拠り所であり、今後取り組む水中遺跡の保存活用が「健康しが」の実現につながり、滋賀の未来の発展に資することを目指しています。



写真４　第１回琵琶湖の水中遺跡保存活用基本構想検討会議　令和６年８月５日　滋賀県庁本館

本構想の方針　文化財は「健康しが」を実現するための大切な資産ですが、大綱は滋賀県基本構想実施計画の第１期において策定したことから、現時点（第２期）で見ると、文化財と「健康しが」との関係性の整理が充分ではありませんでした。また、琵琶湖の水中遺跡についても充分には取り上げられていないことから、「健康しが」と大綱との架け橋（仲立ち、橋渡し）の役割を果たすべく、本構想を策定しました。

今後は「健康しが」の実現を目指し、この構想に基づいて琵琶湖の水中遺跡の保存と活用の充実のためのさまざまな取組を推進します。子どもから大人までの幅広い世代の方々が、琵琶湖の水中遺跡の価値を共有し、歴史を学び、本県と琵琶湖への誇りと愛着を深めることが、滋賀の未来の発展につながると考えています。

本構想においては、調査研究の方針として、まずは水中遺跡の分布調査、ついで総合調査を行い、琵琶湖を中心とする地域研究の活性化を図り、それを通じて専門人材の育成を進めることとしました。

そして、保存保管については、水中遺跡を周知の埋蔵文化財包蔵地として保護するとともに、重要な遺跡や出土文化財は指定（史跡、重要文化財等）によって保存の確実化を図ります。また、保存及び活用のための措置が特に必要とされる遺跡については「登録（登録記念物）」によって、広くその意識向上や保護を図ります。また、木製品等の出土文化財や発掘調査の記録資料は、専門人材による保存処理やデジタル化等によって劣化対策を進めるとともに、適切な環境を確保しての保存保管を進めます。

あわせて水中遺跡を可視化し、水陸の遺跡を一体的に捉えて活用を図り、その価値を広く県民と共有することは、「健康しが」の実現につながります。本県では、その基幹施設の一つとして滋賀県埋蔵文化財センターの機能の強化、充実を図ることとしています。

第２節 本構想の対象範囲

『水中遺跡ハンドブック』（P26、文化庁文化財第二課、令和４（2022）年３月）によると、水中遺跡とは「海域や湖沼等において、常時もしくは満潮時に水面下にある遺跡」としています。これは遺跡が存在する場所による定義であるため、もとは水域に存在した遺跡であっても、現在は陸地となった場所に所在する遺跡は含まないことになります。しかし、こうした遺跡についても水中遺跡の調査目的が水域における人々の活動痕跡を明らかにするという点において、また、後に陸地化した遺跡は地震や気候変動、土砂災害等に関する重要な情報を持つことがあるという点において重要です。

ついては、本構想の対象範囲を次のように整理します。すなわち、対象物として遺

跡（①）とそれに関する出土文化財や出土遺物（②）、記録資料（③）があり、それぞれにかかる方法として調査研究（④）、保存保管（⑤）、公開活用（⑥）があります。

【本構想の対象範囲】

①遺跡

・琵琶湖（瀬田川洗堰より上流）の水中もしくは水域に接して所在する遺跡

・琵琶湖の集水域の湖（琵琶湖の内湖と余呉湖）の水中もしくは水域に接して所在する遺跡

・もとは水中にあったが、現在は陸地にある遺跡（干拓等によって陸化した内湖跡に所在する遺跡等）

②出土文化財等

・滋賀県埋蔵文化財センターが収蔵保管する出土文化財や出土遺物

・その他関係機関や個人保管の出土文化財や出土遺物

③発掘調査記録資料等

・滋賀県埋蔵文化財センターが収蔵保管する発掘調査記録資料

・その他関係機関や個人が保管する古写真、古文書等の文献史料等

④調査研究の方法

・①②③の調査研究（分布調査、測量調査、試掘調査、確認調査、発掘調査、整理調査、自然科学的調査、文献調査等）

⑤保存保管の方法

・①の保存（埋蔵文化財包蔵地としての周知、史跡指定、記念物登録等）

・②③の保存保管（重要文化財指定、保存処理、デジタル化、保管環境の改善等）

⑥公開活用の方法

・文化財としての活用（価値の普及啓発等）

・教育的な活用（歴史教育、防災教育、環境教育等での活用等）

・社会的な活用（地域の誇りの醸成、まちづくりのシンボルとしての活用等）

・経済的な活用（観光活用等）

・その他の活用

第３章　琵琶湖の水中遺跡の概要

第１節　琵琶湖の概要

古代湖・断層湖　琵琶湖は日本最古の湖であり、世界中で 20 ほどしかない古代湖のうちの一つです(資料１)。約 400 万年前の三重県伊賀盆地付近を起源地とし、地殻変動（断層の活動）によって地盤が陥没する影響と、そこにできた水溜まりに土砂が流入して埋めていくという運動によって形を変えつつ移動し、約 40 万年前に現在地に至りました。

構造湖の１種である地溝湖（断層湖）であり、琵琶湖の北側の湖底において、西側に深い場所が偏っている理由は、琵琶湖西岸断層帯をはじめとする断層運動の影響です。

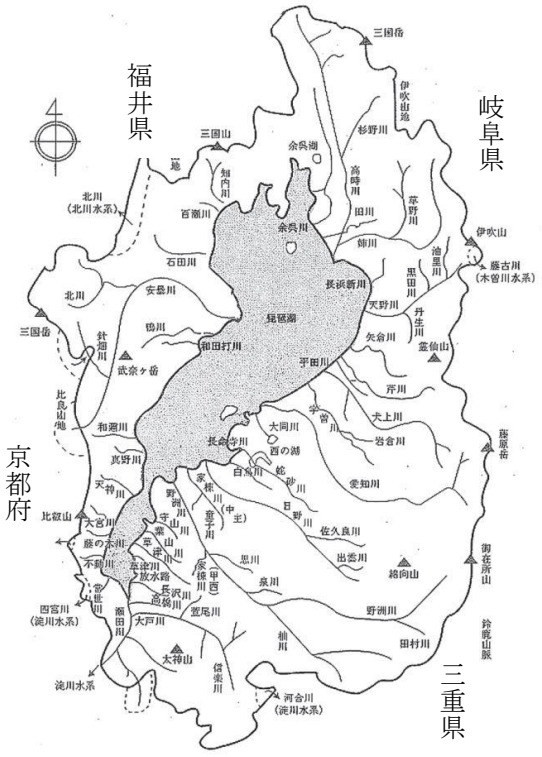


図８　琵琶湖と断層

国内最大の湖　琵琶湖の集水域は県土の約 96％にあたります。450 本の流入河川がある一方、流出する自然河川は瀬田川１本です。

琵琶湖の面積は 669.26 ㎢で県面積の約 1/6 を占めます。長軸長 63.49 km、最大幅 22.80 km、最深部 103.58m（高島市安曇川河口の北東沖付近）、貯水量 275 億㎥で、基準水位の標高（以下「B.S.L」とする。）は東京湾中等潮位（以下「T.P.」とする。）を基準に 84.371 mです。最小幅は大津市今堅田地先と守山市今浜町地先の間の 1.35 kmで、その北側を北湖、南側を南湖といいます。北湖と南湖の面積比は 11:１で、平均深度は北湖約 43m、南湖約４mです（資料６図 25）。

琵琶湖には 10 市境があり、高島・長浜両市で全面積の約半分を占めます(資料６図 26)。



第９図　琵琶湖と河川

琵琶湖の内湖　内湖（ないこ）は琵琶湖の沿岸流や河川による土砂堆積等によって生じた潟湖(ラグーン)です。明治時代には、琵琶湖の東岸域を中心として大小 100 余りの内湖があり、総面積は 35.2 ㎢に及びましたが、第２次世界大戦中や戦後の食糧難に伴う干拓事業によって大きくその数を減じ、現在は 23 内湖、総面積 4.25 ㎢にまで縮小しています（人造再生内湖は含まず）。

かつて存在した内湖のうち、最大面積の大中の湖（だいなかのこ）（近江八幡市・東近江市）は 15.4 ㎢と諏訪湖（すわこ）（長野県）よりやや大きいものの、水深は最大でも 2.7ｍしかありませんでした。そもそも内湖の平均水深は 1.78ｍと浅いことから、そこにはヨシ群落が繁茂し多様な生物のすみかとなり、水質の浄化作用も果たしていました。また、例えば大中の湖の湖面標高は琵琶湖より約３ｍも低い T.P.81ｍであったことからわかるように、内湖の中には洪水時において、背後地から流入する水の遊水池の役割を果たすものもありました。

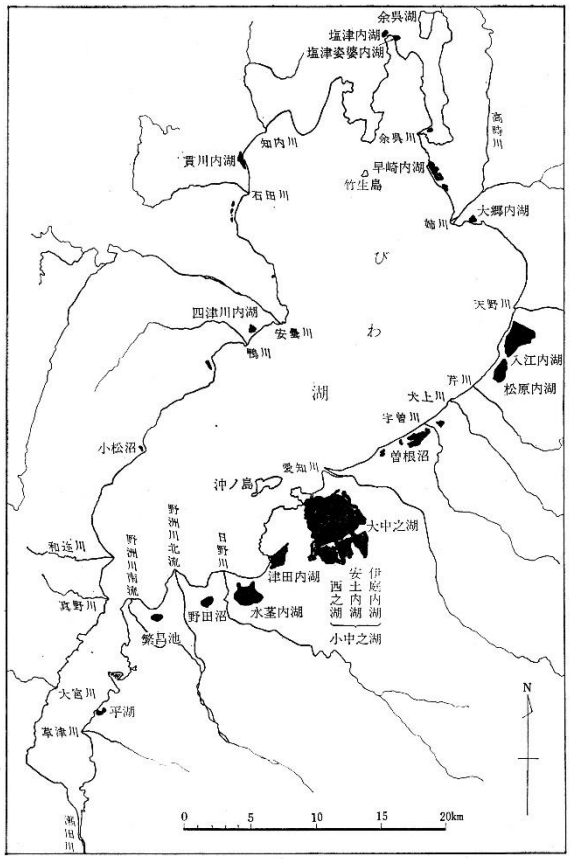


図 10　琵琶湖の内湖の分布
（消滅した内湖を含む）

豊かな生態系　琵琶湖は世界中で 20 ほどしかない古代湖の一つであり、そこには 1,700 種以上の多種多様な水生動植物が生息しています。このうち固有種はビワコオオナマズやホンモロコ、ビワマス、セタシジミをはじめとして 66 種にも及び、その数は日本の湖としては最多を誇ります。豊かで健全な生物相は、琵琶湖の健康状態を示すバロメーターです。ところが近年は外来生物の侵入・大繁殖があり、湖岸の開発や地形改変、各種排水等による水質悪化、地球温暖化による気候変動等による影響を受ける等、琵琶湖の環境保全は多くの課題をかかえています。

本県では、内湖の再生も含めた「母なる琵琶湖　マザーレイク」の保全及び再生に向けた施策を継続的に推進し、その改善に努めています。琵琶湖の水中（すいちゅう）遺跡の保存と活用を図ることは、琵琶湖の健康の推進（環境保全）にもつながります。



写真５　店頭のビワマス

第２節　琵琶湖との共生

琵琶湖の名称　本来、琵琶湖はたんに「淡海」「淡海の海」（奈良時代に成立した『万葉集』『古事記』『日本書紀』）、あるいは「水海」とも表記されました（天平宝字４（760）年頃に成立した『武智麻呂伝』）。その後、古代において都から遠い静岡県浜名湖を「遠つ淡海」と呼び始めたことに引かれ、琵琶湖を「近つ淡海」とする表現がうまれました。これらはそれぞれの所在国名である近江、遠江の語源であるとされますが、遠江が「とおとうみ」と呼ばれるのに対し、近江は依然として「おうみ（あはうみ）」と呼ばれました。和銅６（713）年の『近江風土記』逸文に「淡海の国は淡海を以ちて国の号と為す。」とあるように、「淡海（琵琶湖）」は近江国（滋賀県）の象徴です。

平安時代に入り、最澄（天平神護２-弘仁 13（766-822）年）が比叡山に一乗止観院（延暦寺根本中堂の前身）を建立したとき、大弁才天女が姿を現して「自今已後、住湖中之霊島、可奉守此山（今より以後、琵琶湖に浮かぶ竹生島に住んで、比叡山を守護する）」と誓ったといいます（応永 21（1414）年成立の群書類従本『智福嶋縁起』）。そして、平安時代の末期に後白河法皇（大治２-建久３（1127-1192）年）が治承年間（1177-1181 年）に編んだ歌謡集『梁塵秘抄』には「近江の湖は海ならず天台薬師の池ぞかし」という一節がみえます。

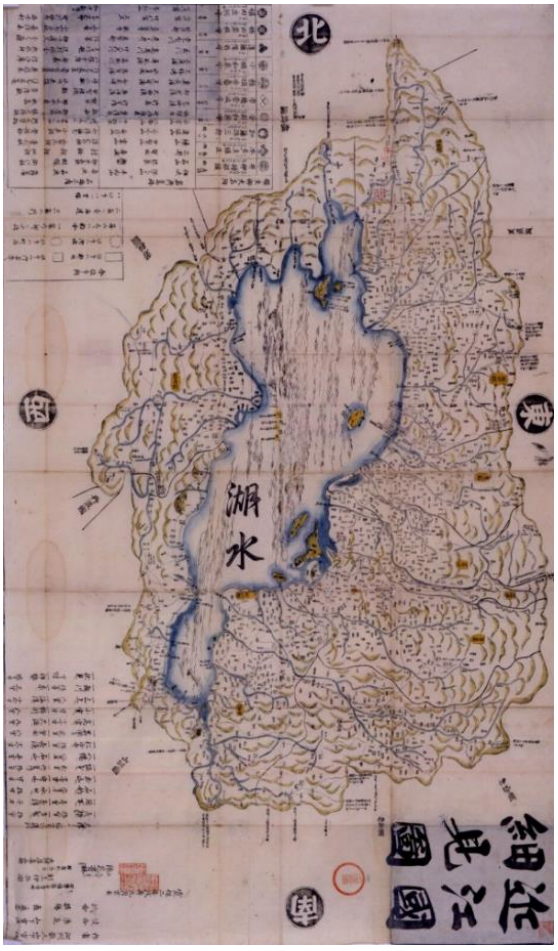


図 11　寛保２(1742)年　近江国大絵図
近江国細見図

鎌倉時代の末期、延暦寺の僧光宗（建治２-正平５/観応元（1276-1350）年）は『渓嵐拾葉集』（文保２（1318）年６月自序）を著し、「凡水海ノ形ハ琵琶ノ相貌也」（湖の形は楽器の琵琶の形と似ている）と記しました。光宗は近江の山々に修行し、山上から湖を見渡して、弁才天をイメージしたからこそ、湖の形が弁才天の奏でる琵琶の形に見えたのではないかと推測されています。琵琶湖の名称は楽器の琵琶の形に似ていることに由来し、その初見は戦国時代の明応年間（1492-1501 年）に活躍した景徐周麟の漢詩集『翰林葫蘆集』中の七言絶句「湖上八景」中の「琵琶湖」とされます。

ところが、江戸時代に至っても「琵琶湖」の名称はまだ一般的ではなく、「湖水」や「近江の湖」等と呼ばれていました。そうしたなか、竹生島信仰を持つ人々が「琵琶湖」の呼称を積極的に用い続けた結果それが広まり、明治時代に入って「琵琶湖汽船」「琵琶湖新聞」等、琵琶湖を冠した名称が次々と現れることによって、「琵琶湖」の名称が定着していったと考えられています。

琵琶湖の集水域と水込み被害　本県域の中央には琵琶湖があります。その周囲を伊吹、鈴鹿、比良（ひら）の山地が囲み（近江盆地）、そこに水源を発した大小 450 本の河川が琵琶湖に流れ込む一方、琵琶湖から流れ出す自然河川は瀬田川 1 本です。

歴史的にみると、こうした地形から琵琶湖岸域では琵琶湖の水位上昇による長期間の浸水（水込み）がほぼ隔年で発生していました。とりわけ明治 29（1896）年の琵琶湖大洪水では水位がB.S.L＋3.76mにまで上昇し、琵琶湖周辺のほとんどの地域が237日間にわたって浸水しました。これを契機として、明治 38（1905）年には瀬田川に南郷洗堰（なんごうあらいぜき）（瀬田川洗堰の前身）が完成し、琵琶湖の水位をはじめて人為的に調整することが可能になりました。



写真６　明治 29（1896）年の水害時の西川口町の様子
（大津市浜大津周辺）

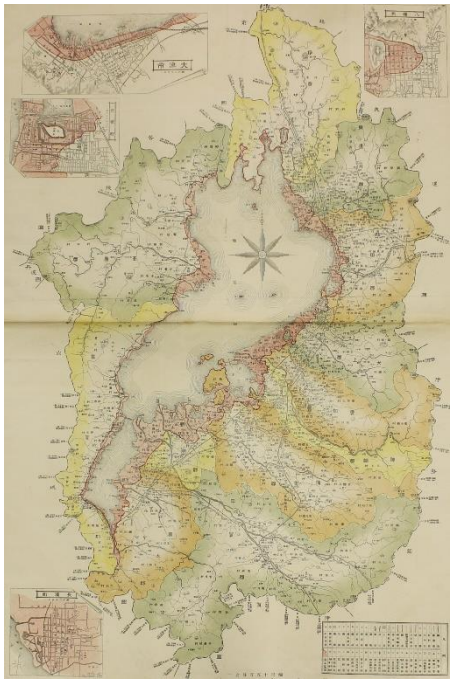


図 12　明治 29（1896）年
琵琶湖大洪水の浸水被害地

琵琶湖と水中遺跡　県域の中央には琵琶湖が満々の水をたたえています。また、その周囲にはかつて多くの内湖が点在していました。本県域に暮らす人々や行き交う人々は、こうした水域の環境を生存条件として共に歴史を歩んできました。

琵琶湖の水中遺跡は人々と琵琶湖が共に生きてきた証であり、琵琶湖という生存環境が持つ人々との関わり合いを明確に示しています。琵琶湖の水中遺跡の調査は、こうした水域における人々の活動痕跡、また生存環境の変化（地震や気候変動による災害等）の痕跡を知るうえできわめて重要です。

第３節　調査研究の歴史と成果

調査研究の歴史　江戸時代の中頃に活動した木内石亭（享保 10-文化５（1725-1808 年））は『東海道名所図会』にも紹介された著名人です。諸国を旅して二千余の珍石奇石を収集し、そのなかに含まれる石器や化石を分類するなかで石鏃の人工説等も唱えたことから、考古学の先駆者と評されます。

その著書『百石図』には「神槍」「天明三（1783）年癸卯四月一日、於湖東下笠七條浦漁人所得于網也」とあり、『奇石産誌』ではこれについて「長サ五寸余剱形也」としています。「神槍」は弥生時代の磨製石剣です。「下笠七條浦」は七条浦遺跡（草津市）であり、発掘調査では琵琶湖の水面下およそ１ｍの湖底から、弥生時代前期から中期の遺跡が見つかっています。

石亭の活動は琵琶湖の水中遺跡の調査研究の前史として特筆すべき足跡です。

琵琶湖の水中遺跡を考古学の対象とした調査研究は大正年間（1912-1926）にはじまります。大正 13（1924）年の葛籠尾崎湖底遺跡（長浜市）の発見が注目されて以来、令和６（2024）年に至る 100 年の歴史は下記のように区分できます（資料６表３）。



写真７　滋賀県指定有形文化財
（書跡・典籍、古文書の部）
木内石亭墓碑（守山市本像寺）

琵琶湖の水中遺跡の調査研究史

前史　　江戸時代
- 木内石亭の活動（『雲根志』等の執筆）

第１期　黎明期：大正年間（1912-1926）から昭和 36（1961）年
- 水中遺跡の発見と調査研究のはじまり。

第２期　進展期：昭和 37（1962）年から平成３（1991）年
- 琵琶湖開発事業等に伴う発掘調査の実施。
- 調査方法の発展。

第３期　展開期：平成４（1992）年以降
- 第２期の調査成果の総括。
- 大学等の学術研究による新たな展開

第１期は琵琶湖の水中遺跡の調査・研究の黎明期です。本県出身の小江慶雄（おえよしお）は漁業関係者が引き揚げた土器等を調査研究し、日本の水中考古学の礎（いしずえ）を築きました。日本の水中遺跡調査の出発点は琵琶湖にあるのです。

第２期は、滋賀県教育委員会事務局に埋蔵文化財専門職員（水野正好（まさよし））が配置されたことにはじまります。これによって、当時盛んであった内湖の開発（干拓）に対する行政的な措置がとられるようになり、昭和 47 年（1972）からの琵琶湖総合開発特別措置法に基づく琵琶湖総合開発計画に伴う調査へとつながります（資料６表５）。第２期は主に開発事業への対応として受動的な調査に終始した約 30 年でしたが、この間、調査技術は進展し、数多くの新たな発見や重要な調査成果が蓄積され、調査研究は大きく進展しました。



写真８　水中遺跡では初となる広範囲の発掘調査（森浜遺跡（高島市））の木製組物の出土状況

第３期は、主に第２期の琵琶湖開発事業に伴う現地発掘調査の整理調査を実施した期間です。全 15 冊の発掘調査報告書を刊行するとともに（資料６表７）、新たな開発事業への対応として、平安時代の神社跡等が見つかった塩津港（しおつこう）遺跡（長浜市）の発掘調査を実施しています。一方、新たな取組として滋賀県立大学や立命館大学、京都橘大学、滋賀県立琵琶湖博物館等が水中遺跡の学術目的の調査を実施しています。これらは調査の動機が、遺跡の保存を前提とした能動的な価値の追求にあるという点において、琵琶湖を中心とした本県の地域研究の深化と活性化に資するものです。

なお、これまでに琵琶湖を舞台として二つの世界会議が開催されています（資料６表３）。World Lake Conference（世界湖沼会議）は、滋賀県が提唱して昭和 59（1984）年に始まり（第１回会議）、その後も各国で世界の湖が直面する課題（水質や生態系等）とその対策について話し合われています（琵琶湖では平成 13（2001）年に第９回会議も開催）。International Conference on Ancient Lakes（世界古代湖会議）は琵琶湖博物館の開館を記念して平成９（1997）年に開催されました。その内容は古代湖の現況に関して生物ばかりでなく、文化的な視点からもはじめて科学的・歴史的に認識され、社会や環境の急速な変化により危機や脅威にさらされる湖沼の生物相や生息地の保全と活路について議論されました（資料１）。これらの会議によって琵琶湖での経験は世界に発信され、世界の湖が直面する課題解決に役立っています。

琵琶湖の水中遺跡の定義　本構想においては、「琵琶湖とその集水域の湖にある遺跡」を「琵琶湖の水中遺跡」と定義します。『県遺跡地図』によると、琵琶湖（大

津市南郷地先の瀬田川洗堰より上流）の水中遺跡は 77 遺跡を数えます。それに加えて琵琶湖の東岸域を中心に内湖（陸化した内湖を含む）にかかる水中遺跡 24 遺跡と余呉湖に 1 遺跡が知られるので、琵琶湖の水中遺跡は合計 102 遺跡となります（令和８（2026）年３月現在、資料６図 26～33、表８）。

水中遺跡の分布と種類　琵琶湖の水中遺跡の一部は竹生島（長浜市）や多景島（彦根市）、沖島（近江八幡市）といった湖中島周辺に位置しますが、内湖にかかわる遺跡も含めて、水中遺跡の大半は琵琶湖の湖岸域に立地します（資料４）。

自治体別での遺跡数は、次の通りです（令和 8 年 3 月現在）。

長浜市	21 遺跡
近江八幡市	21 遺跡
高島市	15 遺跡
大津市	13 遺跡
米原市	８遺跡
草津市	７遺跡
彦根市	７遺跡
東近江市	５遺跡
守山市	４遺跡
野洲市	１遺跡

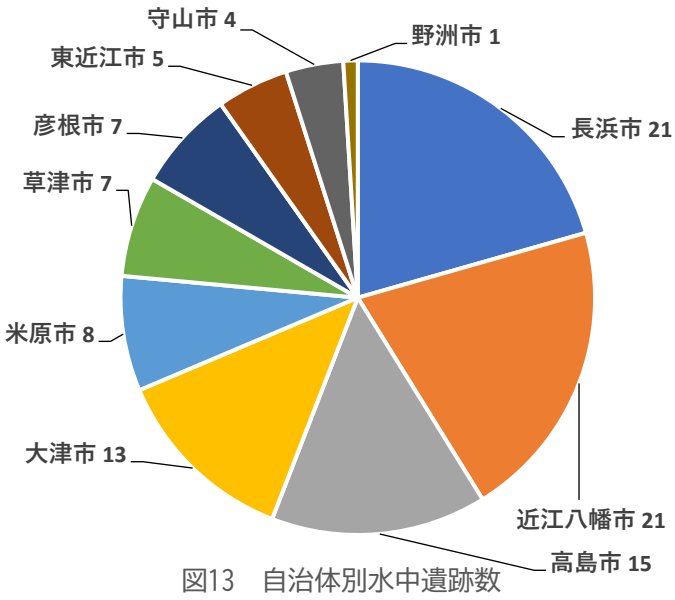


図13　自治体別水中遺跡数

種類別での遺跡数は、次の通りです（令和 8 年 3 月現在）。

集落跡	27 遺跡
城館跡	７遺跡
社寺跡	６遺跡
交通遺跡	２遺跡
港跡	２遺跡
貝塚	２遺跡
その他墓跡	２遺跡
散布地	55 遺跡

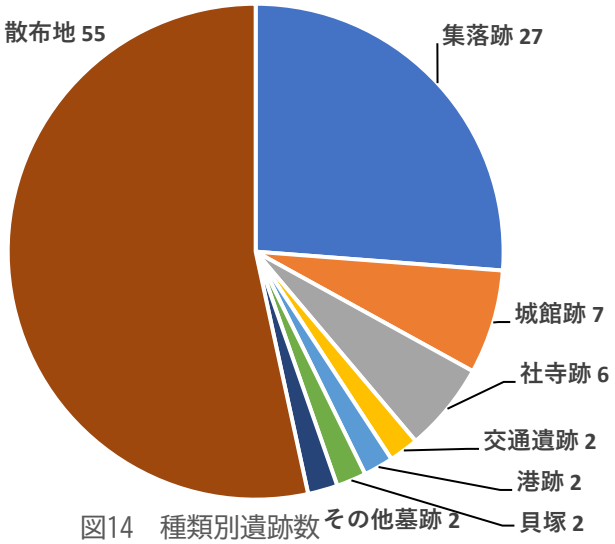


図14　種類別遺跡数

これらは当初から水中または水中と一体的に形成された遺跡と、当初は陸地に形成された後に水中に没した遺跡とに大別できますが、調査によって形成要因等を把握した遺跡は一部に過ぎません。

出土文化財（遺物）等の概要　琵琶湖の水中遺跡からの出土文化財等は、そのほとんどが琵琶湖開発事業や国道建設事業等に伴う、本県による発掘調査の成果物です。出土文化財の数量は収納用コンテナ（約 700×500×170 ㎜）換算で約 7,700 箱に及びます。また調査で作成した記録資料は、実測図面が約 340 冊（おおよそ 17,000 枚）、写真資料が約 800 冊（おおよそ 336,000 枚）を数えます。このほかにも葛籠尾崎湖底遺跡から引き揚げられた縄文時代以降の土器や、学術目的の調査で引き揚げられた出土文化財等があります（資料５）。

これらには旧石器時代以降の各時代の多種多様な出土文化財が含まれます。とりわけ、水中という立地環境によって、良好な保存状態で出土した木製品（丸木舟や木製農具、木簡、そして橋脚部材等）が数多く認められることは特筆されます。

第４節　琵琶湖の水中遺跡の特性

琵琶湖の水中遺跡は、琵琶湖を擁する本県ならではの埋蔵文化財であり、琵琶湖との深い関わりの中で育まれてきた本県の歴史を生き生きと物語る大切な資産です。大正 13（1924）年の葛籠尾崎湖底遺跡の「発見」に始まった琵琶湖の水中遺跡の調査研究の成果と、現在把握している 102 遺跡の水中遺跡の出土遺物等から、琵琶湖の水中遺跡の特性については、以下のように整理することができます。

１　原始以来の多種多様な遺跡が連綿と数多く存在

本構想においては「琵琶湖とその集水域の湖にある遺跡」を「琵琶湖の水中遺跡」と定義しています。102 遺跡を数える琵琶湖の水中遺跡のうち、最古は旧石器時代後期（約２万数千年前）の石器が出土した螢谷遺跡（大津市）で、縄文時代早期初頭にはじまる粟津湖底遺跡（大津市）等が続きます。その後も琵琶湖の周囲に暮らす人々が常に湖と関わりながら生きてきた証として、途絶えることなく水中遺跡が形成されます。『県遺跡地図』での分類では集落跡をはじめ、城館跡、社寺跡、交通遺跡、港跡、貝塚、その他墓跡、散布地があり、極めて多様です。そして湖岸域では今なお活発に生活が繰り広げられており、琵琶湖の水中遺跡は現在の集落とも一定の連続性を有しながら存在しています。

淡水湖の周りでこれだけの歴史文化を刻み、その証である水中遺跡がある湖は世界的に見ても稀有な存在です。琵琶湖はとても古い時代から文献記録を含めて文化的なつながりをたどることができるという点において、世界でも際立った存在といえます。

2　琵琶湖ならではの特色ある遺跡が存在

琵琶湖は本県面積の約６分の１を占めます。琵琶湖の水中遺跡の特性は、東西交通および南北交通の結節点に大きな湖があり、そこを舞台に人々の活発な活動があったことに由来します。縄文時代の丸木舟は尾上浜遺跡（長浜市）や長命寺湖底遺跡（近江八幡市）、水茎Ｂ・Ｃ遺跡（近江八幡市）、入江内湖遺跡（米原市）等で出土しています。弥生時代から古墳時代にかけての準構造船の部材は、赤野井浜遺跡（守山市）や入江内湖遺跡、松原内湖遺跡（彦根市）等から出土しています。

古代の橋脚遺構が見つかった唐橋遺跡（大津市）は、水域を渡る陸上交通に関わる遺跡であり、塩津港遺跡は水陸交通の結節点に営まれた港跡です。そして、そこで見つかった平安時代の神社跡や、縄文時代以降の土器等が継続的に出土する多景島遺跡（彦根市）は琵琶湖における祭祀に関わる遺跡です。また、完形の古代瓦が湖底に散布する赤野井湾湖底遺跡（守山市）や、完形の土器等が沈む葛籠尾崎湖底遺跡は、船の積み荷が水没した湖上交通にかかわる遺跡と言ってよいでしょう。

なお、赤野井湾湖底遺跡では古墳時代と推定されるエリの設置痕跡が検出されています。エリは今も使われる琵琶湖の伝統的な定置式の漁具で、琵琶湖を象徴する漁労文化の歴史を物語る遺構としてとても注目されます。



写真９　赤野井湾湖底遺跡の瓦出土状況

3　琵琶湖の変遷、地形・自然環境の変化等、多様な情報を内包

水中遺跡の成因はさまざまです。本来は陸地に形成された遺跡、あるいは集落そのものが水位変化や地殻変動によって水没して遺跡になった場合等があります。また、針江浜遺跡（高島市）の発掘調査で検出された弥生時代中期から後期頃の地震の痕跡（噴砂等）等、P29 表１に示した調査成果は、過去の地震の発生時期や規模等に関する情報を与えてくれます。水中遺跡の調査によって遺跡の形成時期や成因等を明らかにすることで、琵琶湖の水位変化や地殻変動の変遷を読み取ることも可能になります。とりわけ地震痕跡の調査の成果は、防災にも役立つ新たな情報をもたらしてくれます。

また、発掘調査で出土する動植物遺存体の解析、土壌の花粉分析、泥土の堆積状況は世界中で 20 ほどしかない古代湖（琵琶湖）のその時々の自然環境を復元し、変遷を明らかにする情報です。例えば、粟津湖底遺跡の第３貝塚で見つかった植物遺存体

層を分析したところ、縄文時代早期初頭の主要構成物はクリ、縄文時代中期前葉ではイチイガシ・トチノキ・ヒシ属であることがわかりました。縄文人が利用した堅果類の種類の転換の背景には、気候の温暖化に伴う周辺林相の変化があったと推測されています。水中遺跡の発掘調査に基づくこうした成果は、琵琶湖の環境保全を考える基本情報として役立ちます。

4　極めて良好な遺構・遺物の保存状態

水中遺跡は陸上の遺跡に比べて人の手が及びにくく、遺跡（遺構・遺物）の保存状態が良好です。例えば針江浜遺跡の弥生時代中期の集落跡は、水位上昇あるいは地盤沈下によって水没したと推定されます。水中遺跡となったからこそ、その後に復興されることもなく、水没当時のままの状態が遺跡として保存されました。

また、水中という立地環境は木製品や植物遺存体の劣化が進みにくいという特徴があります。尾上浜遺跡（長浜市）等の縄文時代の丸木舟や、弥生時代から古墳時代にかけての赤野井湾湖底遺跡の木製農具（木製鍬等）、唐橋遺跡の橋脚基礎部材や塩津港遺跡の木製神像や起請文木札等は、とても良好な保存状態で出土しています。

とりわけ縄文時代早期初頭の粟津第３貝塚の発掘調査では、木の実と貝が互層になったクリ塚が見つかり、その分析研究から縄文人の食糧全体のカロリー構成比や生業カレンダーが把握できました。これは世界的に見ても極めて稀な研究成果であり、粟津湖底遺跡に眠る同様の広大な貝塚は世界的な価値を持つといえます。



写真 10　粟津湖底遺跡のクリ塚

5　人類と生存環境との関係を見事に示すコンパクトな共生モデル

県域の中央には琵琶湖があり、その周囲にはかつて多くの内湖が点在していました。琵琶湖の周辺に住まう人々は琵琶湖とかかわることでしか生活が成りたたず、本県の歴史は琵琶湖という水域がある環境を生存条件として、いかに人が生きるかという模索を繰り返して、今日にたどり着きました。琵琶湖の水中遺跡はこうした生存環境における人類の活動痕跡であり、また生存環境そのものの変化（地震や気候変動による災害等）の痕跡を大地に刻んで、良好な保存状態のまま今日に伝えています。これは人々と琵琶湖が共生しながら生きてきた証であり、人類と生存環境（水域）とが見事に関わり合ってきた歴史を明確に示すコンパクトな共生モデルとなり得るものです。

第４章　保存活用上の課題

埋蔵文化財は土地に埋蔵されることから、そのままでは視認することが難しい状態にあります。水中遺跡はその立地特性から、陸上の遺跡に比べて、さらに視覚的に認知することが難しく、それへのアプローチにも困難が伴います。水中遺跡の価値の「見える化」こそ、すべての課題に共通する根本的なキーワードです。

こうした特性を持つ琵琶湖の水中遺跡について保存活用を進めようとすれば、まず大前提として県民がその存在を認知している状態であること、ついでその価値を理解している状態であることがあげられます。水中遺跡に対する県民の認知度を高め、理解を進めていくことが、その保存活用をすすめるために取り組むべき最初の課題です。

琵琶湖の水中遺跡の保存活用を推進するにあたり、その価値の「見える化」と県民の認知度の向上を共通の課題と認識したうえで、以下に「１　調査研究上の課題」「２保存保管上の課題」「３　公開活用上の課題」の詳細について整理します。

１　調査研究上の課題

分布状況の把握　水中遺跡の「見える化」の第一歩は所在、分布状況の把握です。『県遺跡地図』によると、本構想の定義による琵琶湖の水中遺跡は 102 遺跡（周知の埋蔵文化財包蔵地）です。これらは大きく分けて、①漁業関係者等による遺物の偶然の引き揚げ等によって把握した遺跡、②内湖の干拓等の開発工事による不時発見によって把握した遺跡、③積極的な分布調査によって把握した遺跡があります。

①の具体例として葛籠尾崎湖底遺跡（長浜市）、②の具体例として大中の湖南遺跡（近江八幡市）等があげられます。これらの多くは埋蔵文化財保護行政が本格的にはじまる昭和 30 年代後半から 40 年代前半（1960～1970 年頃）以前に見つかった遺跡です。こうした偶然の発見は時代を問わずいつでも起こり得ますが、水中遺跡は陸上の遺跡に比べて人の手が及びにくいという立地特性から、陸上遺跡に対する関心と同様の関心は向きにくく、行政による③積極的な水中遺跡の所在、分布状況の把握調査は行われにくい状況にあります。

琵琶湖開発事業に先立つ把握調査　③積極的な水中遺跡の分布調査には、開発に先立つ把握調査と、学術目的や保存目的の調査があります。前者は、本県が琵琶湖開発事業に伴って実施した調査実績しかありません。この分布調査は、主に湖岸堤管理用道路建設予定地等を対象として、昭和 48（1973）年度と昭和 55（1980）年度の２回にわけて実施しました。琵琶湖は最小幅（大津市今堅田地先と守山市今浜町地先の

間）の北側を北湖（ほっこ）、南側を南湖（なんこ）といいます。１回目の北湖での調査では、湖岸や湖底での遺物（土器等）の散布を確認することで遺跡の把握を試みました。その調査方法は湖岸の踏査、湖底の浅位部での素潜り、貝引き網での土砂採集です。

一方、南湖の西岸では、河川からの土砂堆積等が厚いため、北湖で実施したような分布調査では遺跡の有無の判別は困難とされ、浚渫を伴うような工事の実施にあたっては、湖岸や湖底での遺物散布の有無に関わらず、潜水士によるジェットポンプを用いた試掘調査等により遺跡の確認を行いました。

この２回にわたる分布調査の終了段階において、琵琶湖の水中遺跡は 20 遺跡程度を把握しましたが、これらの隣接地にはさらに埋蔵文化財が存在する可能性があることや、他にも未知の遺跡（周知されていない埋蔵文化財）が多くあることを前提として開発と遺跡の保護との調整を進めた結果、昭和 56（1981）年度から平成３（1991）年度にかけて、琵琶湖開発事業に伴う発掘調査は約 30 遺跡に及びました。

これにより、琵琶湖の水中遺跡の把握と周知、実態解明は大きく進展したとはいえ、こうした分布調査の方法では遺跡の所在、分布状況の把握は充分に達成できないことがわかりました。

また、現状では琵琶湖開発事業の影響を受けなかった個所については、水中遺跡の分布状況の把握は充分でないままとなっています。

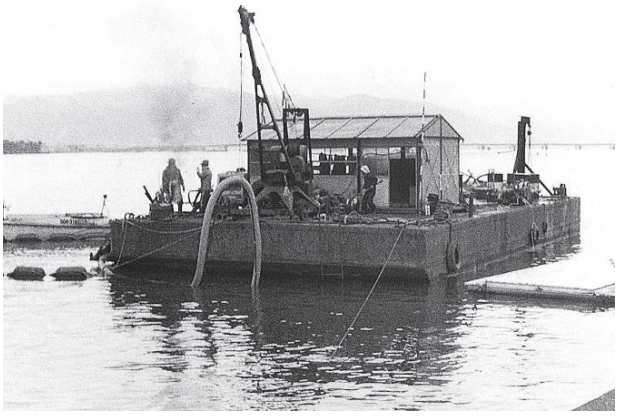


写真 11　大江湖底遺跡（大津市）での潜水調査作業台船状況

琵琶湖の渇水時の把握調査　平成６（1994）年９月の琵琶湖の水位低下に際し、坂本城跡（大津市）において湖中から石垣が姿を現しました。この時、本県は大津市とともに石垣の実測と写真による記録を作成し、周辺に散布する遺物の取り上げを行いました。しかしながら、渇水時を利用しての琵琶湖岸全域を対象とした水中遺跡の所在、分布状況の把握調査は、これまで組織だって行われたことはありません。

無人潜水機による把握調査　無人潜水機による学術目的や保存目的の調査は立命館大学、認定 NPO 法人びわ湖トラスト、滋賀県立琵琶湖博物館、そして滋賀県等が実施しています。

立命館大学は平成 22（2010）年から、そして平成 29（2017）年からは認定 NPO 法人びわ湖トラスト等と共同で、葛籠尾崎湖底遺跡において水中ロボット（自立型無人潜水機）を用いた調査を続けており、これまでに 100 点前後の土器の可能性がある物

体を確認し、遺跡内で土器の分布状況に時期差がある可能性が高いこと等がわかってきました。滋賀県はこうした調査を受けて、令和７（2025）年度に文化庁事業「令和７年度日本における水中遺跡保護体制の整備充実に関する調査研究事業」を受託した独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 からその一部（パイロット事業）を受託し、葛籠尾崎湖底遺跡の立命館大学調査個所を対象に、遠隔操作型無人潜水機による詳細調査（スキャンマッピング撮影および３次元化調査）を実施しました。調査の結果、水深約 63～70mの湖底について写真地図（東西約 200m、南北約 50m）を作成し、50 点以上の遺物の散布状況等を把握することに成功しました。

こうした無人潜水機による調査は、特に潜水困難な深水域（水深 30m以上）に所在する水中遺跡の把握には有効ですが、これまでに調査が実施された面積は琵琶湖全体から見ると、ごくわずかにすぎません。無人潜水機による調査の実施には、一定の経費と時間が必要です。

絵図や史料、伝承等に基づく把握調査　滋賀県立大学では、平成９（1997）年から伝三矢千軒遺跡（高島市）や相撲湖底遺跡（西浜村の水没伝承、長浜市）、尚江千軒遺跡（米原市）といった水没伝承のある遺跡（集落跡）やその周辺での学術目的の調査を継続的に実施しています。そして、令和元（2019）年からは米原市が調査主体となり、大学と連携・協力する体制で朝妻沖湖底の遺跡調査に着手し、潜水による遺構や遺物の把握調査、地質学的手法による地盤沈下の解明等の研究を進めています。

また、認定 NPO 法人びわ湖トラスト等は葛籠尾崎湖底遺跡の水域における地図作成や湖水の流況観測、底泥コアの採取による C14 年代測定や DNA 解析を継続的に実施しています。そして、令和７（2025）年にはこの水域において大規模な堆積異常があることを発見しています。

水中遺跡については伝承や絵図、史料等の文献研究のほか、地理学や自然科学等の分野においても関連する調査研究が進められていますが、それらを総合的に把握し、水中遺跡にかかわる基本情報として整理するまでには至っていません。



図 15　寛文 2（1662）年の大地震の被害状況
（「海へ崩申候」等）を示す膳所城之図（部分）

調査の体制と能力　昭和 48（1973）年からの琵琶湖開発事業に伴う調査を通して、本県の水中遺跡の調査技術は向上し、調査体制も充実しました。ところが、平成３（1991）年度に同事業に伴う現地発掘調査が終了し、平成 25（2013）年度にはその整理調査も終了します。併せて潜水士資格を持つ専門職員や保存処理の専門教育を受けた職員も退職した現在、これまでに培った水中遺跡の調査経験や調査技術は充分に継承されず、本県の水中遺跡の調査体制は以前と比べると弱体化し、調査能力も低下しています。



写真 12　潜水調査の様子（多景島遺跡）

２　保存保管上の課題

現地保存の懸念と危機　琵琶湖の水中遺跡は『県遺跡地図』に掲載し、周知の埋蔵文化財包蔵地として現地保存され、文化財保護法に基づく保護の対象となっています。琵琶湖の水中遺跡には土に埋もれた状態の遺跡と、遺構や遺物が湖底に露出している状態の遺跡があります。湖岸水域に位置する遺跡の多くは前者にあたります。湖岸域の水中遺跡は陸上にある遺跡と同様に、人為（レジャー等）や開発（漁業関係を含む土木工事等）の影響を受ける可能性があり、現地保存に懸念があります。

後者については湖岸水域の坂本城跡（大津市）から、浅水域の粟津湖底遺跡（大津市）、深水域の葛籠尾崎湖底遺跡（長浜市）まで、そのあり方はさまざまです。そして、このうちの湖岸水域の水中遺跡は、琵琶湖の渇水時に地上に露出する場合もあるため、その際には人為（配慮のない現地見学による踏み荒らし等）や乾燥（木製品等の劣化）によって遺構や遺物の現地保存に懸念が生じます。また、浅水域や深水域の遺跡についても、季節等によって変化する湖水流や予期しない人為（漁網や船のアンカーの投入、地質調査のためのボーリング等）の影響を受ける可能性があります。事実として、令和７年度に本県が実施した葛籠尾崎湖底遺跡の調査では、湖底面に物体を引きずったような、直線的な溝状の痕跡を複数個所で認めました。これは停錨（アンカーリング）の痕跡とみられ、溝状痕跡の終点付近では古墳時代の土師器甕が破片化（破損）した状態でみつかっています。水中遺跡はアプローチも視認も困難であり、その状態の把握が課題です。そして、上述の状況をみると、深水域に所在する遺跡であっても、その現地保存に対しては相当な危機感をもって臨む必要があると考えられます。しかし、現状ではこうした危機に対し、充分な措置（現地保存されている水中遺跡の存在の周知化、水中遺跡の価値の普及や啓発等）をとっているとは言えません。

指定による保存　水中遺跡は立地特性から、陸上の遺跡に比べて開発等による保存の危機は少ないものの、同じ理由から調査にも困難が伴います。現時点では、陸化した史跡大中の湖南遺跡や高島市史跡大溝城跡を除いて、重要な水中遺跡の内容や範囲等を総合的に把握し、本質的価値を明らかにして、文化財保護法による史跡指定や登録記念物への登録、あるいは県や市町の文化財保護条例によって保存の確実化や認知度の向上を図るまでには至っていません。

水中遺跡からの出土文化財についても同様で、現状では文化財保護法による重要文化財等の指定を受けたものはありません。また、滋賀県文化財保護条例による滋賀県指定有形文化財（考古資料の部）としても烏丸崎遺跡（草津市）出土木偶（弥生時代中期）しかなく、市町の文化財保護条例による指定を含めても長浜市指定（考古資料）の葛籠尾崎湖底遺跡出土遺物（一括）しかありません。



写真 13　滋賀県指定有形文化財
（考古資料の部）烏丸崎遺跡出土木偶
（弥生時代中期）

木製品の保存環境と保存処理　木製品や動植物遺存体等が良好な保存状態で出土することは、琵琶湖の水中遺跡の特性のひとつです。本県が所有する水中遺跡からの出土文化財や発掘調査の記録資料は滋賀県埋蔵文化財センターが管理し、県内４か所の収蔵施設で保管しています。このうち重要な木製品は埋蔵文化財センターや温湿度管理のある滋賀県立安土城考古博物館の特別収蔵庫で保管しています。

そして、大半の木製品はポリエチレングリコール含浸法（以下「ＰＥＧ含浸法」という）等による保存処理後、やむを得ず温湿度管理機能のない収蔵庫で保管しています。加えて、現在、本県では保存処理の専門職員を配置しておらず、今後出土する木製品や金属製品等の保存処理や、過去に保存処理を行った木製品の経年劣化等に対して、本県自らが適切に対応することができない状況にあります。

記録資料のデジタル化　発掘調査の記録資料は、現地保存できなかった遺跡の情報を伝えるかけがえのない一次資料であり、恒久的かつ適切な保存管理を行う必要があるとされています。琵琶湖開発事業に伴う発掘調査以来、長年にわたって蓄積してきた記録資料の大半は、実測図面等の紙媒体と、デジタルカメラ導入以前のフィルムと焼き付けした印画紙です。この写真フィルムの経年劣化や退色等への対応のためには、デジタル化による複製資料の作成を中心として、発掘調査記録の一次資料の恒久的保存のための対策が必要です。しかしながら、現状での対応は、展示や図書掲載等の活用機会が多い一部の写真フィルムのデジタル化に留まっています。

3　公開活用上の課題

価値の普及　琵琶湖の水中遺跡については、琵琶湖博物館（草津市）や葛籠尾崎湖底遺跡資料館（長浜市）に常設展示があるものの、その内容はテーマに沿って限定的です。近年では、新聞やテレビで琵琶湖の水中遺跡が扱われる機会もあり、徐々にその認知度は高まりつつありますが、現状では琵琶湖の水中遺跡が持つ多様で豊かな価値のうち、その一部（歴史や文化財的価値）について取り上げられているにすぎず、水中遺跡が持つ滋賀の宝としての本来の価値は充分に伝わっていない状況です。

多様な価値の活用　琵琶湖の水中遺跡は、歴史や文化財的価値のほかにも社会的価値、経済的価値等、多様で豊かな価値を持ちます。社会的価値としては、地域の誇りの醸成やまちづくりのシンボルとして活用されることが期待されますが、水中遺跡はその立地特性上、視覚的に認知することが難しい現実があります。また、経済的価値は観光等への活用が想定されますが、同じ理由から、アプローチに困難が伴います。いずれせよ水中遺跡の価値の活用には共通する難しさの克服が必要となります。

他分野との情報共有と連携　琵琶湖の水中遺跡が待つ多様で豊かな価値を顕在化し最大化するには、琵琶湖と人の関わりを示す陸上の遺跡や他の文化財はもとより、自然史や環境史等も含めた滋賀の歴史全体の中に、水中遺跡を位置づけることが必要です。例えば、琵琶湖の水中遺跡からはその土地の地質や自然環境、災害に関わる情報も得られます。これまでの発掘調査で得た調査各地での地層の堆積状況や土壌に含まれる動植物遺存体や食料残滓等にかかる情報は、自然科学分析等も含めた調査研究によって自然環境等の復元の有力な手掛かりになるものです。また、地震の痕跡（土地の液状化現象による噴砂等）や広域火山灰は災害履歴を把握するうえで有効であり、環



写真 14　針江浜遺跡における噴砂の痕跡
（白く表示）



写真 15　針江浜遺跡の噴砂の痕跡が見える土層断面

境保全や防災等の分野の調査研究や施策立案等の観点からの活用が期待できます。とりわけ琵琶湖開発事業に伴う発掘調査で検出した地震の痕跡に関する情報は、当時の通産省工業技術院地質調査所と共有し「地震考古学」の進展に寄与しました。

しかしながら、調査成果の大半は発掘調査報告書による情報公開に留まり、環境保全や防災等の分野、そして学校教育との情報共有による有効な活用が不足しています。

表１　滋賀県内の発掘調査でみつかった地震跡

※着色した遺跡は水中遺跡を示す

No.	遺跡名	所在地	調査年	立地	種類	推定規模	時期
1	津田江湖底遺跡	草津市下物町地先	1987	湖　底	噴砂	M7.5前後	縄文時代中～晩期
2	北仰西街道遺跡	高島市今津町北仰	1986	平　地	噴砂	M7.5前後	縄文時代晩期前半
3	針江浜遺跡	高島市新旭町針江浜	1987～89	湖　底	噴砂	M7.5前後	弥生時代中期中葉
4	烏丸崎遺跡	草津市下物町地先	1987・88	湖　岸	噴砂	M7.5前後	弥生時代中期中葉
5	正言寺遺跡	長浜市南田附町	1991	低　地	噴砂	M7.5前後	弥生時代中期中葉
6	湯ノ部遺跡	野洲市西河原	1991	低　地	噴砂	M7.5前後	弥生時代中期
7	八夫遺跡	野洲市八夫	1998	低　地	噴砂・噴礫	M7.5前後	弥生時代中期
8	長野遺跡	愛知郡愛荘町長野	2006	平　地	噴砂		古墳時代後期以降
9	襖　遺跡	草津市御倉	1989	三角州	噴礫		古墳時代以降
10	苗鹿遺跡	大津市苗鹿	1996	台　地	地割れ	M7.4～7.6	古墳時代中期以降
11	塩津港遺跡	長浜市西浅井町塩津浜	2007～9	湖　岸	噴砂	M7.4前後	12世紀後半頃
12	烏丸崎遺跡	草津市下物町地先	1991	湖　岸	断層・側方移動	M7.6前後	13～14世紀以降
13	金田遺跡	彦根市金田町宮前	2003	平　地	噴砂		13世紀以降
14	野尻遺跡	栗東市野尻町	1991	扇状地	断層・液状化	M7.6前後	鎌倉～江戸中期
15	加茂遺跡	近江八幡市加茂町	1990	低　地	地割れ・噴砂	M7.6前後	14世紀以降
16	堤　遺跡	野洲市堤	1992	旧堤防	噴砂	M7.6前後	15世紀以降
17	八坂東遺跡	彦根市八坂町	2002・3	湖　岸	噴砂・井戸枠ずれ		室町時代以降
18	穴太遺跡	大津市穴太	1989・90	扇状地	地割れ・噴砂	M7.4～7.6	平安時代以降
19	五斗井遺跡	蒲生郡日野町五斗井	1990	山　麓	断層・噴砂	M7.4～7.6	平安時代後期以降
20	蛍谷遺跡	大津市石山寺	1984	川　底	噴砂	M7.4～7.6	平安時代末以降
21	長浜町遺跡	長浜市元浜町	1996	低　地	液状化	M7.8前後	1586（天正13）年
22	大中の湖南遺跡	近江八幡市安土町下豊浦	2001	湖　岸	抜け上がり	M7.6前後	江戸時代



写真 16　大中の湖南遺跡の突堤状第 2 遺構
（地盤が沈下し、側板が地表から浮き上がったように見える。
地震による土地の液状化現象が原因と推定されている）

第５章　保存活用を推進するための基本構想

琵琶湖の水中遺跡は、琵琶湖との深い関わりの中で育まれてきた本県の歴史を生き生きと物語る、滋賀ならではの大切な資産です。遺跡の保存状態は陸上の遺跡に比べて良好であり、かつ時代や種類も多様で、豊かな内容を持っています。また、水中という保存環境により、木製品や動植物遺存体等の遺物も良好な保存状態にあります。そして、それらは、湖上での生業や交通等に関わる琵琶湖ならではの活動の足跡を含み、また人々の歴史だけでなく、世界中で 20 ほどしかない古代湖であればこその自然環境や地殻変動の変遷、水害や震災の履歴も読み取ることができます。歴史的価値や文化財的価値のみならず、自然環境保全や水害・震災等の防災に資する価値も持っているのです。人類と生存環境（水域）とが見事に関わり合ってきた歴史を明確に示すコンパクトな共生モデルとして世界的な価値をもつといえます。

琵琶湖の水中遺跡の保存活用にあたっては、それが持つこうした多様な価値について、子どもから大人までの幅広い世代の県民が認識し理解を深めると同時に、誇るべき県民の財産としてともに学び、共有化することが重要です。そして、その保存活用は「母なる湖　マザーレイク」を中心に据えた「健康しが」の実現につながり、本県の未来に資するものです。琵琶湖の水中遺跡の保存活用は、滋賀のこうした未来の発展を目指し、以下の方針に基づき本構想を推進していきます。

第１節　本構想を推進するための方針

１　調査研究を推進するための方針

所在把握調査の実施　琵琶湖全域を対象にした悉皆的な遺跡分布調査はこれまで実施したことがなく、未知の遺跡が存在する可能性は高いといえます。水陸を問わず遺跡の所在や内容を把握することは、遺跡それぞれの価値に応じて適切に保存する上で必要な基本的業務として、不断に取り組むべきこととされています。ついては琵琶湖全域を対象に水中遺跡の分布調査を行い、遺跡地図等の整備充実を進めます。

専門人材の育成と環境整備　埋蔵文化財包蔵地の所在・範囲の把握は、本来市町の事務です（平成 10 年９月 29 日付け庁保記第 75 号文化庁次長「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について（通知）」）。琵琶湖には 10 市の境界があり、それぞ

れの市域内の水中遺跡（埋蔵文化財包蔵地）の取り扱いは陸上の遺跡と同じであり、文化財保護行政としてはこれらを一体として把握する必要があります。

現在、各市は埋蔵文化財専門職員（専門人材）を配置し必要な調査能力を有しています。しかしながら、水中遺跡は陸上の遺跡とは異なる調査手法や体制整備、一定の期間や経費を必要とするため、当面は国や大学等の研究機関および関係機関、また有識者の助言指導も得ながら、県市が連携して計画的に調査をすすめることとします。そして、こうした調査の過程を実地研修の場として活用することで、水中遺跡の調査の考え方や技術、ノウハウの普及を図り、それぞれが自立的に水中遺跡の調査研究、あるいは保存整備に取り組むことができる環境を整えます。その実現にあたっては、数的に限りのある専門人材の水中遺跡調査等に関する能力の構築と向上（キャパシティ・ビルディング）を図るとともに、若手専門人材の育成を推進することとし、その拠点施設として滋賀県埋蔵文化財センターの機能の強化、充実を図ります。

総合調査と地域研究　重要遺跡を含む琵琶湖の水中遺跡の価値を一層明らかにするため、関連分野との情報共有や基本情報の集約と整理を進めて、水中遺跡の総合的な把握に努めます。もとより、琵琶湖の水中遺跡はそれだけで存在するわけでないので、水陸の遺跡を一体的に捉えて、滋賀の地域研究を深めていく必要があります。それは琵琶湖を中心とした地域研究の活性化とも言い換えることができます。その成果を唯一無二の滋賀ならではの宝（価値）として発信し、それを子どもから大人までの幅広い世代の方々が共有し、本県と琵琶湖への誇りと愛着を深めることは、滋賀の未来の発展に資すると考えています。



写真 17　保延（ほうえん）３（1137）年銘の起請文木札（きしょうもんきふだ）（塩津港（しおつこう）遺跡）

２　保存保管を推進するための方針

指定等による保存　分布調査によって所在等を把握した琵琶湖の水中遺跡は、遺跡地図等によって周知化し、その保存についてまずは県民、そして直接的なステーク・ホルダーである漁業関係者等の理解が得られるよう努めます。そのうえで、さらに詳細な調査を推進し、歴史上、学術上の価値が明らかとなり、保存すべき範囲を特定した水中遺跡については、文化財保護法による史跡指定、あるいは県や市町の文化財保護条例による史跡指定を促進することによって保存の確実化を図ります。また、文化財保護法に

よる「登録（登録記念物）」によって、広くその認知度の向上や保護を図ります。

また、水中遺跡からの出土文化財（遺物）についても、塩津港遺跡（長浜市）の平安時代の神社遺構に関わる神像や起請文木札をはじめとした重要な出土文化財については調査研究を進めて価値を明らかにし、重要文化財指定等に向けた取り組みを推進します。あわせて、県や市町の文化財保護条例による指定を促進することで広くその認知度の向上や保存の確実化を図ります。

保管環境の確保　良好な保存状態で出土する木製品等は、琵琶湖の水中遺跡の価値を構成する重要な要素です。これまでに出土した木製品等については、ＰＥＧ含浸法等による保存処理を施し、重要性や活用の可能性を踏まえて区分を行い、保管しています。今後もその特性に対応した適切な保管環境（温湿度管理が可能な保管場所）を確保し、保存処理後のメンテナンスや、新たな保存処理に対応できる知識や技術を持った人材の育成を推進します。

デジタル化による保存　発掘調査の記録資料（発掘調査報告書、実測図面、写真フィルム等）については、古いものは作成から 50 年近くが経過しています。これらの恒久的な保管には経年劣化の防止と、劣化に備えた複製等による二次資料の作成が必要となるため、まずは記録資料の現時点での経年劣化状況等の現状把握を進めます。そのうえで劣化の進度と資料の特性に応じた対策を検討し、優先順位や資料の選択を行い、劣化防止のための保管環境の確保と、デジタル技術を使った二次資料の作成を計画的に進めます。その際には、本県が埋蔵文化財センターで保管する水中遺跡以外の遺跡の記録資料も一括し、今後の情報公開や活用を見据え、確実で効率的な保存と管理ができる方法を導入し、総合的な保存と活用を図ることが可能な管理環境の整備を検討します。

３　公開活用を推進するための方針　－価値の普及と５つの連携－

価値の普及　琵琶湖の水中遺跡の価値を多くの人がいつでも学び、共有できるようにするためには、その価値を伝えるにふさわしい展示公開が必要です。今後実施する調査研究の成果等を速報的にいち早く展示公開する場も必要です。そうした専門施設として現在すでに滋賀県立琵琶博物館があり、滋賀県立安土城考古博物館や長浜市長浜城歴史博物館等の県市町立博物館があります。また、研究機関として滋賀県立大学や立命館大学等があります。滋賀県立琵琶湖博物館は展示公開や調査研究はもとより、観光分野等と連携した情報発信についても重点的に取り組んでいます。

琵琶湖の水中遺跡が本県の歴史を生き生きと物語る滋賀の宝となるためには、こう

した諸機関等と連携し、琵琶湖の水中遺跡を陸上遺跡と一体的に捉えて地域研究を深め、その公開活用を図ることが必要です。そのための拠点施設として、滋賀県埋蔵文化財センターの機能の強化、充実を図ることとすることとし、幅広い世代の多くの人々とその価値、すなわち、人類と水域という生存環境とが見事に関わり合ってきた歴史を明確に示すコンパクトな共生モデルとしての琵琶湖の水中遺跡の価値を共有することで、広く滋賀の未来の発展に資する人材の育成につなげます。

滋賀県埋蔵文化財センターの機能充実　本県には、昭和 55（1980）年に設置した埋蔵文化財センターがあります。琵琶湖開発事業に伴う水中遺跡の発掘調査の出土文化財（遺物）等もここで収蔵保管しています。しかしながら、設置から 46 年が経過し施設の老朽化が進むとともに、文化財を取り巻く社会情勢が大きく変化するなかで、現在の埋蔵文化財センターは時代の要請に充分に応え得るほどの機能を持たず、その脆弱さが目立っています。

本構想に基づく水中遺跡の保存活用の実施にあたっては、調査研究、保存保管、公開活用のどの段階においても拠点が必要です。本県では、水陸の遺跡を総合的に保存活用する埋蔵文化財センターを「健康しが」を実現する基幹施設の一つに位置付け、その機能の強化、充実を図ることで、本構想の着実な実現につなげます。

教育分野との連携　教育分野において文化財の活用はかねてより注目されてきたところです。水中遺跡が持つ多様で豊かな価値を、直接的に県民に伝えようとする場合、学校教育との連携は大切です。例えば、県内の小学５年生は学習船「うみのこ」に乗って、琵琶湖を舞台にした宿泊体験型の教育に参加します（びわ湖フローティングスクール）。子どもたちがこうした機会に、水中遺跡について学ぶこと（歴史、防災、環境等）は、びわ湖学習にとっても効果的でしょう。

琵琶湖の水中遺跡についての学習を、こうして学校教育に必要なものとして位置付け実践するためには、それを実現する仕組みづくりや体制の構築が必要です。それは、例えば水中遺跡関係の展示施設の充実であり、また水中遺跡の現地公開、あるいはデジタル技術による「見える化」の方法等の具体化があげられます。



写真 18　びわ湖フローティングスクールの学習船「うみのこ」

社会分野との連携　琵琶湖を中心とした地域研究や、先端技術を用いた水中遺跡の「見える化」等のさまざまな手法によって、水中遺跡の価値の顕在化に努め、それを唯一無二の滋賀ならではの宝として発信することに努めます。そのことによって、琵琶湖の魅力を高め、県民が琵琶湖を大切に思う気持ちを育み、地域づくりや、まちづくりのシンボルの一つとして水中遺跡の活用を図ります。そして、こうした地域づくり、まちづくりを来訪者（観光客）にも見てもらうことで、地域の誇り（シビックプライド）の醸成を推進し、人づくりにつなげます。



写真 19　長浜市湖北町尾上（おのえ）自治会が運営する葛籠尾崎（つづらおざき）湖底遺跡資料館

観光分野との連携　「シガリズム」は琵琶湖をはじめとした自然と歩みをそろえ、ゆっくり、ていねいに暮らしてきた滋賀の時間の流れや暮らしを体感することで心のリズムを整える新たな旅として、滋賀県が提案しています。そして「琵琶湖一周」の略称に由来する「ビワイチ」は「シガリズム」のトップコンテンツとして、サイクリ



図 16　「シガリズム」が大切にすること

ングやツーリング、観光船等によって、多くの人々が琵琶湖の周遊を楽しんでいます。

水中遺跡のこうした観光活用の先行事例として、滋賀県立琵琶湖博物館では、無人潜水機を活用した学芸員の解説付き特別ツアーの造成を計画しています。水中遺跡のこうした観光活用は単に集客を目的とした一過性の取組ではなく、こうした事例のように調査研究の成果を活かしつつ、例えばデジタル技術による水中遺跡の「見える化」の手法を検討し、深みのある高い価値と唯一無二の魅力をわかりやすく丁寧に伝えることとします。

そのうえで、各種ステーク・ホルダーである漁業関係者、観光事業者（観光船、カヌー・カヤック、ダイビングショップ等）および行政関係諸機関（国市町、県庁関係課等）との調整・連携を図り、遺跡の保存に配慮しつつ、上質で持続可能な活用を行うことにより、琵琶湖の水中遺跡の魅力発信に努めます。

デジタル技術による「見える化」　水中遺跡のほとんどは湖岸や湖底、さらには湖底の堆積土に埋もれた状態にあるため、視覚的に認知することが難しくアプローチにも困難が伴います。このため、水中遺跡の現地活用にあたっては、遺跡の存在を体感できるよう、無人潜水機を活用した画像や動画の撮影、あるいは発掘調査成果等のこれまでの知見を活かした仮想現実（ＶＲ）や拡張現実（ＡＲ）等による水中遺跡の「見える化」を図ります。琵琶湖岸の美しい景観と先端技術で「見える化」した水中遺跡の融合によって、湖岸で体験できる新しい琵琶湖との親しみ方を提案します。



写真 20　無人潜水機で撮影した葛籠尾崎湖底遺跡の水深約 65m の湖底に沈む土器等の様子

防災分野との連携　水中遺跡は人類の活動痕跡であるばかりでなく、琵琶湖という生存環境そのものの変化（地震や気候変動による災害等）の痕跡を大地に刻み、良好な保存状態のまま今日に伝えています。そして、琵琶湖の水中遺跡のこれまでの発掘調査成果や出土文化財等からは、災害に関わる情報も数多く得られています。

こうした情報、例えば水中遺跡の成因にかかる情報（陸地に形成された後に水中に没した等）は災害の履歴解明につながることから、防災や減災といった分野の調査研究や施策立案、あるいは防災教育等への取り組みに資することが見込まれます。ところが、そうした調査成果の大半は発掘調査報告書による情報公開に留まることから、これまでは関連分野との情報共有に難点がありました。ついては水中遺跡にかかる情報を文化財保護以外の分野とも共有することで、防災減災等にかかる分野においても活用できるよう努めます。



写真 21　針江浜（はりえはま）遺跡（高島市）のヤナギの埋没林（まいぼつりん）
同一方向に倒れる埋没林は、弥生時代の地震による土地の液状化あるいは津波の影響を示す

環境分野との連携　水中遺跡の発掘調査で得た土層堆積や土壌、動植物遺存体、食料残滓等にかかる情報は、自然環境等を復元する有力な手掛かりです。例えば動植物遺存体を対象にした自然科学分析の調査研究のさらなる推進は、過去の自然利用とその環境影響評価に有効であり、琵琶湖を切り口とした持続可能な社会構築への目標（MLGs：琵琶湖版の SDGs）のための過去からの指針を示すことにつながります。

また、粟津（あわづ）湖底遺跡においては、琵琶湖の水質汚濁が進む以前、水面下に貝塚の堆積が目視できました。坂本城跡（大津市）や多景島（たけいしま）遺跡（彦根市）、米原市の朝妻（あさづま）地先の湖底等については、水中に潜ることで、今も遺構や遺物を目視できます。こういった遺跡の現状を活用の取組の一環として発信することは、琵琶湖をより身近に感じる機会にもなり、琵琶湖の水質改善等の環境保全の意識醸成に資するものです。

第２節　本構想を実現するための体制

国や市町、研究機関等との調整・連携　水中遺跡は陸上の遺跡とは異なる調査手法や体制整備、一定の期間や経費が必要なため、本構想に基づく水中遺跡の保存活用は、当面は国や大学等の研究機関、関係機関、また有識者の助言指導も得ながら、県市が連携して計画的に調査をすすめることとします。そうしたなかで必要な資格の取得も含めて調査研究を担える人材の育成を推進し、それぞれが自立的に水中遺跡の調査研究、あるいは保存整備に取り組むことができる環境を整えます。

ステーク・ホルダーとの調整・連携　水中遺跡の保存活用の推進にあたっては、まず子どもから大人までの幅広い世代の県民が、水中遺跡の多様な価値を認識し理解を深めると同時に、誇るべき県民の財産としてともに学び、共有化することが重要です。そして、その保存活用は「母なる湖　マザーレイク」を中心に据えた「健康しが」の実現につながり、本県の未来の発展に資するものです。

そのうえで直接的な各種ステーク・ホルダーである漁業関係者、観光事業者、および行政関係諸機関との調整・連携が不可欠です。慎重に誠意をもって関係の構築を図ります。

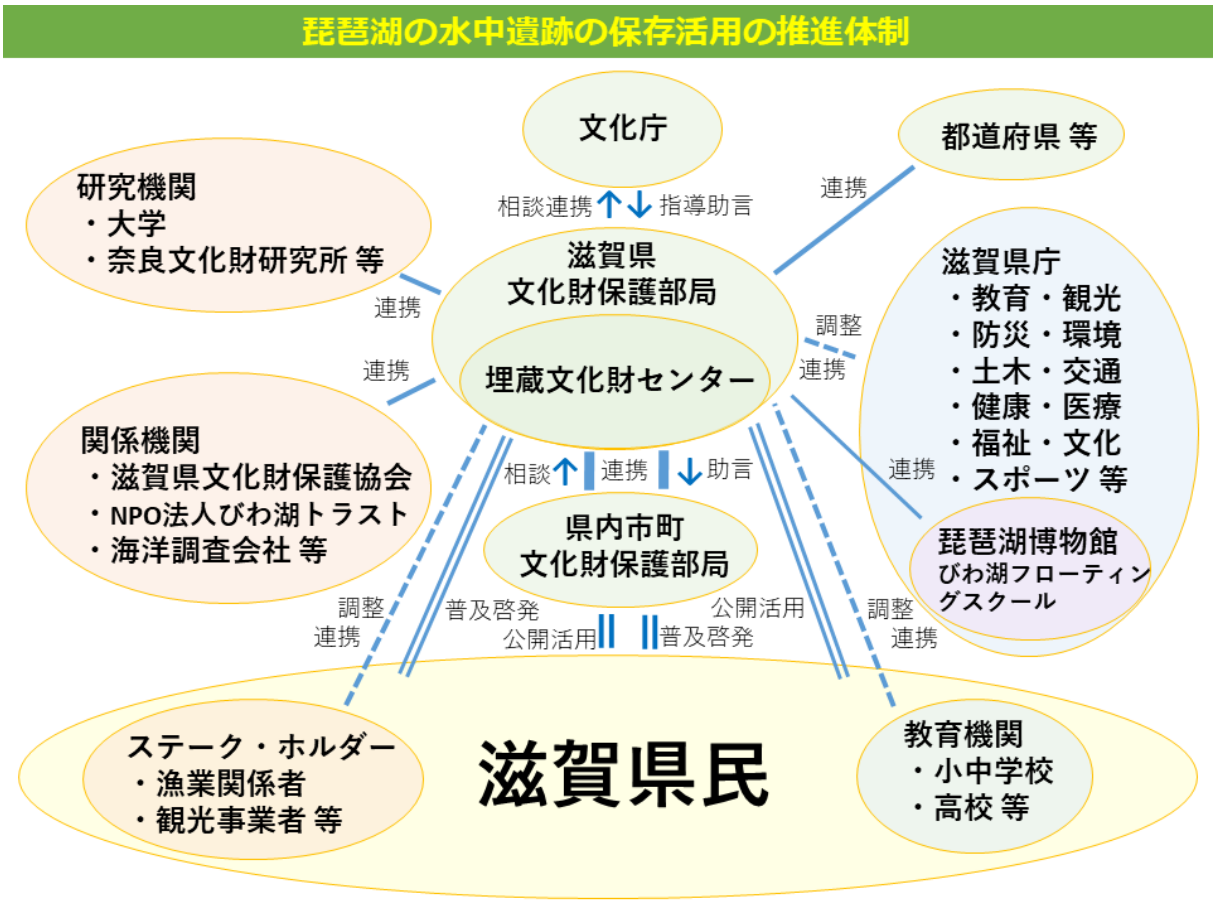


図 17　琵琶湖の水中遺跡の保存活用推進体制

第６章　おわりに　－　世界的価値をもつ琵琶湖の水中遺跡　－

滋賀県域の中央には琵琶湖が満々の水をたたえています。また、その周囲にはかつて多くの内湖（ないこ）が点在していました。本県域に暮らす人々や行き交う人々は、こうした水域を生存環境として共に歴史を歩み、琵琶湖とかかわることによって生活を成り立たせてきました。本県の歴史は琵琶湖という水域がある環境を生存条件として、いかに人が生きるかという模索を繰り返して、今日にたどり着いたとも言えるでしょう。琵琶湖の水中（すいちゅう）遺跡はこうした生存環境における人類の活動痕跡であり、また生存環境そのものの変化（地震や気候変動による災害等）の痕跡を大地に刻んで、良好な保存状態のまま今日に伝えています。これは人々と琵琶湖が共生しながら生きてきた証であり、人類と生存環境（水域）とが見事に関わり合ってきた歴史を明確に示すコンパクトな共生モデルとなり得るものです。

琵琶湖とその集水域の歴史は、人類と生存環境（水域）とが見事に関わり合ってきた歴史を明確に示すコンパクトな共生モデルであること高らかに示しています。琵琶湖は世界中で 20 ほどしかない古代湖のなかでも、遺跡や文献記録等によって、縄文時代以来、1 万年以上にわたって文化的なつながりをたどることができるという点において世界でも際立った存在と評価できます。



写真 22　葛籠尾崎（つづらおざき）湖底遺跡は竹生島（ちくぶしま）（左）と葛籠尾崎（右）の間の湖底に眠る（東方の湖上から）

琵琶湖の水中遺跡保存活用基本構想

■基本構想の策定の経緯と目的

葛籠尾崎湖底遺跡（長浜市）は日本の水中遺跡の調査研究の発祥地の一つ。この遺跡が発見された大正13年（1924年）から約100年が経ちます。

滋賀県ではこれを機に、琵琶湖の水中遺跡に光をあて、本県の誇りある文化財の価値と魅力を県民と共有し、広く国内外にも発信することにより「滋賀の宝　わたしたちの文化財」として一層の保存・活用を図る基本構想を策定することとしました。

水中遺跡とは・・・

地盤沈下や水位の上昇、船舶の沈没、祭祀等によって形成された水中にある遺跡で、集落跡や港跡、城跡、祭祀跡などがある。陸上に比べて人の手がおよびにくく遺跡が良く保存されている一方、不明な点も多い。

■琵琶湖の水中遺跡の５つの特性

原始以来の多種多様な遺跡が連綿と数多く存在

・琵琶湖の周囲に暮らす人々が常に湖と関わりながら生きてきた証として、縄文時代以降、途絶えることなく水中遺跡が形成されます。

琵琶湖ならでは特色ある遺跡が存在

・琵琶湖の水中遺跡は、東西交通の結節点に大きな湖があり、そこを舞台に人々の活発な活動があったことに由来します。

琵琶湖の変遷、地形・自然環境の変化等、多様な情報を内包

・水中遺跡の形成時期や成因などに関する情報は、震災や水害等の履歴解明につながり、防災や減災、環境保全等への取り組みに寄与します。

極めて良好な遺跡・遺物の保存状態

・琵琶湖の水中遺跡には人の手が及びにくく、立地環境から木製品等の保存状態も良好です。

人類と生存環境との関係を見事に示すコンパクトな共生モデル

・琵琶湖の水中遺跡は、人類と生存環境（水域）とが見事に関わり合ってきた歴史を明確に示すコンパクトな共生モデルです。

■琵琶湖の水中遺跡の定義

102遺跡
琵琶湖77遺跡　　余呉湖1遺跡　内湖24遺跡

・琵琶湖（瀬田川洗堰より上流）の水中もしくは水域に接して所在する遺跡

・琵琶湖の集水域の湖（琵琶湖の内湖と余呉湖）の水中もしくは水域に接して所在する遺跡

・もとは水中にあったが、現在は陸地にある遺跡（干拓等によって陸化した内湖跡に所在する遺跡等）



↑縄文時代の丸木舟
（尾上浜遺跡：長浜市）

→乗津湖底遺跡（大津市）
一重綱矢板囲い調査区

No.	遺跡名
●琵琶湖の水中遺跡	
1	横川湖底Ａ遺跡
2	雪ケ浦遺跡
3	薄墨池遺跡
4	阿曽津千軒遺跡
5	竹山湖底遺跡
6	向山遺跡
7	余呉川口遺跡
8	尾上遺跡
9	尾上城遺跡
10	尾上浜遺跡
11	今西湖岸遺跡
12	延勝寺湖底遺跡
13	葛籠尾崎湖底遺跡
14	竹生島寺遺跡
15	伯耆湖底遺跡
16	長浜城遺跡
17	豊公園湖岸遺跡
18	平方湖岸遺跡
19	下坂湖岸遺跡
20	新書浦遺跡
21	内江千軒遺跡
22	塩湖底遺跡
23	塩湖岸遺跡
24	十川湖底遺跡
25	出雄遺跡
26	矢倉川遺跡
27	多景島遺跡
28	栗見出在家遺跡
29	長命寺湖底遺跡
30	中島市島西遺跡
31	中島湖底遺跡
32	中島市島遺跡
33	三津屋遺跡
34	中島市島湖底遺跡
35	西ヶ浜湖底遺跡
36	牧湖岸遺跡
37	大房湖岸遺跡
38	新旭湖岸遺跡
39	佐波江湖岸遺跡
40	市野井浜遺跡
41	小津浜遺跡
42	市野井湖底遺跡
43	木浜湖底遺跡
44	矢橋湖底遺跡
45	矢橋港遺跡
46	北山田湖底遺跡
47	七条浦遺跡
48	赤出江湖底遺跡
49	鳥丸崎遺跡
50	木部湖底遺跡
51	山ノ下遺跡
52	浮御堂遺跡
53	今堅田城遺跡
54	堅木城遺跡
55	唐崎遺跡
56	大津城遺跡
57	膳所城遺跡
58	膳所湖底遺跡
59	薬注湖底遺跡
60	雷谷遺跡
61	大江湖底遺跡
62	唐橋遺跡
63	北小松湖岸遺跡
64	白浜遺跡
65	浜分浜遺跡
66	三矢千軒遺跡
67	白浜遺跡
68	伝三矢千軒遺跡
69	永田浜遺跡
70	新之浜北遺跡
71	新之浜南遺跡
72	森浜遺跡
73	針江浜遺跡
74	深溝遺跡
75	深溝浜遺跡
76	外ヶ浜遺跡
77	原氏浜遺跡
●余呉湖の水中遺跡	
1	余呉湖底遺跡
●琵琶湖の内湖の水中遺跡	
1	早崎遺跡
2	入江内湖自野遺跡
3	入江内湖遺跡
4	野田沼遺跡
5	野堀沼遺跡
6	松原内湖網代口遺跡
7	松原内湖小堅遺跡
8	松原内湖遺跡
9	大中の湖東遺跡
10	磯東Ａ遺跡
11	磯東Ｂ遺跡
12	獅子鼻Ｂ遺跡
13	川合遺跡
14	白王遺跡
15	切通遺跡
16	水茎Ａ遺跡
17	水茎Ｂ遺跡
18	水茎Ｃ遺跡
19	長刈遺跡
20	前ヶ崎Ａ遺跡
21	井大島遺跡
22	大中の湖南遺跡
23	野田沼遺跡
24	大海城遺跡

図 18　琵琶湖の水中遺跡基本構想の概要1

琵琶湖の水中遺跡保存活用基本構想

目標：「琵琶湖の水中遺跡」の保存と活用を通じて、「母なる湖　マザーレイク」と共に生きる「健康しが」の実現につなげます。

取組	課題	基本構想の実現の推進 方針	方法
調査研究	・水中遺跡の所在、分布状況のさらなる把握	所在把握調査の推進	・水中遺跡の所在、分布状況の把握 ・遺跡地図の整備充実
	・水中遺跡の所在把握調査の手法の確立		
	・水中遺跡に関する、さまざま分野の調査研究の情報を総合的に把握	総合的な調査の推進 地域研究の推進	・調査を通じた体制の充実 専門職員の育成 調査環境の整備 調査能力の向上
	・水中遺跡の調査体制の構築 ・水中遺跡の調査能力の向上	専門人材の育成 調査環境の整備	・琵琶湖を中心とした地域研究の活性化
保存保管	・水中遺跡や出土文化財を未指定のまま保存保管	指定等よる保存	・指定等による保存の確実化 水中遺跡の史跡指定等 出土文化財の重要文化財指定等
	・出土文化財（木製品）の大半は温湿度の管理なく保管	保管環境の確保	・木製品の保存 適切な保管環境の確保 専門職員の育成 保存処理後のメンテナンス 新たに出土した木製品の保存処理
	・調査の記録類の経年劣化の進行	デジタル化による保管	・デジタル化による記録類の保存
	・人為や開発の影響による、水中遺跡の現地保存への懸念	文化財価値の普及	・現地保存についての普及啓発
公開活用	・水中遺跡がもつ多様な価値の認知と活用	教育分野との連携 観光分野との連携 防災分野との連携 環境分野との連携	・公開展示（常設展示等）の場の充実 ・情報発信の強化 ・水中遺跡の「見える化」 動画、仮想現実（VR）や拡張現実（AR）の活用 ・シガリズムやビワイチとの連携 ・他分野との情報共有



↑葛龍尾崎湖底遺跡（長浜市）の水深65mの様子



塩津高遺跡（長浜市）の↑神像と起請文木札→





針江浜遺跡（高島市）のヤナギの埋没林　→
埋没林は同一方向に倒れるので、弥生時代の地震による土地の液状化あるいは津波の影響を示すとされる

図19　琵琶湖の水中遺跡基本構想の概要2

資　料　編

目　次

資料１　古代湖について
資料２　マザーレイクゴールズ（MLGs）について
資料３　調査研究の歴史
資料４　遺跡の分布と種類
資料５　出土文化財（遺物）等の概要
資料６　基礎データ
資料７　検討体制と経過
資料８　図表・写真の出典等

資料１　古代湖について

古代湖　地球上の圧倒的多数の湖は、数千年から数万年の寿命しかないと推定されています。これは流入する河川からの堆積物で埋め立てられてしまうためですが、一部には 10 万年以上の年齢をもつ湖が存在し、そこにはユニークな固有生物（固有種）の進化が見られます。

古代湖という言葉は、こうした現象に注目した湖沼生物学の研究者が使い始めました。古代湖とは地質学的な成立年代の古さばかりでなく、その長い存続期間に固有種が進化する環境が保たれた湖ということができます。表２に示した湖は成立年代が古いだけでなく、固有種を含む生物進化的側面からも古代湖の基準を満たす古代湖（biologically ancient lake）のリストです。

古代湖リストのゆらぎ　古代湖は世界中で 20 ほどしかないといわれるものの、その固定的なリストはありません。そもそも成立年代だけに注目しても、例えば湖底の堆積物を調査する等、大掛かりな学術調査をしないと、湖の寿命は正確にはわからない場合が少なくありません。そのうえ古代湖の定義として、上述したような固有種を含む生物進化的側面からの評価を重視しない場合もあるからです。こうした事情から、20 ほどある古代湖の一つに数えられたり、数えられなかったりする湖がいくつか存在します。

文化的な意味での古代湖　平成９（1997）年に世界古代湖会議が開催された際、琵琶湖は文化的な意味でも古代湖（culturally ancient lake）であると発信されました。古代湖では、複数の生物の種が互いに複雑な影響を及ぼしあいながら進化（共進化（きょうしんか））し、それによってそれぞれ独自の多様性を維持してきました。人もまた古代湖を生存環境として、この生物的自然との文化的共進化によって、文化をはぐくみ続けてきたという点を評価し、古代湖は歴史的な「生命文化複合体」であるという新しい概念が生まれました。

琵琶湖は、人類と水域という生存環境とが見事に関わり合ってきた歴史を明確に示す遺跡や文献記録等によって、縄文時代以来、1 万年以上にわたって文化的なつながりをたどることができるという点において世界でも際立った存在であり、それは古代湖としての琵琶湖のユニークさを示す特徴の一つであるとの評価です。

表２　世界の主要な古代湖

No.	湖沼名	成因	水質	年齢	面積（ｋ㎡）	貯水量（ｋ㎥）	最大深度（m）	平均深度（m）	所在国
1	バイカル湖	構造湖	淡水	25百万年以下	31,500	23,000	1,741	740	ロシア
2	タンガニーカ湖	構造湖	淡水	3–6 百万年	32,000	17,800	1,471	572	ブルンジ・コンゴ・タンザニア・ザンビア
3	アラル海	構造湖	塩水	5.5百万年	64,500	626	67	16	カザフスタン・ウズベキスタン
	※現状は元のサイズの10分の１に縮小。4つの小さな湖になる								
4	琵琶湖	構造湖	淡水	5~6百万年	674	27.5	104	41	日本
5	カスピ海	構造湖	塩水	5.5百万年	374,000	78,200	1,025	182	アゼルバイジャン・イラン・カザフスタン・ロシア・トルクメニスタン
6	フブスグル湖	構造湖	淡水	2~5百万年	2,770	381	267	138	モンゴル
7	プレスパ湖	構造湖	淡水	1.5~5 百万年	259	4.8	54	18.7	アルバニア・ギリシャ・北マケドニア
8	マラウイ湖	構造湖	淡水	2~5 百万年	29,600	8,400	705	292	マラウイ・モザンビーク・タンザニア
9	オフリド湖（オーリッド湖）	構造湖	淡水	1.5~5 百万年	358	53.63	286.7	163.71	アルバニア・北マケドニア
10	チチカカ湖	構造湖	淡水	3 百万年	8,372	893	281	107	ペルー・ボリビア
11	タホ湖	構造湖	淡水	1~2 百万年	499	156	505	313	アメリカ
12	ラナオ湖	火山湖（堰止湖）	淡水	2百万年	375		112	60.3	フィリピン
13	ヴィクトリア湖	構造湖	淡水	40万年	69	2,750	84	40	ケニア・ウガンダ・タンザニア
14	中国・雲南省の湖沼群								中華人民共和国
	ディアンチ（滇池）	構造湖	淡水	10万年	298		8	4.4	中華人民共和国
	エルハイ（洱海）	構造湖	淡水		250	250	11	11	中華人民共和国
15	ポソ湖	断層湖	淡水	500 ~100 万年	323		450		インドネシア
16	マリリ湖沼群								インドネシア
	トゥティ湖	構造湖	淡水	100~400万年	561	893	203		インドネシア
	マタノ湖	構造湖	淡水	100~200万年	164	39.38	590		インドネシア
	マハロナ湖	構造湖	淡水						インドネシア
	マサピ湖	構造湖	淡水						インドネシア
	ロントア湖	構造湖	淡水						インドネシア



図 20　世界の主要な古代湖の分布

資料２　マザーレイクゴールズ（MLGs）について

マザーレイクゴールズ（MLGs）　琵琶湖は常に人の暮らしと関わって存在してきました。「Mother Lake Goals」は自然環境としての琵琶湖だけではなく、山川里湖海のつながりと、そこにある人の営みまで含めた象徴としての琵琶湖「マザーレイク」のための目標です。MLGs は琵琶湖の環境を守ろうというだけの呼びかけでなく、琵琶湖に映し出され、象徴される私たちの暮らしを持続可能なものにするにはどうすればいいか、との問いかけです。

持続可能な社会を実現するための目標として SDGs があります。SDGs は国連が定めた世界規模の目標です。MLGs を SDGs の達成の視点から見ると、琵琶湖を通じて SDGs をアクションにまで落とし込んだ仕組みが MLGs であり、MLGs の取組は SDGs の達成に貢献するものです。

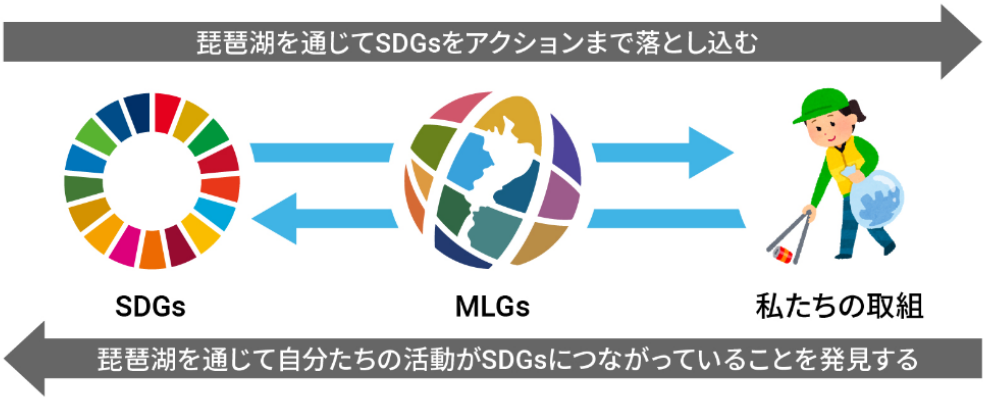


図 21　SDGｓとMLGｓの関係

2030 年の琵琶湖と琵琶湖に根ざす暮らしに向けた 13 のゴール　マザーレイクゴールズ（Mother Lake Goals，MLGs）では、2030 年の持続可能社会へ向け、琵琶湖を切り口として独自に 13 のゴールを設定しています。



Goal 1
清らかさを感じる水に

アオコや赤潮などのプランクトンの異常発生が抑制され、飲料水としても問題がなく、思わず触れたくなるような清らかな水が維持される。



Goal 2
豊かな魚介類を取り戻そう

在来魚介類の生息環境が改善し、資源量・漁獲量が持続可能な形で増加するとともに、人々が湖魚料理を日常的に楽しむ。



Goal 3
多様な生き物を守ろう

生物多様性や生態系のバランスを取り戻す取組が拡大し、野生生物の生息状況が改善するとともに、自然の恵みを実感する人が増加する。



Goal 4
水辺も湖底も
美しく

川や湖にゴミがなく、砂浜や水生植物などが適切に維持・管理され、誰もが美しいと感じられる水辺景観が守られる。



Goal 5
恵み豊かな
水源の森を
守ろう

水源涵養や生態系保全、木材生産、レクリエーションなどの多面的機能が持続的に発揮される森林づくりが進み、人々が地元の森林の恵みを持続的に享受する。



Goal 6
森川里湖海の
つながりを
健全に

森から湖、海に至る水や物質のつながりが健全に保たれ、湖と川、内湖、田んぼなどを行き来する生き物が増加する。



Goal 7
びわ湖のためにも
温室効果ガスの
排出を減らそう

日常生活や事業活動から排出される温室効果ガスを減らす取組が広がり、琵琶湖の全層循環未完了などの異変の進行が抑えられる。



Goal 8
気候変動や
自然災害に
強い暮らしに

豪雨や渇水、温暖化などの影響を把握・予測し、そうした事態が起きても大きな被害を受けない暮らしへの転換が進む。



Goal 9
生業・産業に
地域の資源を
活かそう

地域の自然の恵みを活かした商品や製品、サービスが積極的に選ばれ、地域内における経済循環が活性化し、環境が持続的に守られる。



Goal 10
地元も流域も
学びの場に

琵琶湖や流域、自分が生活する地域を環境学習のフィールドとして体験・実践する機会が豊富に提供され、関心を行動に結びつけられる人が増加する。



Goal 11
びわ湖を楽しみ
愛する人を
増やそう

レジャーやエコツーリズムなどを通じて自然を楽しむさまざまな機会が増え、琵琶湖への愛着が育まれる。



Goal 12
水とつながる
祈りと暮らしを
次世代に

水を敬い、水を巧みに生活の中に取り込む文化や、水が育む生業や食文化が、将来世代へと着実に継承される。



Goal 13
つながりあって
目標を達成しよう

年代や性別、所属、経験、価値観などが異なる人同士、また異なる地域に住まう人同士がつながり、琵琶湖や流域の現状、これからについて対話を積み重ね、その成果を共有できる機会が十分に提供される。

図 22　2030 年の琵琶湖と琵琶湖に根ざす暮らしに向けた 13 のゴール

資料３　調査研究の歴史

琵琶湖の水中遺跡の調査研究は、江戸時代の中頃の木内石亭の活躍を前史とします。そして、大正 13（1924）年、葛籠尾崎湖底遺跡（長浜市）が発見されると、これを機に考古学による本格的な調査研究が始まります。以来、令和８（2026）年に至る 100 年以上の歴史は、琵琶湖総合開発特別措置法に基づく琵琶湖総合開発計画への行政的な措置を行った時期と、その前後の時期の３期に区分できます。

第１期は昭和 36（1961）年以前の黎明期です。琵琶湖の水中遺跡の発見があり、これを契機として調査研究がはじまりました。

第２期は昭和 37（1962）年から平成３（1991）年にかけての進展期にあたります。琵琶湖開発事業等に伴う発掘調査の実施によって調査技術の開発が進み、数多くの新たな発見とともに重要な調査成果が蓄積され、調査研究は大きく進展しました。

第３期は平成４（1992）年以降の展開期です。第２期の発掘調査の総括（整理調査）が行われるとともに、大学等による学術研究がはじまる等、新たな展開が見られます。

１　前史：江戸時代

考古学による近代的な調査研究が始まる以前、琵琶湖から採取された土器や石器に関心を寄せた人物がいました。木内石亭（享保９-文化５（1724-1808）年）です。栗太郡北山田村（草津市北山田町）の人で、寛政９（1797）年刊『東海道名所図会』には次のように紹介されています。「此人生得若年より和漢の名石を好んで年歳諸国より聚めこれを翫ぶ」「石は神代の勾玉をはじめ我国諸州の産、人の国の産、奇石、化石、天狗の爪、水入りの紫水晶まで、あるは台に餝り、又は小笥に入て錦を敷て塗籠に家蔵する事、都二千余石ありとぞ」。

石亭はこうして珍石奇石を集めるばかりでなく、これらを研究し、安永２・８（1773・1779）年刊『雲根志』（前編・後編）や天明８（1788）年刊『百石図』等を著しました。このなかには琵琶湖の水中遺跡に関心を寄せたものもあり、『百石図』には神槍　天明三年（1783 年）　癸 卯四月一日、於湖東下笠七條浦漁人所得于網也」とあり、寛政６（1794）年以前刊『奇石産誌』には「神槍石（中略）湖東下笠七條浦ニテ漁父トリ上タルハ長サ五寸余釵形也、両品トモ石亭珍蔵ス」と見えます。

「神槍」「神槍石」は弥生時代の磨製石剣です。「下笠七條浦」は七条浦遺跡（草津市）であり、昭和 58（1983）年から平成２（1990）年にかけての琵琶湖総合開発に伴う発掘調査では、現在の琵琶湖基準水位（B.S.L＝T.P＋84.731m）からおおよそ１m下の湖底から、弥生時代前期から中期を中心とした壺・甕などの土器、鋤・鍬・泥除けなどの木製農具、穂摘み具の石包丁、管玉を磨く玉砥石などが出土しています。

2　第１期：黎明期　大正 13（1924）年から昭和 36（1961）年

第 1 期は琵琶湖の水中遺跡の発見から、昭和 47（1972）年に琵琶湖総合開発特別措置法に基づく琵琶湖総合開発計画が決定されるまでの時期です。

水中遺跡の発見　長浜市湖北町尾上地先の「余呉川河口沖」の湖底からは大正７年（1918）以前に、磨製石剣等が引き揚げられていました。これらは当時の長浜町で開催された史料展覧会に出展され、濱田耕作が実見しています（大正７年刊『京都帝国大学文科大学考古学研究報告第二冊』P53・55）。その後の大正 13（1924）年に、同じ尾上地先の「葛籠尾崎東沖」において、完形品の縄文土器の引き揚げられて一躍、学会の注目を集めることとなりました。この葛籠尾崎湖底遺跡の発見は、明治 41(1908)年に縄文時代の石鏃が採取された長野県諏訪湖の曽根遺跡（諏訪市）の発見に次ぐものです。これらは学史上、日本における水中遺跡の調査・研究のはじまりに位置付けられています。

葛籠尾崎沖合の湖底で発見された土器については、大正 14（1925）年に柴田常恵が『人類学雑誌　第 40 巻第 1 号』（東京人類学会）にて紹介し、昭和３（1928）年には島田貞彦が『滋賀県史蹟調査報告第一冊　有史以前の近江』（滋賀県保勝会）においてその詳細を報告しています。島田は発見された土器が縄文土器や弥生土器であることを明らかにし、土器が沈んだ理由の仮説として、①流出説（湖岸の遺跡からの土器の流出）、②地滑り説（地形の陥没や地層の変化（地滑り）による土器の流出）、③水流集合説（①説や②説によって水没した土器等が、湖水流によって一か所に集合）、④船舶転覆説（船の事故による荷物の落下）を示しています。

小江慶雄の研究　小江慶雄は昭和の日本の水中考古学の第一人者であり、葛籠尾崎沖合で土器を引き揚げた漁業関係者と同じ長浜市湖北町尾上出身です。その著書『琵琶湖底先史土器序説－特に尾上地先湖底発見の縄文式土器について－』（昭和 25（1950）年　学而堂書店）において、葛籠尾崎沖合で引き揚げられた 20 点を超える縄文土器・弥生土器を集成してその引き揚げ地点図等を示し、葛籠尾崎湖底遺跡に関する考察を深めました。



写真 23　葛籠尾崎湖底遺跡　大正 13 年発見の縄文土器

昭和 34（1959）年、小江はびわ湖学術研究会による葛籠尾崎湖底遺跡の総合調査に考古学的調査の担当として参加し、最新機器による音響探査やボーリング、ドレッジ等の調査を実施しました。その結果、葛籠尾崎湖底遺跡の最深点はそれまで考えられていた 52.7mよりも深い 69～75mであること、また東西方向の断面形状が不整形なＶ字形を呈していること、土器の引き揚げ地点の分布と、湖成鉄が採取される地点の分布が重複していること等が明らかになりました。

藤岡謙二郎の研究　一方、この頃、琵琶湖の南湖でも学史上重要な水中遺跡の調査が始まっていました。昭和 27（1952）年、藤岡謙二郎は琵琶湖南端の大津市晴嵐一丁目の沖合で、船上からの観察と素潜りによる遺物採取、ボーリング調査と測量調査を実施し、川幅が狭かった時期の瀬田川右岸に縄文時代中期の貝塚が存在していることを明らかにしました。これが粟津湖底遺跡（大津市）の発見です。当時のこの付近の水質は透明度が高く、湖上から白い貝塚の拡がりを容易に観察することができ、水中に残る遺跡の存在を体感できる良好な保存環境であったようです。

内湖の干拓　第２次世界大戦中から戦後の高度経済成長期（1944 年頃～1970 年代前半）にかけて、琵琶湖の内湖は食糧増産等を目的に干拓事業が進められたところ、入江内湖（米原市）や弁天内湖（近江八幡市）等の湖底から入江内湖遺跡、弁天島遺跡が姿を現しました。このことは当時の人々の耳目を集め、昭和 20 年代後半から昭和 30 年代前半（1950 年頃～1960 年頃）にかけて、山内清男や梅原末治らが遺跡や遺物を調査し報告を行っています。

このように第１期は、琵琶湖の水中遺跡の調査研究の黎明期であり、漁業関係者による遺物の引き揚げや、内湖の干拓による遺跡発見といった、地域からの情報を機に調査が行われ、現在も広く知られる代表的な琵琶湖の水中遺跡の存在が学術的に認識されました。

３　第２期：進展期　昭和 37（1962）年から平成３（1991）年まで

第２期は、昭和 37 年に滋賀県教育委員会事務局に埋蔵文化財専門職員（水野正好）が配置されたことにはじまります。これ以降、当時盛んであった内湖の干拓をはじめとして、開発に対する水中遺跡の行政的な保護措置がとられるようになりました。

行政的な対応措置のはじまり　水中遺跡の行政的な対応措置の最初は「近江八幡

市元水茎町所在丸木舟埋没遺跡」(現在の水茎Ｂ・Ｃ遺跡)の調査です。昭和 39(1964)年３月２日、滋賀県農林部農地開拓課から、元水茎内湖干拓地内の農業用水路工事中に「丸木舟様遺材」（丸木舟のような木材）が見つかったとの連絡があり、３月４日に現地確認後、４月５日から 25 日間の発掘調査（第 1 次調査）が行われました。次いで翌昭和 40（1965）年 5 月 1 日から 55 日間の発掘調査（第２次調査）が行われ、第 1 次調査と合わせて縄文時代後期初頭の丸木舟７艘を調査しています。

その後、昭和 39 年 6 月に大中の湖南遺跡が見つかって昭和 40・41（1965・1966）年度に発掘調査が行われ、昭和 42 年（1967）には曽根沼遺跡（彦根市）の発掘調査も行われますが、内湖の干拓事業は昭和 45（1970）年頃にほぼ終息を迎えます。

琵琶湖開発事業に伴う把握調査　昭和 47（1972）年に琵琶湖総合開発特別措置法が公布され、それに基づく琵琶湖総合開発計画に伴って、行政的な対応措置としての琵琶湖の水中遺跡の本格的な調査がはじまります。それは事業計画地での分布調査や試掘調査、保存協議といった手続きを経て、記録保存目的の発掘調査を 20 年近くにわたりました。

琵琶湖岸での分布調査は開発予定箇所（主に湖岸堤管理用道路建設予定地等）を対象として２回に分けて実施しました。琵琶湖は最小幅（大津市今堅田地先と守山市今浜町地先の間）の北側を北湖、南側を南湖といいます。１回目は昭和 48（1973）年度に琵琶湖の北湖の３地区（安曇川地区、姉川地区、近江八幡地区）を対象とし、２回目は昭和 55（1980）年度に南湖の西岸を対象としました。

北湖での主な調査方法は次のとおりです。①湖岸の踏査や、②湖底の浅位部の素潜りでの遺物散布の確認、③貝引き網による土砂採取による遺物確認です。また、葛籠尾崎周辺のみについては、④スキューバーダイビングによる潜水調査（委託）を試みました。これらの調査の結果、後に発掘調査の実施に至った遺跡の存在を土器の分布から把握しました。それは森浜遺跡（高島市）や針江浜遺跡（高島市）、尾上浜遺跡（長浜市）や延勝寺湖底遺跡（長浜市）、長命寺湖底遺跡（近江八幡市）や津田内湖遺跡（近江八幡市）等です。また、葛籠尾崎湖底遺跡での潜水調査では、水深 14～30ｍの湖底４地点で弥生土器や須恵器等の遺物を確認し、湖底に沈んでいる土器の状況をはじめて写真撮影しました。

一方、南湖の西岸では、河川からの土砂堆積等が厚いため、北湖で実施したような分布調査では遺跡の有無の判別が困難でした。ついては浚渫を伴うような工事の実施にあたっては、表面での遺物の有無に関わらず、試掘調査による遺跡の確認を行う等の配慮が必要であるという判断を得ました。

この分布調査の終了段階で把握していた琵琶湖の水中遺跡は 20 遺跡程度でしたが、これらの隣接地にはさらに埋蔵文化財が存在する可能性があることや、湖中にはこの

ほかにも未知の遺跡（周知されていない埋蔵文化財）が多くあることを前提として、開発事業と水中遺跡の保護との調整を進めました。その結果、昭和 56（1981）年度から平成３（1991）年度にかけて、琵琶湖開発事業の一環として水資源開発公団が行う開発事業に伴い、琵琶湖の水中遺跡の発掘調査を実施しました。これにより、琵琶湖の水中遺跡の把握と周知、発掘調査による実態解明が大きく進展しました。

琵琶湖開発事業に伴う発掘調査　琵琶湖開発事業に伴う発掘調査は約 30 遺跡で実施しました。調査はハンマーグラブ掘削機、潜水士によるジェットポンプを用いた試掘調査等に始まります。そして、湖中や水際での本発掘調査では調査区全体を鋼矢板によって囲い、常時排水により内部を陸地化するという調査方法を採用しました。なかでも志那湖底遺跡（草津市）や粟津湖底遺跡においては、鋼矢板囲いを二重にして矢板間に土を充填する方法を採用し、これが周囲からの浸水対策として有効であることを確認しました。琵琶湖の水中遺跡の発掘調査は、こうして陸上の遺跡と同様の発掘調査を実現しました。

そして、これらの発掘調査によって、旧石器時代以降、一万年以上にわたる琵琶湖の水中遺跡の変遷や、多種多様な遺構と遺物の存在が明らかになり、多くの注目すべき調査成果を得ることができました。この間に出土した遺物の総量は、収納用コンテナ（約 700×500×170 ㎜）換算で約 34,000 箱（出土文化財約 7,700 箱に粟津湖底遺跡の貝塚出土の自然遺物約 24,000 箱ほかを含む箱数）に及びます。また、調査で作成した記録資料は実測図面が約 340 冊（おおよそ 17,000 枚）、写真資料が約 800 冊（おおよそ 336,000 枚）を数えます。発掘調査で出土したこれらの遺物や作成した記録資料は、平成４年以降（第３期）に整理調査（整理等作業と発掘調査報告書の刊行）を実施しています。



写真 24　長命寺湖底遺跡一重鋼矢板囲い調査区



写真 25　粟津湖底遺跡二重鋼矢板囲い調査区

文化庁による「遺跡確認法の調査研究」　琵琶湖開発事業に伴う発掘調査に着手する直前の昭和 55（1980）年、文化庁は粟津湖底遺跡において、水中遺跡における

遺跡確認法の調査研究のための調査を実施しました。この調査では、スキューバーダイビングによってスコップや手スコ（移植ゴテ）を用いて試掘坑を掘削することや、エアリフトを使用しての掘削を行いました。また、水中において人力での記録図面の作成や、写真撮影等の作業が試みられ、そうした調査方法の実効性が検証されました。

このように第２期は、主に開発事業への対応という受動的な調査に終始した時期であったものの、この間に調査技術の開発が進展するとともに、数多くの新たな発見があり、重要な調査成果を蓄積することができました。また、この時期は、多くの発掘調査を遅滞なく円滑に実施するため、本県および財団法人滋賀県文化財保護協会（現在は公益財団法人）の発掘調査体制の拡充がはかられ、複数の埋蔵文化財専門職員が潜水士の資格を取得し、水中での調査に従事しました。

４　第３期：展開期　平成４（1992）年以降

第３期は、主に第２期に実施した琵琶湖開発事業に伴う現地発掘調査の整理調査（整理等作業と発掘調査報告書の刊行）を実施した時期です。この時期には水中遺跡の調査について新たな展開が見られ、新たな開発事業への対応として塩津港（しおつこう）遺跡（長浜市）の発掘調査を実施しました。また、滋賀県立大学や立命館大学、京都橘大学、さらには滋賀県立琵琶湖博物館等が学術目的の調査を始めています。

22 年間の整理調査　琵琶湖開発事業に伴う発掘調査は、工事の本格化と共に大幅に件数が増加し、発掘調査に要する期間と経費が当初の見込みを大きく超えることとなりました。このため、県では水資源開発公団と協議を進め、発掘調査と整理調査を分離することとし、現地での発掘調査を優先して実施した後、平成４年度から平成 25 年度までの 22 年間、室内での整理調査を集中的に実施しました。

整理調査で対象とした出土遺物は約 34,000 箱に及び、その大半は粟津湖底遺跡の貝塚から出土した約 24,000 箱の自然遺物でした。それは多量であるうえ、他の遺跡に比べて作業内容も多様（フローティング洗浄機による水洗選別作業、自然科学的分析、定量分析等）であるため、粟津湖底遺跡の整理調査を 22 年間を通して実施するとともに、その他の遺跡の整理調査を進め、全 15



写真 26　粟津湖底遺跡　自然遺物整理調査状況

冊の発掘調査報告書を刊行しました。

この整理調査では、発掘調査の現地では把握できていなかった新たな調査成果を得ています。特に、粟津湖底遺跡では貝塚堆積物について肉眼や顕微鏡を使った詳細な調査と分析を行い、セタシジミの貝殻の成長線の分析から貝の捕獲時期を把握しました。あわせて、他の動植物資源の種類や量とも考え併せることで、貝塚の食糧構成比や粟津縄文人の生業カレンダーを提示しました。



写真 27　粟津湖底遺跡
シジミ貝分析作業状況

塩津港遺跡の調査　第３期において本県が実施した水中遺跡の発掘調査としては塩津港遺跡の発掘調査があげられます。河川改修と国道建設事業に伴う素掘りや鋼矢板囲いによる調査であり、塩津港の実態を示す数多くの情報を得ることができました。それは平安時代の神社跡や港の護岸遺構等の検出であり、港の繁栄ぶりを示す多種多様の遺物が出土したことです。わけても神社跡から出土した神像や起請文木札は特筆すべきものです。また、護岸の変遷や神社の廃絶に関する情報は、地震や津波に関わるものとして重要な成果です。

坂本城跡の湖中石垣の保存処理　平成６（1994）年９月の琵琶湖の水位低下に際し、坂本城跡（大津市）において湖中から石垣が姿を現しました。この時、本県は大津市とともに石垣の実測と写真による記録を作成し、周辺に散布する遺物の取り上げを行いました。また、石垣の胴木について合成樹脂を含浸させて木質を強化する保存処理を行いました。以来、湖中石垣は坂本城に関わる可能性がある石垣としては広く知られるところとなり、その後の水位低下に際して石垣が姿を現すたびに、多くの見学者が訪れる等、その存在は注目を集めています。



写真 28　坂本城跡の石垣胴木の保存処理状況

学術目的の調査　第３期の新たな展開として、滋賀県立大学や立命館大学、京都橘大学、滋賀県立琵琶湖博物館、認定 NPO 法人びわ湖トラスト等による学術目的調査の

実施があげられます。

滋賀県立大学では、平成９（1997）年から伝三矢千軒遺跡（高島市）や相撲湖底遺跡（西浜村、長浜市）、尚江千軒遺跡（米原市）といった水没伝承のある集落跡の遺跡やその周辺での学術目的調査を継続的に実施しています。そして、令和元（2019）年からは米原市が調査主体となり、大学と連携・協力する体制で朝妻沖湖底の遺跡調査に着手し、潜水による遺構や遺物の把握調査、地質学的手法による地盤沈下の解明等の研究を進めています。

京都橘大学は坂本城跡において、令和４（2022）年から湖中石垣の想定延長域の調査を実施しています。それは潜水による状況把握や測量調査であり、時期は不明ながら、これまでに湖岸水域の南北において石垣石材に類似する石群を確認しています。

琵琶湖博物館では、令和５(2023)年に粟津湖底遺跡と葛籠尾崎湖底遺跡において、水中ドローンを使った現況確認調査を公益財団法人滋賀県建設技術センターの協力を得て実施しています。

葛籠尾崎湖底遺跡の調査　立命館大学は平成 22（2010）年から、そして平成 29（2017）年からは認定 NPO 法人びわ湖トラスト等と共同で、葛籠尾崎湖底遺跡において無人潜水機を用いた学術目的調査を続けています。立命館大学の当初の調査は、過去に多くの土器が漁網にかかって引き揚げられた葛籠尾崎の東沖を対象としました。しかし、遺物はほとんど見つからなかったため、この場所は長年の漁によって既に多くの土器が引き揚げられてしまっているのではないかと考え、岩場が多く漁網による漁に適さない葛籠尾崎の南沖を調査としたところ、土器の発見が増加したといいます。令和５（2023 年）には無人潜水機を用いて広域を悉皆調査し、64 点の土器の可能性がある物体を確認しています。



写真 29　立命館大学と認定 NPO 法人びわ湖トラストによる葛籠尾崎湖底遺跡でのボーリング調査

こうした調査の結果、葛籠尾崎の東沖において引き揚げられた土器は縄文時代から弥生時代を中心とする一方、葛籠尾崎の南沖では古墳時代以降、６世紀から 12 世紀頃の土師器や須恵器が多く確認されるという特徴があり、遺跡内で土器の分布状況に時期差がある可能性が高いこと等がわかってきました。また、葛籠尾崎湖底遺跡資料館保管の引き揚げ土器についての実測調査等も実施し、土器の年代が古いほど湖成鉄が厚く付着している割合が高いこと等を明らかにしています。

あわせて認定 NPO 法人びわ湖トラスト等は葛籠尾崎湖底遺跡の水域における地図作成や湖水の流況観測、底泥コアの採取による C14 年代測定や DNA 解析を継続的に実施しています。そして、令和７（2025）年にはこの水域において大規模な堆積異常があることを発見しています。

滋賀県はこうした調査を受けて、令和７（2025）年度に文化庁事業「令和７年度日本における水中遺跡保護体制の整備充実に関する調査研究事業」を受託した独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 からその一部（パイロット事業）を受託し、葛籠尾崎湖底遺跡の立命館大学調査個所を対象に、潜水困難な深水域に所在する水中遺跡の把握に係る調査研究として、詳細調査（スキャンマッピング撮影および３次元化調査）を実施しました（令和８（2026）年刊『葛籠尾崎湖底遺跡調査報告書』滋賀県）。

調査の結果、写真地図を作成した範囲内（南北 50m 東西 200m）の湖底（深さ約 63～69m）において 51 点の遺物（土器 49 点、石器１点、木製品１点）を確認しました。確認した遺物は湖底にほぼ露出した状態で水没し、そのうち完形品かそれに近い土器は少なくとも 36 点ありました。時代別では縄文時代２点、弥生時代２点、古墳時代 20 点、奈良～平安時代（平安時代後期を除く）９点、中世（平安時代後期を含む）８点、不明 10 点でした。これを踏まえて、これまでに当該遺跡の全域で確認された遺物の分布状況を眺めたところ、縄文時代以降の遺物は遺跡のほぼ全域に分布し、とりわけ古墳時代の遺物はかなり多く認められる一方、奈良時代以降の遺物は、葛籠尾崎の東沖ではほぼ確認されず、その分布は南沖に限られることがわかりました。

また、次の３点の成果が特筆されます。一つは当該遺跡では最古の土器の可能性がある尖底土器１個を発見したことです。その年代は縄文時代早期前葉から早期中葉初頭（11000 年前頃～10500 年前頃）と推定されます。もう一つは、同形同大で同時期（古墳時代中期）の土師器甕６個が近接して沈んでいたことから、遺跡の成因について「船の積荷が落下した可能性」を検証する、さらなる手掛かりが得られたことです。三つ目は奈良時代のほぼ同形同大の須恵器坏蓋が、湖底にほぼ一直線状に水没していたことです。こうした状況は船に乗って湖面を線上に移動しながら、これらを順番に水中に落としたたような印象を受けます。それはあるいは祭祀にかかわる行為があった可能性があります。



写真 30　葛籠尾崎湖底遺跡の
縄文時代の尖底土器

以上のように、第３期には新しい取組として、大学等による学術目的調査が盛んになりつつあります。本県は、第２期に引き続き、開発事業に伴う記録保存調査等を行うとともに、大学等の調査成果によりつつ一部水中遺跡の調査に着手しています。

資料４　水中遺跡の分布と種類

水中遺跡の分布

本構想の対象範囲として取り扱う琵琶湖の水中遺跡は、琵琶湖とその集水域の湖にある水中遺跡です。『県遺跡地図』所載のこうした周知の埋蔵文化財包蔵地は、琵琶湖（大津市南郷地先の瀬田川洗堰（あらいぜき）より上流）に 77 遺跡、琵琶湖の内湖に 24 遺跡、余呉湖に 1 遺跡です。

自治体別では、長浜市と近江八幡市がともに 21 遺跡、次いで高島市 15 遺跡、大津市 13 遺跡、米原市８遺跡、草津市と彦根市がともに７遺跡、東近江市５遺跡、守山市４遺跡、野洲市 1 遺跡の順です。

水中遺跡の立地については、その一部が竹生島（ちくぶしま）（長浜市）や多景島（たけしま）（彦根市）、沖島（おきしま）（近江八幡市）といった湖中島周辺にあるものの、その大半は内湖にかかわる遺跡も含めて、琵琶湖の湖岸域に立地します。琵琶湖岸の景観は砂浜、ヨシ帯、山地、人工湖岸等と多様であり、その延長距離は 235.20 kmに及びます。これまでに琵琶湖の全域を対象として、遺跡の所在状況を悉皆調査したことはなく、今のところ水中遺跡が分布しない範囲も知られます。大津市の北小松から本堅田（ほんかたた）までの区間と、彦根市松原町から東近江市栗見出在家（くりみでざいけ）町までの区間です。



写真 31　多景島遺跡の遺物散布状況

水中遺跡の種類

『県遺跡地図』所載の遺跡の種類では集落跡が 27 遺跡、城館跡が７遺跡、社寺跡が６遺跡、そして交通遺跡、港跡、貝塚、その他墓跡がそれぞれ２遺跡づつあるほか、散布地も 55 遺跡が知られます。これらは、当初から水中または水中と一体的に形成された遺跡、当初は陸地に形成された後に水中に没した遺跡に大別でき、遺構を伴うものと伴わないものがあります。

以下、種類ごとに代表的な遺跡の概要を説明します。

集落跡　集落跡には、発掘調査で内容が把握できた遺跡や、地震による水没伝承地を潜水調査して集落跡の石組み等の遺構を確認した遺跡等があります。針江浜遺跡（高島市）は琵琶湖西岸にある弥生時代の集落跡です。調査区全体を鋼矢板で囲み、その内部の水を抜いて陸化して発掘調査を実施したところ、３面の遺構面を検出しま

した。下層から順にいうと、竪穴建物や掘立柱建物等を伴う弥生時代前期があり、その上層に弥生時代中期の遺構面があります。そして上層の遺構面では、堰を備えた流路や掘立柱建物等の遺構があり、それらを切り込む地震による噴砂が見つかりました。そして、そのさらに上層に古墳時代以降の遺構面があり、畦道や畑の耕作痕等を検出しています。これらのことから、この遺跡は本来、琵琶湖の浜堤に立地したものの、水位変化や地殻変動の影響を受けて湖中に没したと推定できます。



写真 32　大中の湖の干拓状況（北から）

大中の湖の干拓事業が始まって、昭和 39（1964）年に湖底が干上がると、そこから縄文時代から鎌倉時代に至る遺物がみつかりました。大中の湖南遺跡（近江八幡市）の発見です。とりわけ弥生時代中期前半を中心とする集落跡は水田域を伴い、そこでは矢板や杭で土留めされた灌漑用水路や畦畔が見つかっています。水中にあったため、遺跡の保存状態はよく、大溝からは大量の土器や木製農具、石器等が出土し、点在する小貝塚からは貝殻や動物の骨等も発見され、稲作とともに狩猟や漁労も行われていたことがわかります。農耕集落の構成がよくうかがえる弥生時代中期前半を中心とする遺跡として、昭和 42（1967）年に史跡に指定され、遺跡公園として公開されています。



写真 33　大中の湖南遺跡の
弥生時代中期の木製農具

交通遺跡　交通に関わる水中遺跡としては、港跡と橋跡（交通路）があげられます。塩津港遺跡（長浜市）の発掘調査では、杭列を高密度で打ち込んだシガラミを駆使して護岸を構築し、湖岸を段階的に埋め立て造成した状況が明らかになりました。そして、港の繁栄と人々の生業の実態を物語る多くの遺物が出土しています。



写真 34　大中の湖南遺跡の
古代の突堤状第 1 遺構

大中の湖南遺跡では、陸地側から内湖側に向かう 2 本の突堤状遺構が、発掘調査で

見つかっています。年代は７世紀後半～８世紀前半頃で、まず第１遺構（全長 27.2m・幅３m）が、ついで第２遺構（全長 42m・幅２m）がつくられました。両者には構造のちがいがあり、後者は矢板杭を隙間なく打ち込んで側板としています。港跡の一部（桟橋等）とされています。

瀬田川の川底にある唐橋（からはし）遺跡（大津市）を発掘調査したところ、飛鳥時代と奈良時代の橋の橋脚遺構が見つかりました。橋脚の基礎構造は、六角形に組み合わせた角材を多量の石材で覆って固定しており、当時の土木技術の高さを示しています。そして、橋脚の状況から、橋の規模は幅約９m、橋脚の間隔は約 18mであることも明らかになりました。



写真 35　唐橋遺跡の飛鳥時代の橋脚跡

社寺跡　交通遺跡でもある塩津港遺跡においては、発掘調査で平安時代の神社跡を検出しています。神社は塩津湾に面する港の入口にあって、堀に囲まれた区画内に琵琶湖に向かって南面する本殿があり、その南側に拝殿等の建物、そしてそのさらに南側に鳥居を配置しています。周辺からは木製の神像や祭祀に関わる多様な遺物が出土しました。とりわけ 400 点を超える数が出土した起請文木札（きしょうもんきふだ）は、起請文としては初めての出土例であり、保延３(1137)年という年紀があるものも含まれることから、日本最古の起請文群であることが判明しました。保存状態も良好な一括資料であり、当時の神社祭祀や物流の実態を伝える上で、資料的価値が極めて高いものです。



写真 36　塩津港遺跡の平安時代の神社跡

城館跡　本県には 1,300 を超える中近世の城館跡があります。このうち近世城郭としては坂本城跡・大津城跡・膳所城（ぜぜじょう）跡（大津市）、長浜城遺跡（長浜市）、大溝城（おおみぞじょう）跡（高島市、P97 図 34）の５遺跡が琵琶湖岸に立地しています。

坂本城跡は明智光秀が元亀３（1572）年に築城しました。平成６（1994）年の渇水時に、琵琶湖の湖底から石垣の基底部が現れました。近年、陸上での坂本城跡の発掘調査が進展し、令和７年に本丸と三ノ丸の一部が史跡に指定されました。湖中石垣は本丸の沖にあり、両者の関係性の解明が注目されています。

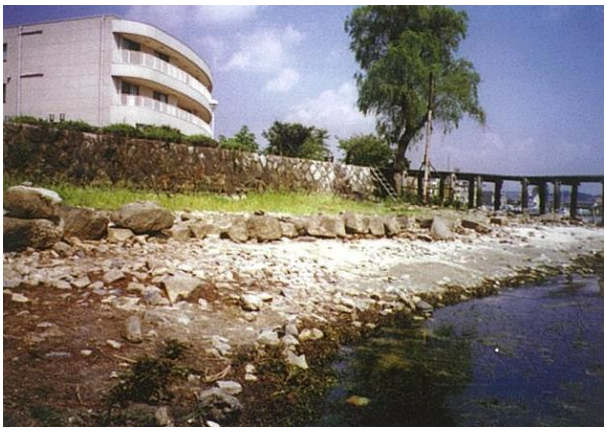


写真 37　坂本城跡石垣露見状況（平成６年）

貝塚　粟津湖底遺跡は国内最大の淡水貝塚として広く知られています。縄文時代早期から中期に形成された３つの貝塚があり、現状保存される第１・２貝塚の北東側に、発掘調査を実施した第３貝塚があります。平成２・３（1990・1991）年度の第３貝塚の発掘調査においては、貝層と植物層がかつての水際に累々と堆積し、そのなかには獣骨・魚骨等の動物遺体も良好に残される状況を確認しました。これを手掛かりとして食物残滓の廃棄単位を把握したうえで、貝層を形成するセタシジミの貝殻の成長線の分析をもとに、貝の捕獲時期が毎年７～９月であったと推定しました。そして、動植物の獲得時期と考え併せることで、貝塚を形成した縄文人の生業カレンダーを作成しました。また、樹木や木の実類、花粉等の分析からは植生の変化も明らかになり、縄文時代早期のクリ塚では、ヒョウタンやエゴマといった栽培植物も確認される等、縄文人の多様な食生活の実態を具体的に解明することができました。

散布地　種類別で最も多い散布地には、遺物を包含する層が人為的に形成された遺跡と、自然的要因により形成された遺跡があります。遺跡それぞれに多様な形成要因が想定できます。

発掘調査や潜水調査の結果、人為的な形成要因が想定できる遺跡の事例として、多景島遺跡（彦根市）があげられます。多景島は彦根市八坂町沖約５㎞にある周囲が断崖絶壁の島で、江戸時代前期建立の見塔寺が所在します。島の周囲の湖底では古墳時代の勾玉や管玉をはじめ江戸時代に至るまでの祭祀や信仰に関わる遺物が多く出土します。とくに室町時代の懸仏や、灯明皿として使われた土師器皿、小型銅鏡等、あるいは中世の渡来銭や江戸時代の寛永通宝といった銭貨の出土状況からは祭祀行為として湖中に投げ入れられたことがうかがえます。

浮御堂遺跡（大津市）の発掘調査では、満月寺の湖岸と浮御堂周辺において、古墳時代から近世に至る厚さ２ｍ以上の遺物包含層を検出しました。出土遺物は流動に伴う摩滅が認められず、その場で押しつぶされた状況のものもあることから、使用を終えた什器を湖岸から投棄した結果、それが累々と積み重なって形成されたと

考えられます。その内容は、堅田地域の経済力や文化の高さ、生業のあり方をうかがうことができます。

また、集落跡として周知する赤野井湾湖底遺跡（守山市）の発掘調査では、80 点もの飛鳥時代後半（白鳳期）の瓦が 1 か所に重なり合って湖底に沈んだ況が確認されています。瓦は使用痕のない同工同形の新品であり、窯出しした瓦を、船に積んで運ぶ途中に、湖中に落としたと考えられます。これは事故という偶発によって形成された散布地とも言えます。



写真 38　浮御堂遺跡の近景（東から）

なお、葛籠尾崎湖底遺跡（長浜市）は琵琶湖の水中遺跡の代表例として広く知られています。その範囲は、琵琶湖の北端から竹生島に向かって突き出す葛籠尾崎の半島の東側から南側の沖の範囲に広がり、これまでに完形品に近いものを多く含む縄文時代早期から中世にかけての 200 点以上の土器が発見されています。その形成要因については、地震による地滑りや陥没説、湖流や河川による流入説、船舶からの落下説、祭祀等による人為的な投入説等の諸説があります。しかしながら、現段階では定説がなく、解明に向けた取組が大学等の研究機関によって続けられています。

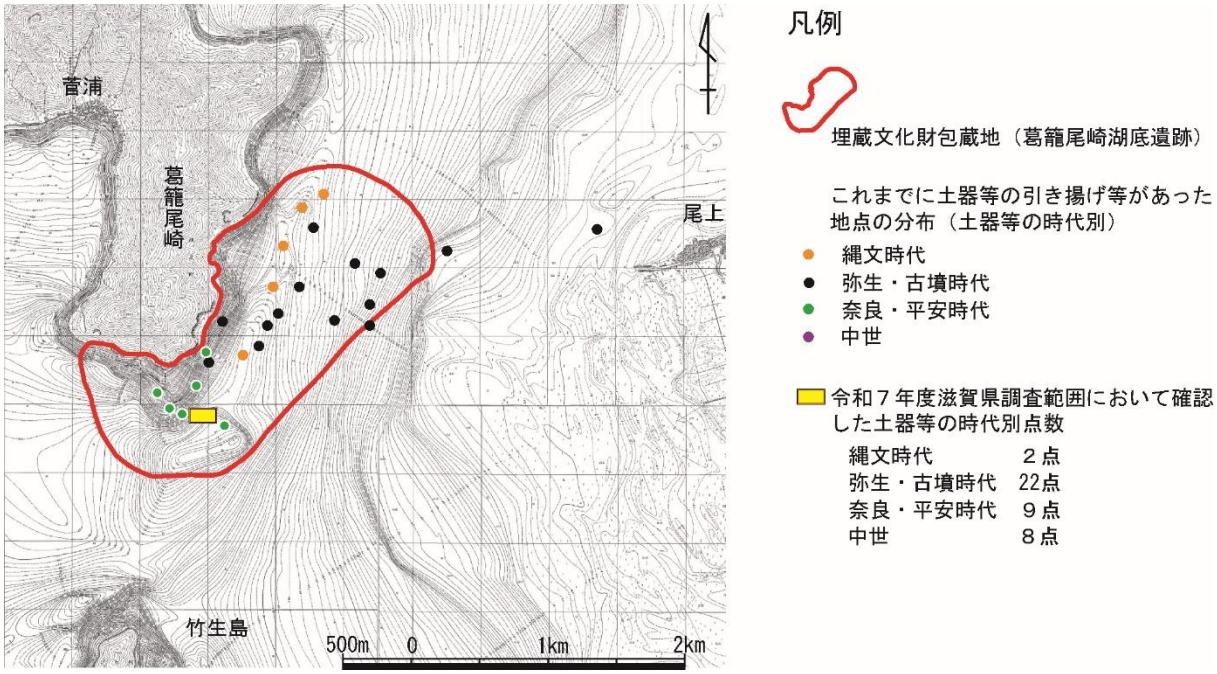


図 23　小江慶雄や立命館大学、滋賀県の調査で把握された土器等の時代別分布状況

資料５　出土文化財（遺物）等の概要

出土文化財等の種類

琵琶湖の水中遺跡からの出土文化財等は、そのほとんどが琵琶湖開発事業や国道建設事業等に伴い、本県が実施した発掘調査での出土遺物、および調査で作成した実測図面や写真等の記録資料です。その量は収納用コンテナ（約 700×500×170 ㎜）換算で約 7,700 箱（粟津湖底遺跡の貝塚から出土した自然遺物約 24,000 箱ほかを除く）におよび、実測図面は約 340 冊（おおよそ 17,000 枚）、写真資料は約 800 冊（おおよそ 336,000 枚）を数えます。このほか、葛籠尾崎湖底遺跡（長浜市）で引き揚げられた縄文時代から平安時代の土器や、滋賀県立大学等の学術目的調査に伴う出土文化財等があります。

これらの出土文化財は多種多様で、旧石器時代以降の各時代におよびます。とりわけ水中という立地環境によって、良好な保存状態で出土した多くの木製品は特筆されます。丸木舟や木製農具、木簡、そして橋脚部材等です。以下、代表的な出土文化財をいくつか抽出して説明します。

ナイフ形石器　県内最古級の出土遺物です。旧石器時代後期頃に、サヌカイトで作られた全長 11.2 ㎝の大型品で、国府型ナイフ形石器と言われる形状を呈しています。

瀬田川の上流部に位置する螢谷遺跡（大津市）において、河床に堆積した縄文時代早期末の遺物包含層から出土しました。

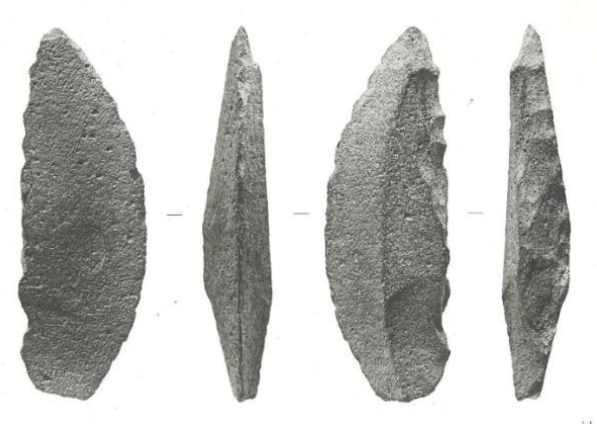


写真 39　旧石器時代のナイフ形石器
（螢谷遺跡）

土偶　縄文時代の土偶です。顔を立体的に形作り、眉と鼻を隆起させます。眉間から鼻筋や目尻、顎、頬周り等には入れ墨を表現しているらしい線刻があり、頭頂部には赤色顔料を塗布しています。

粟津湖底遺跡（大津市）の縄文時代中期前葉の貝塚から出土しました。粟津湖底遺跡ではこのほかにも立体的な土偶の頭部が出土していて、この形態の土偶の最西端の出土例として、日本列島における本県の立地特性を示しています。



写真 40　縄文時代の土偶
（粟津湖底遺跡）

丸木舟　縄文時代後期から晩期頃の丸木舟です。全長約 5.5m、幅約 0.6mで、半裁したモミ属の丸太材を約 0.3mの深さに削り込んでいます。舟内の表面には黒く焼け焦げた部分があり、製作時に木材の表面を焦がして削り取って成形したと推定できます。

尾上浜遺跡（長浜市）においては、琵琶湖に流れ込む流路の岸辺に停泊しているような状態で見つかりました。このほかにも、丸木舟は長命寺湖底遺跡（近江八幡市）や入江内湖遺跡（米原市）等でも出土しています。湖上での生業の様相を伝える出土文化財です。



写真 41　縄文時代の丸木舟
（尾上浜遺跡）

弥生土器　弥生時代前期の弥生土器です。遠賀川式と呼ばれる弥生土器（壺や甕、鉢等）であり、稲作文化の伝播を示す指標とされます。針江浜遺跡（高島市）から出土しました。

針江浜遺跡の発掘調査では、竪穴建物や水田畦畔の遺構とともに、まとまって出土しています。これらの遺跡は湖岸沿いや、河川の後背湿地に近い場所に営まれており、稲作文化の伝播当初は、水の管理が容易な場所に集落を営み、稲作をはじめたと推定されています。



写真 42　弥生時代前期の土器
（針江浜遺跡）

木偶　弥生時代中期の木偶（もくぐう）です。向かって左側は全長 55.8 cmです。横断面の形状が楕円形の木材に頭部と体部を削り出し、体部の下部は上部よりも細く削って、胸部と腹部・脚部を表現しています。右側は全長 35.5 cmで、丸太材から頭部と体部、脚部を削り出しています。いずれも目や口を彫り込んで表現しています。大中の湖南遺跡から出土しました。

右側の木偶の脚部には穴があります。湯ノ部（ゆべ）遺跡（野洲市）の出土例はここに棒を指し込んで男性像を表現しています。男女一対として祭祀に使ったと考えられています。

全国での出土数 15 点のうち、半数以上が本県の琵琶湖周辺域で見つかっている特徴的な遺物です(P27 写真 13 参照)。



写真 43　弥生時代中期の
木偶（大中の湖南遺跡）

土製人形　高さ 9.4cm、幅約 8.7cm、厚さ約 4.1cm です。粘土塊を手ごねで成形した素焼きの人形で、目や鼻、口等は表現されていません。赤野井湾湖底遺跡（守山市）において、古墳時代後期の川跡が見つかり、その岸辺や周辺から土鈴、土製勾玉、手づくね土器、そして舟形木製品や火きり臼等とともに出土しました。

土製人形が両手を左右に広げている姿は、神に捧げるために人を生け贄として磔にした様子を示すという説が示されています。



写真 44　古墳時代後期の土製人形等
（赤野井湾湖底遺跡）

舟形木製品　舟形木製品は、水辺の祭祀の特性を示す特徴的な祭祀具です。赤野井湾湖底遺跡から水辺の祭祀にかかわる多くの遺物とともに出土しました。全長は 10 cm程度から 80 cm 大までさまざまです。

琵琶湖における水辺の祭祀は、現在に至るまでさまざまな形で連綿と続いています。祭祀に関わる出土文化財からは、人と琵琶湖とが精神的につながりあう様子がうかがえます。



写真 45　古墳時代後期の舟形木製品
（赤野井湾湖底遺跡）

準構造船　赤野井浜遺跡や入江内湖遺跡、松原内湖遺跡（彦根市）等から、弥生時代から古墳時代にかけての準構造船の部材が出土しています。そのうち、赤野井浜遺跡から出土した部材（船首部分）は、弥生時代前期から中期前半頃の所産です。これまで出土した準構造船の部材としては近畿で最古級とされます。



写真 46　弥生時代の準構造船の船首部材
（赤野井浜遺跡）

木製農具　史跡大中の湖南遺跡にみるように、水中遺跡から出土する木製農具は保存状態が良好です（P56 写真 33）。木製農具の種類は多様で、赤野井湾湖底遺跡からは弥生時代から古墳時代にかけての木製鍬が数多く出土し、森浜遺跡（高島市）からは弥生時代後期の田下駄が出土しています。田下駄は湿潤な水田を歩く時に、足に付けて沈まないようにする道具です。また、針江浜遺跡からは、丸太を縦に分割した木材から製作する途中の弥生時代前期の鍬が出土しています。

無文銀銭　無文銀銭は、和同開珎や富本銭に先立つ日本最古の貨幣（銀貨）です。天武天皇 12（683）年以前、おそらく天智朝に鋳造されて流通したとみられていますが、無文銀銭の出土例は全国的にみても希少です。

唐橋（からはし）遺跡（大津市）では、飛鳥時代に構築された勢多橋（せたばし）の橋脚の基礎構造を覆う石群中から出土しています。



写真 47　無文銀銭（唐橋遺跡）

搬入土器　平安時代前期の須恵器や灰釉陶器です。浮御堂遺跡（大津市）から出土しました。この遺跡は、琵琶湖の東西幅が最も狭まる北湖と南湖の境目の西岸にあって、湖上交通の要衝として繁栄した堅田の地に位置します。

満月寺の湖岸と浮御堂の周辺では、使い終わった什器等を湖岸から投棄しつづけたらしく、浮御堂遺跡の発掘調査では、古墳時代から近世に至る厚さ２ｍ以上の遺物包含層を検出し、大量の土器等が出土しています。このうちの平安時代前期には、丹波や尾張地域から搬入された土器が多く含まれていることがわかりました。土器群の様相から、物資の流通や他地域との交流を読み取ることができる好例です。



写真 48　平安時代の土器（浮御堂遺跡）

神像　平安時代後期の神像（しんぞう）です。向かって左側は男神像です。当時の貴族の礼装姿で、冠を戴き、袖口を合わせて手を胸元で結んでいます。向かって左は俗体の女神像です。長い髪を肩から下に垂らし、袖口を胸元へ持ち上げています。

いずれも彩色の痕跡は見受けられず、目鼻は劣化してほとんど確認できませんが、顔の全体の造形からは穏やかな表情であったことがうかがえます。また、腰から下は造形を省略するようです。

塩津港遺跡（長浜市）の神社跡からは、この２体を含めて計５体の神像が出土しています。いずれも高さが 10～15 cmの木製の小型の神像です。他の３体は遺存状況がよくないものの、男神像１体、女神像２体と見られます。この５点のうちの４点は



写真 49　平安時代の神像（塩津港遺跡）

本殿の北側の堀から出土しています。地震の影響による津波によって、北側に倒壊した本殿内に祀られていたとされています。近辺からは破風板や蟇股、懸魚、高欄等の建築部材や、華鬘、瓔珞といった荘厳具が出土したほか、幣串やしめ縄等の祭礼の用具も出土しています。

起請文木札　保延３（1137）年銘の起請文木札です（P31 写真 17）。長さは 140cm、幅は 13cm です。久安４（1148）年「三春是行起請文」（東大寺文書）に先立ち日本最古です。

塩津港遺跡では、神社の南側の堀を中心に 400 点以上の起請文木札が出土しました。その内容はいずれも、運ぶ荷物を盗まないことや、盗まれないことを神々に誓約しています。素米や魚といった運搬物の内容や運搬時期等、当時の船運業の実態を知る貴重な文書群です。

船形代　船形代は長さ 10 数cmの小型の祭祀具です。船体（船底は欠損）と２か所の梁が残り、帆柱を取り付けた痕跡等もある精巧な構造船のミニチュアです。塩津港遺跡の護岸遺構からは、当時の琵琶湖を行き交った構造船の船釘や船板も出土しています。



写真 50　平安時代の船形代（塩津港遺跡）

以上の本県が収蔵保管する出土文化財のほかに、葛籠尾崎湖底遺跡から引き揚げられた縄文時代から平安時代にかけての土器等が広く知られています。その多くは葛籠尾崎湖底遺跡資料館（長浜市湖北町尾上）で展示公開されています。



写真 51　踏み板に転用された
平安時代の構造船の部材（塩津港遺跡）

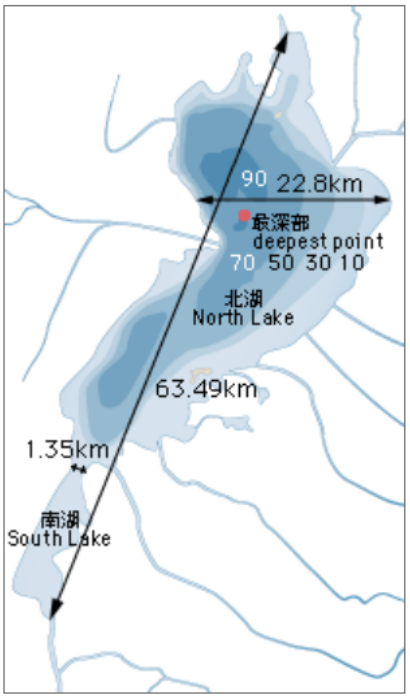
資料６　基礎データ

琵琶湖の大きさ

湖面積	669.26 km^2	滋賀県面積の約6分の1
長軸	63.49km	長浜市西浅井町塩津浜と 大津市玉野浦との間
最大幅	22.80km	長浜市下坂浜町と 高島市新旭町饗庭との間
最小幅	1.35km	琵琶湖大橋の長さと同じ
湖岸延長	235.20 km	ほぼ大津～浜松間

琵琶湖の深さ

水面標高	T.P.+84.371m O.P.B.+85.614m B.S.L.±0.0m	東京湾中等潮位 大阪湾最低潮位 琵琶湖基準水位（ほぼ大阪城天守閣の高さ）
湖容積	275億m^3	天ヶ瀬ダムの約1,000個分
最大水深	103.58 m	北湖平均水深約43m 南湖平均水深約4m



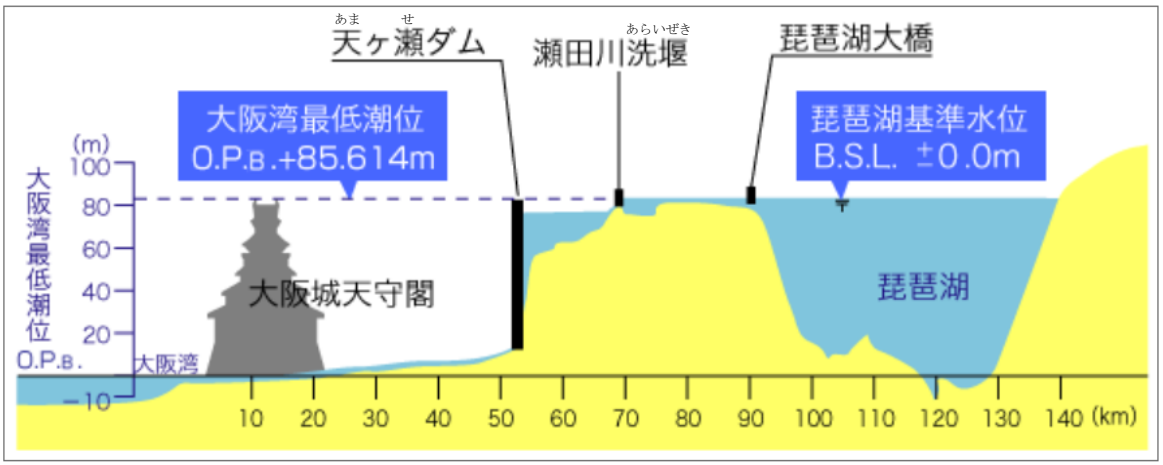


図 24　琵琶湖の基本データ

表３　　琵琶湖の水中遺跡の調査研究史

	和暦	西暦	調査内容等	調査者等	文献
前史	江戸時代中期		『雲根志』『百石図』等の執筆、刊行	木内石亭	表４ No.1
第１期	大正7以前	1918以前	東浅井郡朝日村尾上（長浜市湖北町尾上）地先の湖底から引き揚げられた石剣等が展覧会に出展され、濱田耕作が実見	漁業関係者『東浅井郡志』に濱田のコメントあり	表4 No.２
	大正13	1924	葛籠尾崎湖底遺跡（長浜市）の発見（土器の引き上げ）	漁業関係者	
	大正14	1925	葛籠尾崎湖底遺跡の引き揚げ土器の紹介	柴田常恵	
	昭和２	1927	葛籠尾崎湖底遺跡の引き揚げ土器の紹介	『東浅井郡志』	
	昭和３	1928	葛籠尾崎湖底遺跡の引き揚げ土器の紹介	島田貞彦	
	昭和24	1949	弁天島遺跡（近江八幡市）の発掘調査	日本考古学協会（山内清男）	
	昭和25	1950	葛籠尾崎湖底遺跡の引き揚げ土器の紹介	小江慶雄	
	昭和27	1952	粟津湖底遺跡（大津市）の発見	藤岡謙二郎	
	昭和34	1959	葛籠尾崎湖底遺跡の総合調査	びわ湖学術研究会(小江慶雄ほか)	
第２期	昭和37	1962	滋賀県教育委員会事務局に埋蔵文化財専門職員を配置		
	昭和39	1964	水茎Ｂ・Ｃ遺跡、大中の湖南遺跡（近江八幡市）の発掘調査	滋賀県教育委員会（水野正好）	
	昭和42	1967	大中の湖南遺跡の史跡指定		
	昭和47	1972	琵琶湖総合開発特別措置法の公布		
	昭和48 平成３	1973 1991	琵琶湖開発事業に伴う現地調査の開始 琵琶湖開発事業に伴う現地調査の終了	表５参照	滋賀県教育委員会・ 財団法人滋賀県文化財保護協会
	昭和55	1980	粟津湖底遺跡における「遺跡確認法の調査研究」の実施	文化庁・京都市埋蔵文化財研究所	
	昭和59	1984	世界湖沼環境会議（第１回世界湖沼会議）	滋賀県ほか	
第３期	平成４ 平成25	1992 2013	琵琶湖開発事業に伴う整理調査の開始 琵琶湖開発事業に伴う整理調査の終了	滋賀県教育委員会・ 財団法人滋賀県文化財保護協会	表６
	平成６	1994	琵琶湖大渇水時に際しての坂本城跡（大津市）の調査	滋賀県教育委員会・大津市教育委員会	
	平成９	1997	世界古代湖会議	滋賀県立琵琶湖博物館	
	平成９ 平成22	1997 2010	伝三ツ矢千軒遺跡（高島市）、尚江千軒遺跡（米原市）、下坂浜千軒遺跡（長浜市）ほかの調査	滋賀県立大学考古学研究室（林博通）	
	平成13	2001	第9回世界湖沼会議	滋賀県ほか	
	平成18 平成30	2006 2018	河川改修・国道改修に伴う 塩津港遺跡（長浜市）の発掘調査	滋賀県教育委員会・ 公益財団法人滋賀県文化財保護協会	
	平成23 平成27	2011 2015	相撲湖底遺跡（西浜千軒遺跡、長浜市）の調査	滋賀県立大学 琵琶湖水中考古学研究会	
	平成22	2010 ～	葛籠尾崎湖底遺跡の調査	立命館大学・認定NPO法人びわ湖トラスト（矢野健一ほか）	
	平成29	2017	葛籠尾崎湖底遺跡の調査（テレビ大阪協力）	滋賀県立琵琶湖博物館	
	令和元	2019 ～	朝妻沖湖底遺跡の調査（中川永協力）	米原市教育委員会ほか	表４ No.3～5
	令和４	2022 ～	坂本城跡の調査	京都橘大学文学部 歴史遺産学科（南健太郎）	
	令和５	2023	粟津湖底遺跡の調査（滋賀県建設技術センター協力）	滋賀県立琵琶湖博物館	
	令和５	2023	葛籠尾崎湖底遺跡の調査（滋賀県建設技術センター協力）	滋賀県立琵琶湖博物館	
	令和６	2024	葛籠尾崎湖底遺跡の調査（テレビ東京協力）	滋賀県立琵琶湖博物館	
	令和7	2025	葛籠尾崎湖底遺跡の調査（文化庁委託事業）	滋賀県	

表４　周知の埋蔵文化財包蔵地以外での調査関係文献一覧

No.	編著者、書名、発行所等	発行年	
1	木内石亭『石之長者　木内石亭全集』巻1～6、財団法人下之郷共済会	昭和11	1936
2	京都帝国大学『京都帝国大学文科大学考古学研究報告第二冊』	大正7	1918
3	中川永・大西遼「「朝妻沖湖底遺跡」の調査成果と基礎的検討」『人間文化』第50号、滋賀県立大学	令和3	2021
4	中川永・石田雄士・森田遥「「朝妻沖湖底遺跡」の調査成果と基礎的検討２」『人間文化』第55号、滋賀県立大学	令和5	2023
5	『令和6年度　米原市埋蔵文化財シンポジウム記録集　都と東国を結ぶ米原』米原市教育委員会	令和6	2024

表５　琵琶湖開発事業関連調査対象遺跡一覧および調査年表

凡例　◎分布調査、▽潜水試掘調査、▲試掘調査、■発掘調査

地区	No. ※1	遺跡名	調査年度																	
			昭和48	昭和49	昭和50	昭和51	昭和52	昭和53	昭和54	昭和55	昭和56	昭和57	昭和58	昭和59	昭和60	昭和61	昭和62	昭和63	平成1	平成2	平成3
湖北地域	1	早崎遺跡	◎	▲																
	8	尾上遺跡	◎										■	■		■					
	10	尾上浜遺跡	◎													▲			■	■	
	12	延勝寺湖底遺跡	◎									■	▽▲	▲		▽■	■	■	■		
	13	葛籠尾崎湖底遺跡	▽										▽								
	15	相撲湖底遺跡																	▽	■	■
	17	豊公園湖岸遺跡																	▽	▽	
	20	朝妻湊跡遺跡													▲						
	21	筑摩湖岸地域												▲	■						
	22	磯湖底遺跡														▽					
	27	多景島遺跡										▽	▽	▽							
湖東地域	29	長命寺湖底遺跡	◎									▲■	■								
	29・37	大房湖岸遺跡・長命寺湖底遺跡・岡山城地域	◎▲							■											
	36	牧湖岸遺跡	◎▲									▲									
	39	日野川河口地域	◎▲											▲							
	—	津田内湖地域	◎▲																		
	—	岡山城地域									■										
湖東南部地域	41	小津浜遺跡															■				
	42	赤野井湾湖底遺跡											▽	▽▲■	▽▲■	▽▲■	▲■	■	■		
	44	矢橋湖底遺跡							▲	▲	▽▲■	▲	▽	▲	■						
	46	北山田湖底遺跡										▲	▽	■		▽	■	▲			
	47	七条浦遺跡											▽▲		▲				▲■	■	
	48	津田江湖底遺跡											▽			■	▽■	▲■	■		
	49	烏丸崎遺跡										▲	▽▲	▽▲■	■	▲	▲■	■	▽▲■	▽▲■	▽■
	50	志那湖底遺跡									■	▽▲	▽▲	■※4	▲■	▽▲■	▲	▽■			
	—	北萱遺跡													▲	▲		■	■		
	—	山賀地域											▲	■	■	■					
湖西南部地域	52	浮御堂遺跡								◎	■	■									
	59	粟津湖底遺跡								▽※2		▽					▽	▽	▽	■	■
	61	大江湖底遺跡										▽		▽	■						
	62	唐崎遺跡								◎							▽	▽		■	■
	—	衣川地域								◎		■									
	—	真野地域								◎					▽						
瀬田川浚渫	55	唐橋遺跡										◎潜水					▽	■	■		
	60	螢谷遺跡										◎潜水	■	■	■	■					
	—	石山地域										◎潜水		■							
湖西北部地域	64	西浜遺跡											■								
	72	森浜遺跡	◎	▲			■※3	▲													
	73	針江浜遺跡	◎	▲												▽	■	■	■		
	75	深溝浜遺跡	◎	▲																	
	76	外ヶ浜遺跡	◎	▲											▽	▽					
	—	大溝地域														▽	■	■			
	—	四津川地域														▲					

※1：図22～29、表8の番号と一致
※2：文化庁による「遺跡確認法の調査研究」による
※3：矢板囲いによる初めての発掘調査
※4：完全沖合でのはじめての二重矢板囲い・常時排水による陸化発掘調査

表６　琵琶湖の水中遺跡の調査全体の概要がわかる文献一覧

No.	編著者、書名、発行所等	発行年	
1	小江慶雄『水中考古学研究』京都教育大学考古学研究会	昭和42	1967
2	小江慶雄『水中考古学入門』NHKブックス 421、日本放送出版協会	昭和57	1982
3	滋賀総合研究所編『びわ湖と埋蔵文化財』水資源開発公団琵琶湖開発事業建設部	昭和59	1984
4	財団法人滋賀県文化財保護協会『第38回企画展　水中考古学の世界―びわこ湖底の遺跡を掘る―』滋賀県立安土城考古博物館	平成21	2009
5	財団法人滋賀県文化財保護協会『びわこ水中考古学の世界』サンライズ出版	平成22	2010
6	公益財団法人滋賀県文化財保護協会『内湖とその暮らし―入江内湖、松原内湖、大中の湖・小中の湖―』シリーズ近江の文化財007	平成26	2014
7	公益財団法人滋賀県文化財保護協会『湖底遺跡が語る湖国二万年の歴史』シリーズ近江の文化財008	平成26	2014
8	公益財団法人滋賀県文化財保護協会『50年のねんりん－公益財団法人滋賀県文化財保護協会　設立50周年記念誌』	令和４	2022
9	福西貴彦「琵琶湖の水中遺跡」『発掘された日本列島2025　調査研究最前線』文化庁、共同通信社	令和7	2025

表７　琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書（滋賀県教育委員会　・財団法人滋賀県文化財保護協会発行）一覧

ｼﾘｰｽﾞNo.	書名	副書名	巻次	発行年	
1	粟津湖底遺跡第3貝塚	粟津湖底遺跡1	本文編、図版編・付表	平成9	1997
2	赤野井湾遺跡		第1～4分冊（本文編）、第5～6分冊(写真図版)	平成10	1998
3	粟津湖底遺跡	粟津湖底遺跡2		平成11	1999
3-2	粟津湖底遺跡自然流路	粟津湖底遺跡3		平成12	2000
4	粟津湖底遺跡予備調査・南調査地区	粟津湖底遺跡4		平成12	2000
5	山賀遺跡	守山市山賀町		平成13	2001
7	琵琶湖北東部の湖底・湖岸遺跡	葛籠尾崎湖底遺跡、寺ヶ浦遺跡、尾上浜遺跡、尾上遺跡、今西湖岸遺跡、延勝寺湖底遺跡	第1分冊(本文編)、第2分冊(資料編)	平成15	2003
8	琵琶湖西南部の湖底・湖岸遺跡	真野舟溜、浮御堂遺跡、穴太遺跡、唐崎遺跡、大江湖底遺跡	第1分冊(本文編)、第2分冊(写真図版編)	平成20	2008
9	烏丸崎遺跡・津田江湖底遺跡		第1～3分冊	平成20	2008
10	七条浦遺跡・志那湖底遺跡		第1分冊(本文編)、第2分冊(写真図版編)	平成23	2011
11	琵琶湖西北部の湖底・湖岸遺跡	西浜遺跡、森浜遺跡、針江浜遺跡、外ケ浜遺跡、四津川遺跡、大溝湖底遺跡	第1分冊(本文編)、第2分冊 (写真図版編)	平成26	2014
12	琵琶湖東南部草津川地域の湖底・湖岸遺跡	北山田湖底遺跡、矢橋湖底遺跡、矢橋港跡、北萱遺跡	第1分冊(本文編)、第2分冊(写真図版編)	平成25	2013
13	粟津第3貝塚2・自然流路2	粟津湖底遺跡5		平成25	2013
14	琵琶湖東部の湖底・湖岸遺跡	長命寺湖底遺、長命寺遺跡、大房遺跡、牧湖岸遺跡、岡山城遺跡、多景島遺跡	第1分冊(本文編)、第2分冊(写真図版編)	平成26	2014
15-1	琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財保管整理業務事業報告			平成26	2014
15-2	琵琶湖の湖底遺跡		調査成果総括編	平成26	2014
15-3	琵琶湖の湖底遺跡		調査成果概要、基礎データ編	平成26	2014



図 25　江戸時代中期の琵琶湖のかたち　元禄 14 年(1701 年) 近江国絵図

市ごとの琵琶湖の面積

	市名	面積（㎢）
1	高島市	181.93
2	長浜市	141.42
3	彦根市	98.59
4	大津市	89.92
5	近江八幡市	76.03
6	米原市	27.32
7	野洲市	19.58
8	草津市	19.17
9	守山市	10.16
10	東近江市	5.15

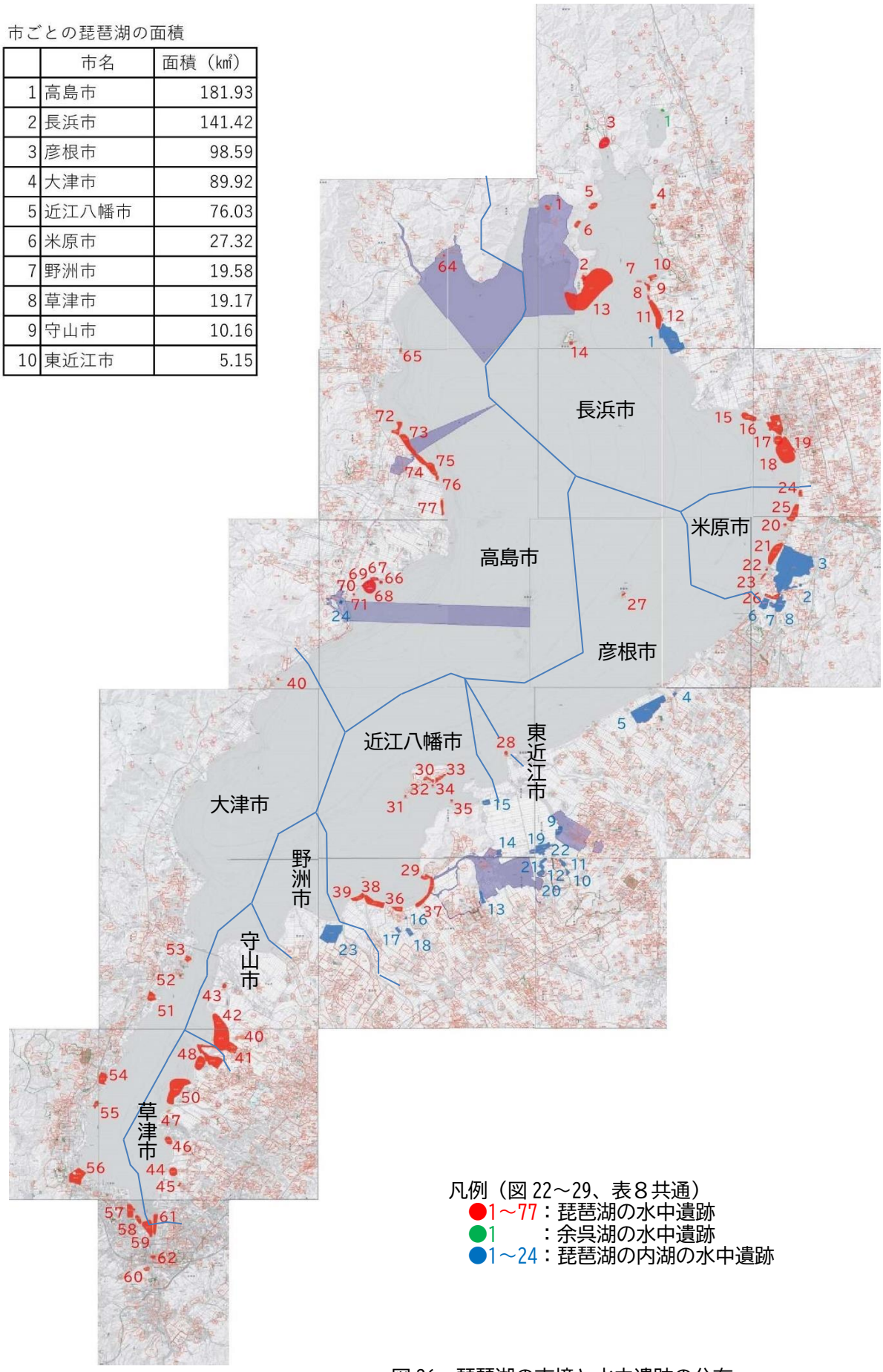


図 26　琵琶湖の市境と水中遺跡の分布

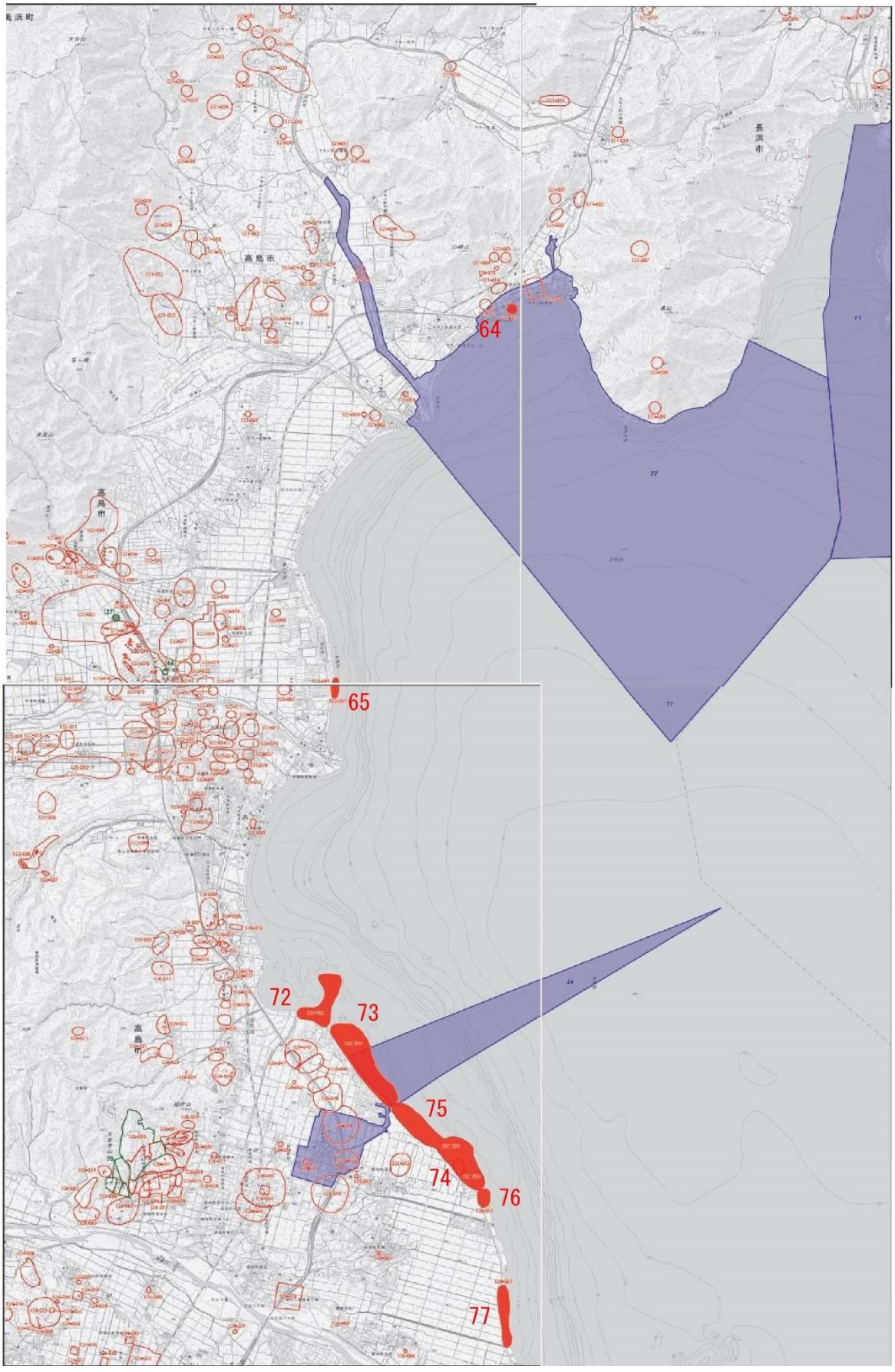


図 27　琵琶湖の水中遺跡の分布の詳細１

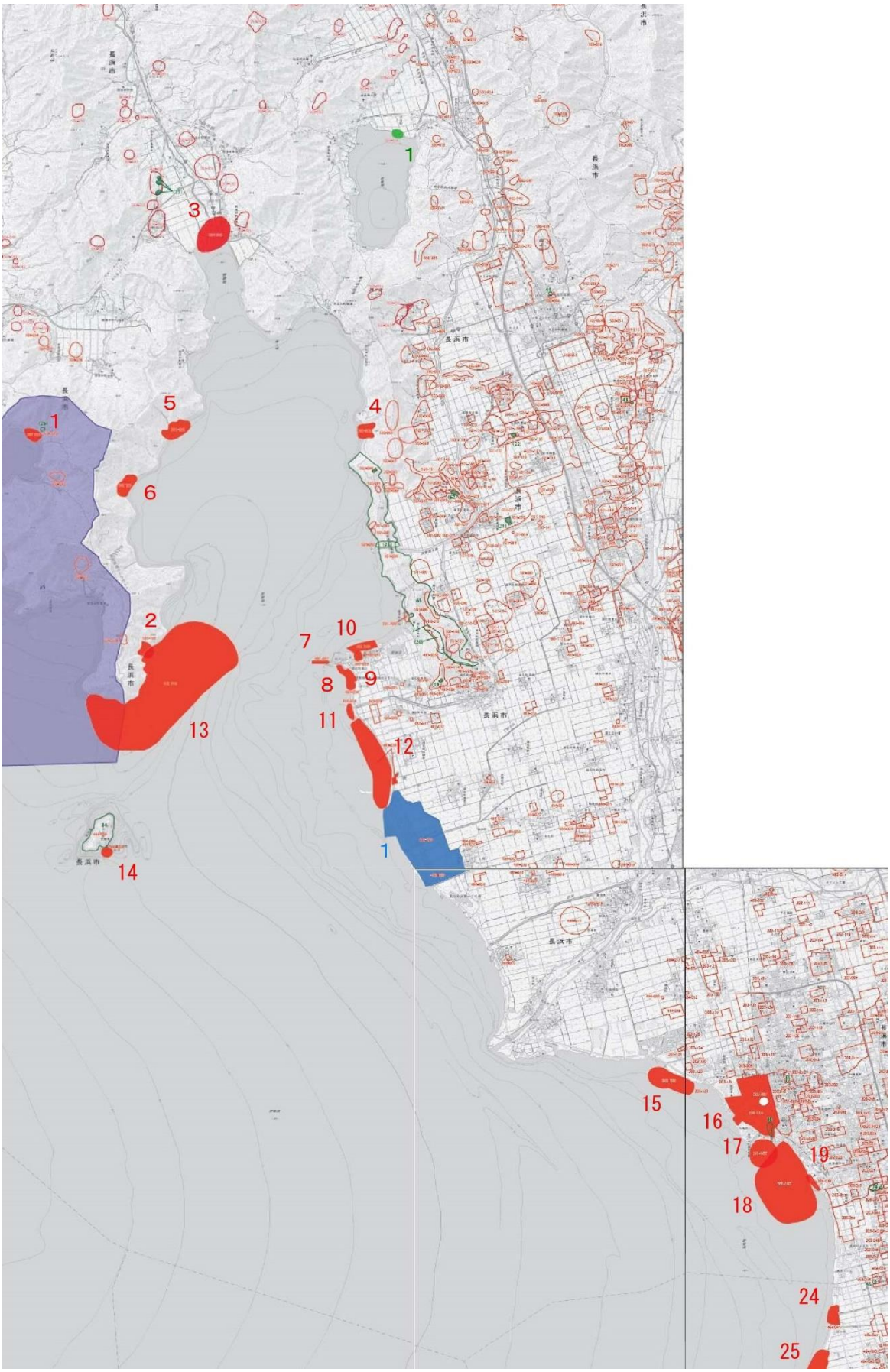


図 28　琵琶湖の水中遺跡の分布の詳細２

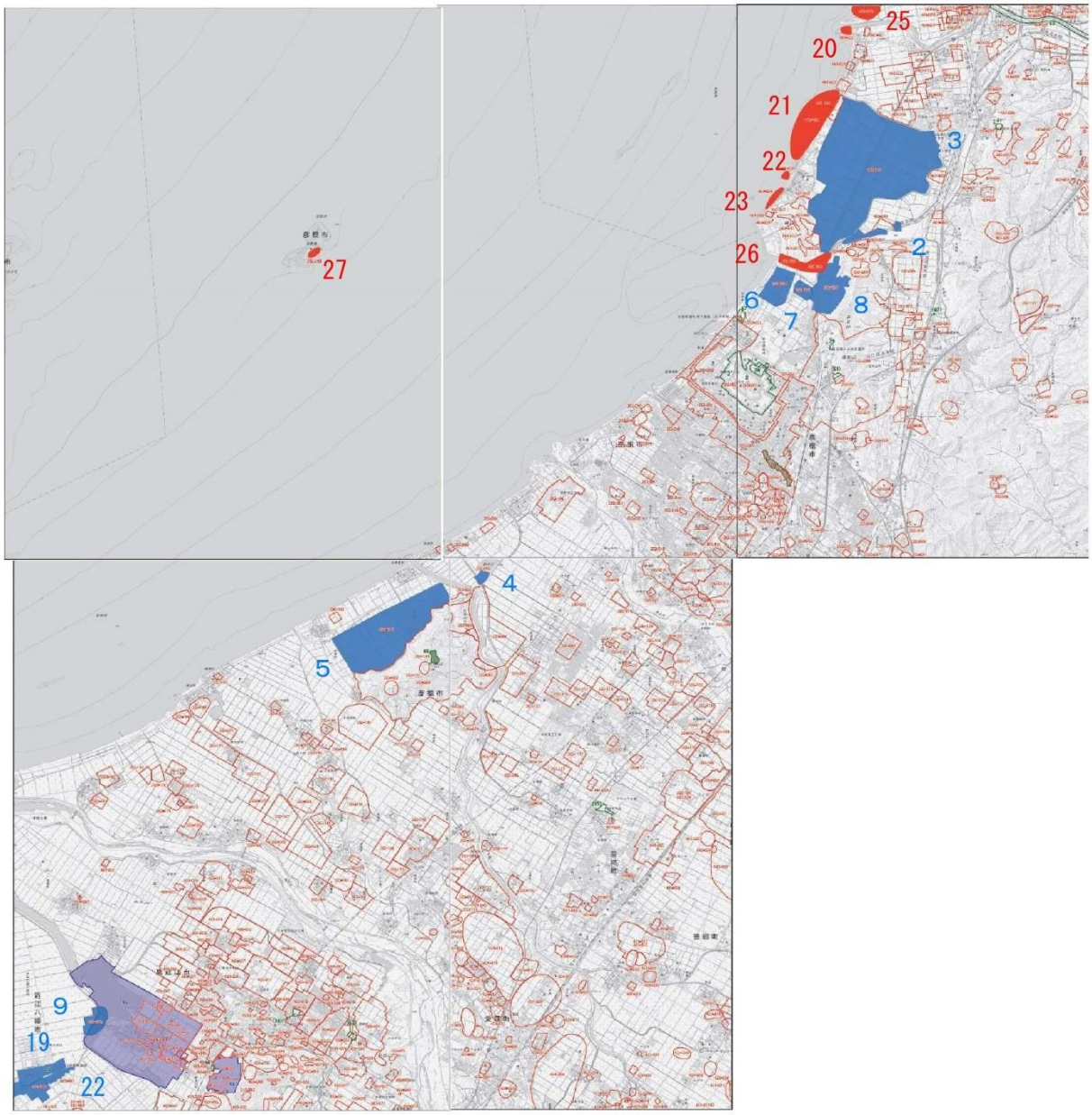


図 29　琵琶湖の水中遺跡の分布の詳細３

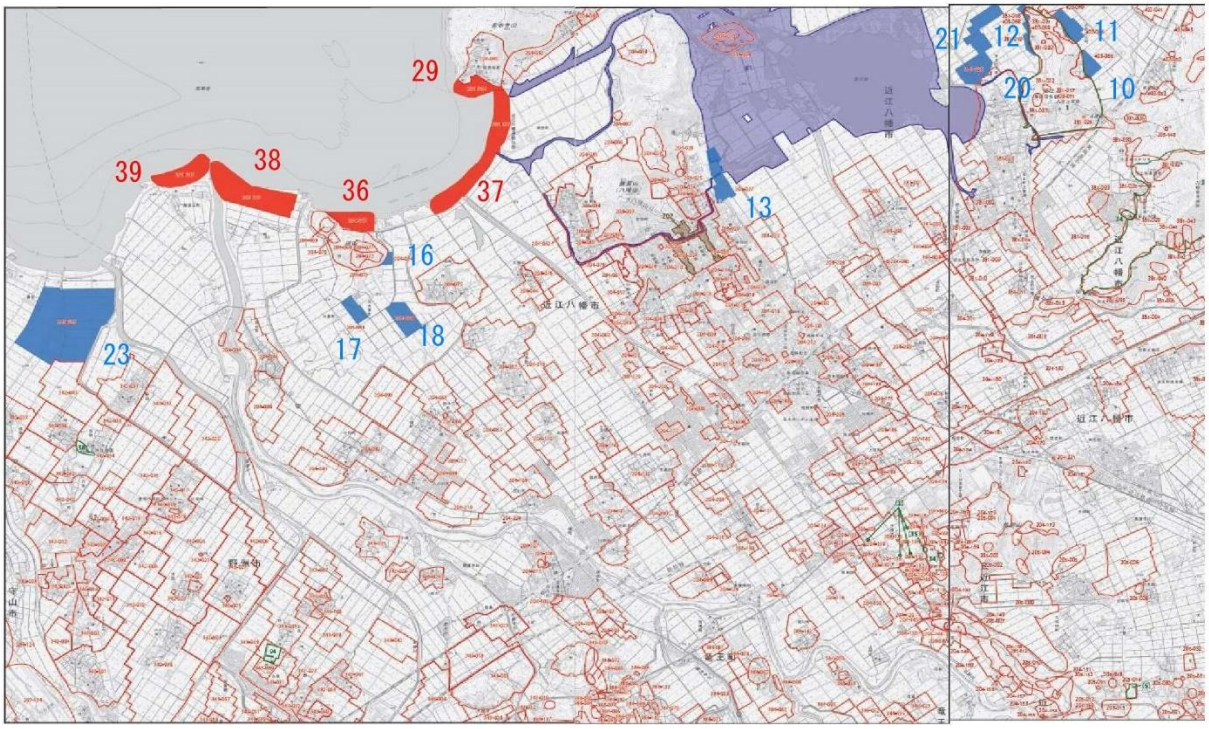


図 30　琵琶湖の水中遺跡の分布の詳細４

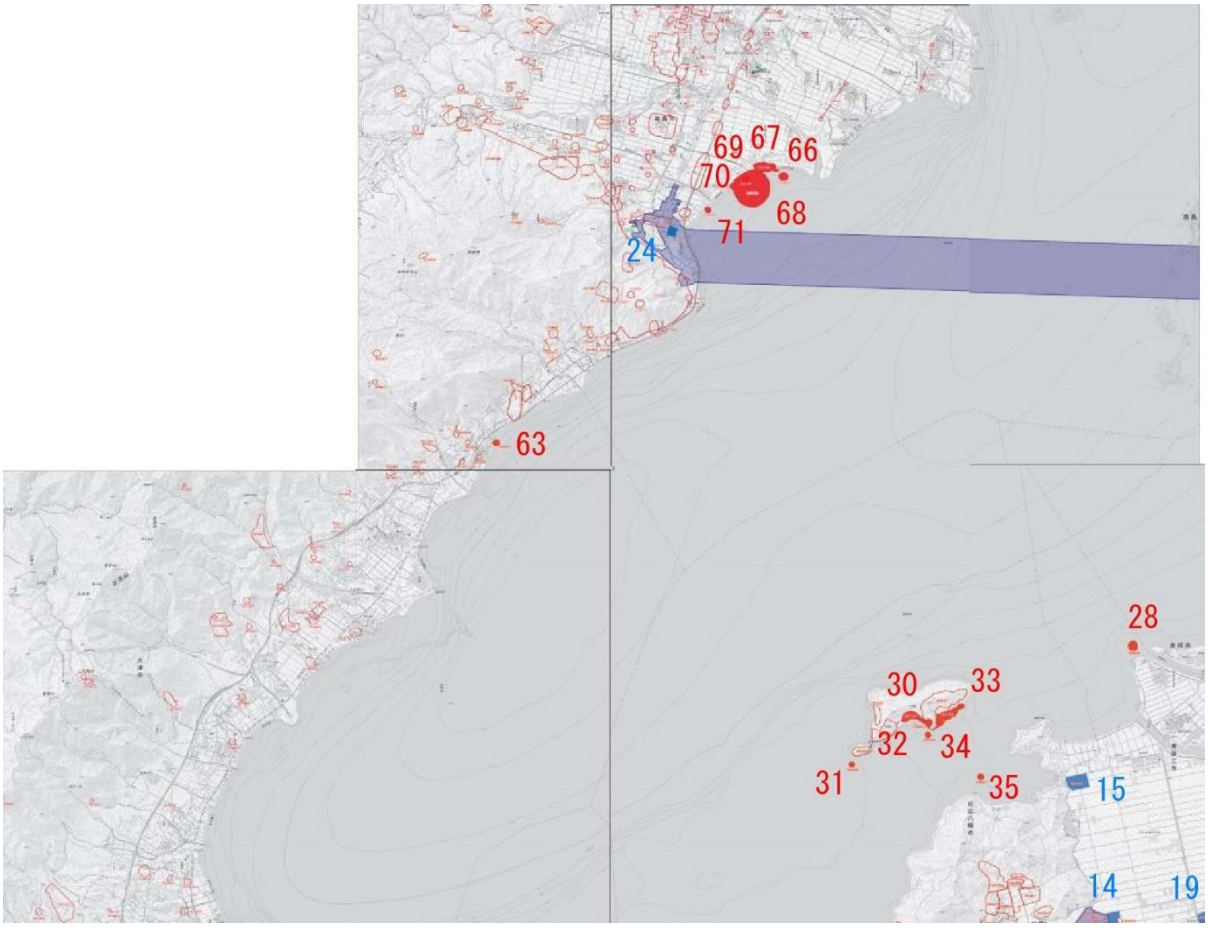


図 31　琵琶湖の水中遺跡の分布の詳細５

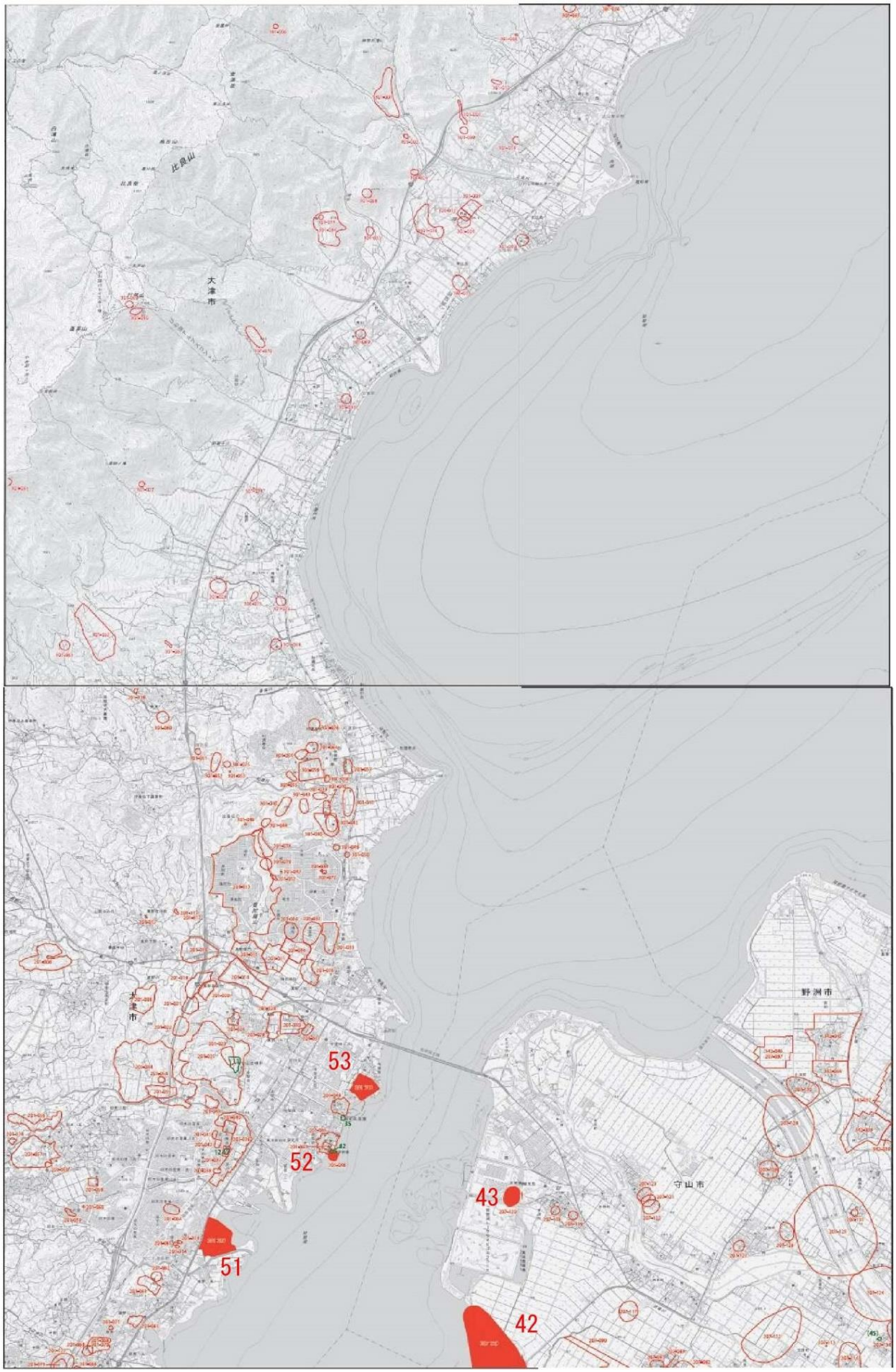


図 32　琵琶湖の水中遺跡の分布の詳細６

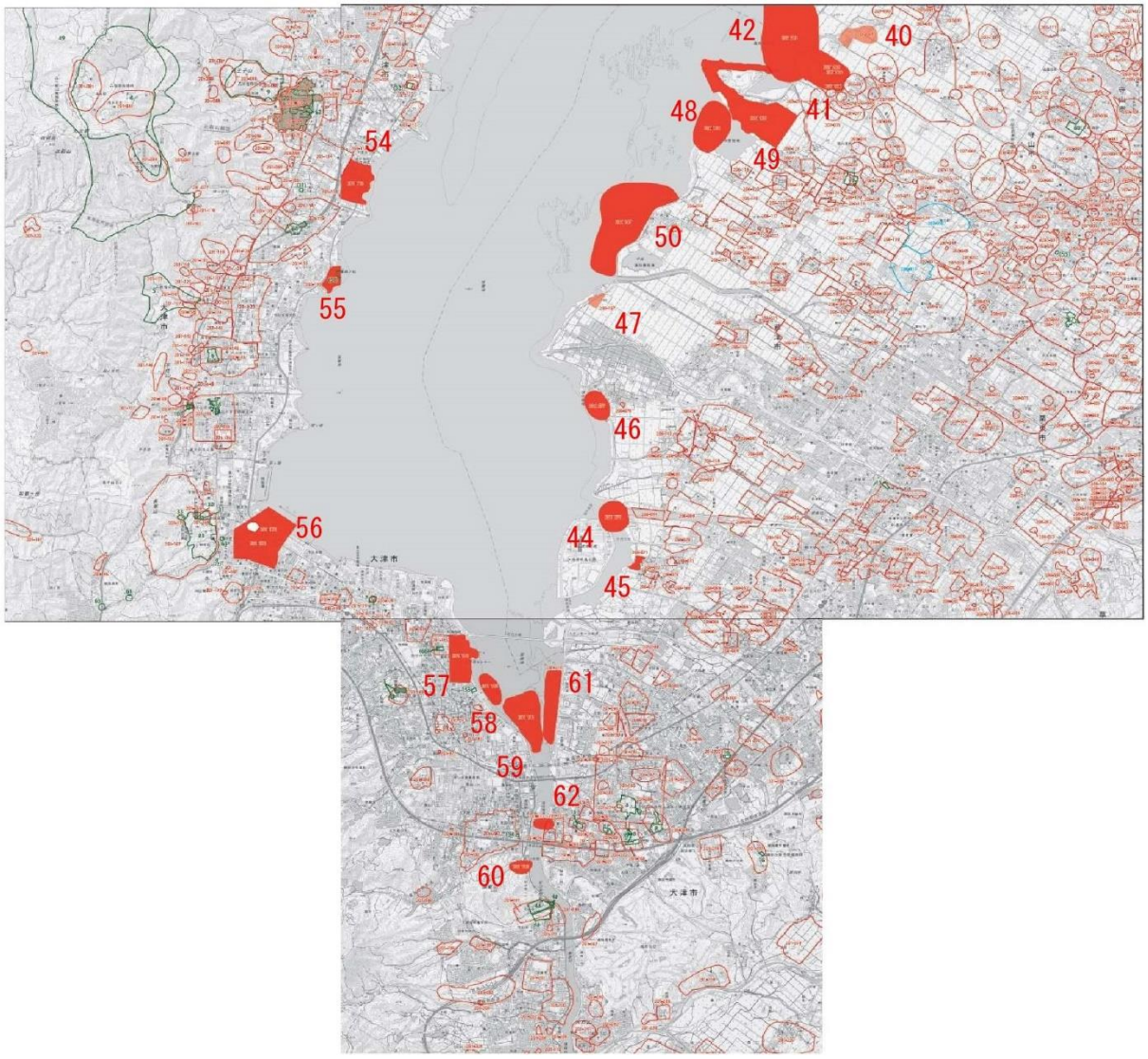


図 33　琵琶湖の水中遺跡の分布の詳細 7

表８　琵琶湖の水中遺跡　関係文献一覧

●琵琶湖の水中遺跡　関係文献一覧（『令和３年度　滋賀県遺跡地図』は省略）

No.	遺跡名（所在市町、時代、種別、種別、備考）			
	No.	編著者、書名、発行所等	発行年	
1	諸川湖底Ａ遺跡（長浜市、縄文、散布地）			
2	寺ケ浦遺跡（長浜市、その他、生産遺跡）			
	1	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書7　琵琶湖北東部の湖底･湖岸遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成15	2003
3	塩津港遺跡（長浜市、古代（平安）～中世（室町）、交通遺跡・社寺跡）			
	1	横田洋三、濱修「二〇〇七年出土の木簡：滋賀・塩津港遺跡」『木簡研究第30号』木簡学会	平成20	2008
	2	濱修「史料紹介：滋賀県塩津港遺跡出土の起請文札」『季刊 古代文化第60号』古代学協会	平成20	2008
	3	「各地の動向 近畿地方 滋賀・長浜市・塩津港遺跡 発掘調査現地説明会資料から」『文化財発掘出土情報第322号』ジャパン通信情報センター	平成20	2008
	4	滋賀県文化財保護協会「日本の遺跡・世界の遺跡：滋賀県塩津港遺跡」『会誌 考古学研究第55号』考古学研究会編集委員会	平成20	2008
	5	横田洋三、 濱修 「二〇〇八年出土の木簡：滋賀・塩津港遺跡」『木簡研究第31号』木簡学会	平成21	2009
	6	千々和 到「塩津・起請文木簡の古文書学的考察」『國學院雑誌第113巻第6号』國學院大學	平成24	2012
	7	横田洋三「滋賀県の考古学 第17回 塩津港遺跡に見る神社遺跡調査の現状と課題」『人間文化第28号』滋賀県立大学人間文化学部研究報告	平成23	2011
	8	「各地の動向 近畿地方 滋賀・長浜市・塩津港遺跡 発掘調査現地説明会資料から」『文化財発掘出土情報第382号』ジャパン通信情報センター	平成25	2013
	9	「二〇一二年出土の木簡：滋賀・塩津港遺跡」『木簡研究第35巻』木簡学会	平成25	2013
	10	加瀬直弥「塩津港遺跡起請文札から考える神祇信仰の地域性と重層性」『祭祀考古学８号』祭祀考古学会	平成26	2014
	11	「二〇一四年出土の木簡：滋賀・塩津港遺跡」『木簡研究第37号』木簡学会	平成27	2015
	12	横田洋三「塩津港遺跡出土の船形模型と琵琶湖の伝統的木造船」『紀要第28号』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成27	2015
	13	「二〇一五年出土の木簡：滋賀・塩津港遺跡」『木簡研究 第38号』木簡学会	平成28	2016
	14	重田勉「中世塩津港の開発」『紀要第29号』公益財団法人滋賀県文化財保護協会	平成28	2016
	15	『滋賀県内遺跡発掘調査報告書　平成26年度埋蔵文化財緊急調査費国庫補助事業（県内遺跡発掘調査等）』滋賀県教育委員会	平成28	2016
	16	重田勉「塩津港遺跡出土の古代銭」『出土銭貨第37号』出土銭貨研究会	平成29	2017
	17	松浦 俊和「おもしろ近江考古学(12)塩津港の賑わい：長浜市塩津港遺跡」『湖国と文化第41号3巻』公益財団法人 びわ湖芸術文化財団	平成29	2017
	18	『第60回企画展　塩津港遺跡発掘調査成果展－古代の神社と祭祀を中心に－』滋賀県立安土城考古博物館	平成31	2019
	19	『大川総合流域防災事業に伴う発掘調査報告書1　塩津港遺跡1』滋賀県・公益財団法人滋賀県文化財保護協会	令和元	2019
	20	山口健治「牛頭天王誕生の謎を解く鍵　一塩津港遺跡起請文札に記された「五頭天王」一」『非文字資料研究第17号』神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター	令和元	2019
	21	山下立「土中から出現する神：塩津港遺跡出土木像群を中心に」『紀要第25号』滋賀県立安土城考古博物館	平成30	2018

	22	横田洋三ほか「報告・塩津港遺跡(1)～(6)」『湖国と文化第43巻～45巻』公益財団法人 びわ湖芸術文化財団	令和元～3	2019～21
	23	水野章二ほか『よみがえる港・塩津　北国と京をつないだ琵琶湖の重要港』サンライズ出版	令和2	2020
	24	『大川総合流域防災事業に伴う発掘調査報告書2　塩津港遺跡2』滋賀県・公益財団法人滋賀県文化財保護協会	令和3	2021
	25	「釈文の訂正と追加(25)：滋賀・塩津港遺跡」『木簡研究第40号』 木簡学会	令和6	2024
	26	佐藤亜聖「中世の木簡」『季刊考古学174　特集　木簡研究の可能性』雄山閣	令和8	2026
4	阿曽津千軒遺跡（長浜市、中世・近世、集落跡・交通遺跡）			
5	片山湖底遺跡（長浜市、古墳、散布地）			
6	向山遺跡（長浜市、中世・近世、集落跡）			
7	余呉川口遺跡（長浜市、縄文～古代（平安）、散布地）			
8	尾上遺跡（長浜市、弥生～古代（平安）、集落跡）			
	1	『滋賀県史蹟調査報告第一冊　有史以前の近江』滋賀県保勝会	昭和3	1928
	2	『滋賀県史蹟名勝天然紀念物概要』滋賀県史蹟名勝天然記念物調査会	昭和11	1936
	3	『琵琶湖湖岸･湖底遺跡分布調査概要Ⅰ』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和48	1973
	4	『尾上遺跡発掘調査報告書　東浅井郡湖北町所在』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和60	1985
	5	『尾上遺跡発掘調査概要』湖北町教育委員会	昭和60	1985
	6	奈良俊哉「尾上遺跡出土の木製馬形代について」『滋賀考古学論叢　第４集』 滋賀考古学論叢刊行会	昭和63	1988
	7	奈良俊哉「尾上遺跡出土の祭祀用木製品について」『紀要第4号』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成2	1990
	8	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書7　琵琶湖北東部の湖底･湖岸遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成15	2003
9	尾上城遺跡（長浜市、中世、城館跡）			
	1	『滋賀県中世城郭分布調査1　城郭一覧･城郭関係史料目録(その一)･城郭分布図･シンポジウム近江の城「甲賀」･「湖北」』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀総合研究所	昭和58	1983
	2	『滋賀県中世城郭分布調査2　甲賀の城』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀総合研究所	昭和59	1984
	3	『滋賀県中世城郭分布調査3　旧野洲･栗太郡の城』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀総合研究所	昭和60	1985
10	尾上浜遺跡（長浜市、縄文～古代（平安）・近世（江戸）、散布地）			
	1	『滋賀県史蹟調査報告第一冊　有史以前の近江』滋賀県保勝会	昭和3	1928
	2	『琵琶湖湖岸･湖底遺跡分布調査概要Ⅰ』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和48	1973
	3	山崎清和「湖底遺跡で多量の斎串を検出(湖北町尾上尾上遺跡)」『滋賀文化財だよりNo.84』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和59	1984
	4	丸山竜平「伊香郡高月町葛篭尾崎・尾上湖底遺跡出土の磁鉄鉱について」『滋賀文化財だよりNo.90』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和59	1984
	5	奈良俊哉「「人形」「馬形」等の祭祀遺物を出土(湖北町尾上地先尾上湖底遺跡)」『滋賀文化財だよりNo.99』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和60	1985
	6	奈良俊哉「尾上遺跡出土の木製馬形代について」『滋賀考古学論叢第4集－南光雄先生退任記念論集－』滋賀考古学論叢刊行会	昭和63	1988

	7	大沼芳幸「抄網二題」『滋賀文化財だよりNo.153』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成2	1990
	8	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　平成元年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成2	1990
	9	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　平成2年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成3	1991
	10	横田洋三「縄文時代の丸木舟」『考古学ジャーナルNo.343』ニュー・サイエンス社	平成4	1992
	11	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書7　琵琶湖北東部の湖底･湖岸遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成15	2003
11	今西湖岸遺跡（長浜市、縄文～古代（平安）、散布地）			
	1	『琵琶湖湖岸･湖底遺跡分布調査概要Ⅰ』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和48	1973
	2	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書7　琵琶湖北東部の湖底･湖岸遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成15	2003
12	延勝寺湖底遺跡（長浜市、縄文～古代（平安）・近世（江戸）、散布地）			
	1	『琵琶湖湖岸･湖底遺跡分布調査概要Ⅰ』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和48	1973
	2	『埋蔵文化財調査概要Ⅰ　湖北町簡易水道西部地区布設事業に伴う』湖北町教育委員会	昭和58	1983
	3	奈良俊哉「弥生前期の土器包含層を検出(湖北町延勝寺湖底遺跡)」『滋賀文化財だよりNo.99』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和60	1985
	4	『延勝寺湖底遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和60	1985
	5	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　昭和62年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和63	1988
	6	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　昭和63年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成元	1989
	7	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　平成元年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成2	1990
	8	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書7　琵琶湖北東部の湖底･湖岸遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成15	2003
13	葛籠尾崎湖底遺跡（長浜市、縄文～古代（平安）、散布地）			
	1	柴田常恵「琵琶湖底より土石器を発見」『人類学雑誌第40巻第１号』東京人類学会	大正14	1925
	2	鳥居龍蔵「近江の琵琶湖中から出た厚手派土器」『有史以前の日本』磯部甲陽堂	大正14	1925
	3	黒田惟信『東浅井郡志　巻一』東浅井郡教育会	昭和２	1927
	4	島田貞彦『滋賀県史蹟調査報告第一冊　有史以前の近江』滋賀県保勝会	昭和３	1928
	5	『滋賀県史　第二巻』滋賀県	昭和３	1928
	6	小江慶雄『琵琶湖底先史土器序説－特に尾上地先湖底発見の縄文式土器について－』学而堂書店	昭和25	1950
	7	小江慶雄「琵琶湖湖底遺跡再考」『京都学芸大学学報Ａ No.13』京都学芸大学	昭和33	1958
	8	小江慶雄「滋賀県葛籠尾湖底遺跡」『滋賀県の自然と文化財1』	昭和41	1966
	9	小江慶雄「葛籠尾湖底発見遺物」「尾上地先余吾川口発見遺物」『水中考古学研究』京都教育大学考古学研究会	昭和42	1967
	10	小江慶雄『海の考古学－水底にさぐる歴史と文化』新人物往来社	昭和46	1971
	11	湖北町教育委員会『葛籠尾崎湖底遺跡 －その成因と土器－』湖北町教育委員会	昭和48	1973
	12	『琵琶湖湖岸･湖底遺跡分布調査概要Ⅰ』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和48	1973

	13	小江慶雄『水中考古学入門』NHKブックス 421、日本放送出版協会	昭和57	1982
	14	丸山竜平「伊香郡高月町葛篭尾崎・尾上湖底遺跡出土の磁鉄鉱について」『滋賀文化財だよりNo.90』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和59	1984
	15	滋賀県百科事典刊行会編『滋賀県百科事典』大和書房	昭和59	1984
	16	山中達夫「琵琶湖湖底遺跡」（森浩一『日本の遺跡発掘物語　９歴史時代Ⅱ（近畿）』社会思想社）	昭和60	1985
	17	小笠原好彦「葛篭尾崎湖底遺跡考」『滋賀史学会誌第7号』滋賀史学会	平成元	1989
	18	國學院大學日本文化研究所『柴田常恵写真資料目録Ⅱ』國學院大學学術フロンティア構想	平成18	2006
	19	中川永「葛籠尾崎湖底遺跡の再検討」『日本考古学協会代83回総会　研究発表要旨』日本考古学協会	平成29	2017
	20	矢野健一・川村貞夫・島田伸敬・熊谷道夫「水中ロボットを利用した葛籠尾崎湖底遺跡調査の成果とその意義」『環太平洋文明研究第３号』立命館大学環太平洋文明研究センター	平成31	2019
	21	『企画展　葛籠尾崎湖底遺跡ー深湖に眠る水の宝ー』長浜市長浜城歴史博物館	令和2	2020
	22	矢野健一「漁師喜助の発見　水中遺跡が語る数千年の営み」『K（002）』特定非営利法人Kint-K	令和3	2021
	23	中川永「葛籠尾崎湖底遺跡の再検討２」『滋賀県立大学考古学研究室論集Ⅰ　考古学研究室25周年・中井均先生退職記念』滋賀県立大学考古学研究室	令和3	2021
	24	矢野健一・熊谷道夫・西田祐也ほか2025「葛籠尾崎湖底遺跡における土器分布調査成果の概要」日本文化財科学会第42回大会	令和7	2025
	25	『葛籠尾崎湖底遺跡調査報告書』滋賀県	令和8	2026
14	竹生島寺遺跡（長浜市、その他、社寺跡）			
15	相撲湖底遺跡（長浜市、弥生～近世、散布地）			
	1	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　平成元年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成2	1990
	2	三宅弘「相撲湖底遺跡周辺の古環境について」『滋賀文化財だよりNo.159』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成3	1991
	3	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　平成2年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成3	1991
	4	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　平成3年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成4	1992
	5	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書7　琵琶湖北東部の湖底･湖岸遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成15	2003
	6	中川永「西浜千軒遺跡調査概報－琵琶湖湖底遺跡の調査－」『人間文化　第31号』滋賀県立大学	平成24	2012
	7	中川永「西浜千軒遺跡における自然科学分析について－琵琶湖湖底遺跡の調査－」『人間文化　第33号』滋賀県立大学	平成15	2013
	8	中川永・大西遼・谷口哲也「西浜千軒遺跡の消長と新発見の遺構群について－琵琶湖湖底遺跡の調査－」『人間文化　第36号』滋賀県立大学	平成16	2014
	9	中川永・大西遼「西浜千軒遺跡の測量成果と地形形成に関する基礎的考察 －琵琶湖湖底遺跡の調査－」『人間文化　第39号』、滋賀県立大学	平成17	2015
	10	中川永「西浜千軒遺跡－琵琶湖湖底遺跡の調査・研究－」『滋賀県立大学琵琶湖水中考古学研究会調査報告』サンライズ出版	平成28	2016
16	長浜城遺跡（長浜市、中世（室町）～江戸・城館跡・社寺跡）			
	1	『滋賀県史蹟名勝天然紀念物概要』滋賀県史蹟名勝天然記念物調査会	昭和11	1936
	2	坂田郡教育会編『近江國坂田郡志第1巻』坂田郡教育会	昭和16	1941

	3	近藤滋「滋賀県」『日本城郭大系11』新人物往来社	昭和55	1980
	4	滋賀県百科事典刊行会編『滋賀県百科事典』大和書房	昭和59	1984
	5	『長浜市埋蔵文化財調査資料第41集　宮司遺跡・長浜城遺跡・神照寺坊遺跡』長浜市教育委員会	平成14	2002
	6	『都市計画道路豊公園森線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書　長浜城遺跡･一丁田遺跡長浜市公園町･鐘紡町･末広町』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成19	2007
	7	『長浜市埋蔵文化財調査資料第82集　長浜城遺跡第136次調査』長浜市教育委員会	平成19	2007
	8	『長浜市埋蔵文化財調査資料第94集小規模開発関連発掘調査報告書北近江城館跡群下坂氏館跡・三田村氏館跡確認調査』長浜市教育委員会	平成22	2010
	9	『長浜市埋蔵文化財調査資料第149集　長浜城遺跡長浜市公園町』長浜市教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会	平成27	2015
	10	『長浜市埋蔵文化財調査資料第150集　長浜城遺跡第239次調査報告書』長浜市教育委員会	平成27	2015
	11	『長浜市埋蔵文化財調査資料第159集　長浜城遺跡第272次発掘調査報告書』長浜市教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会	平成29	2017
17	豊公園湖岸遺跡（長浜市、弥生、集落跡）			
	1	『長浜市・北舟西町・小字本丸出土石仏』滋賀県教育委員会	昭和37	1962
	2	水野正好「野洲郡守山町木ノ浜地先湖底出土の宋銭」『滋賀文化財研究所月報3』滋賀文化財研究所	昭和43	1968
	3	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　平成元年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成2	1990
	4	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書7　琵琶湖北東部の湖底･湖岸遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成15	2003
18	平方湖岸遺跡（長浜市、古代（奈良～平安）、散布地）			
19	下坂湖岸遺跡（長浜市、その他、集落跡）			
	1	林博通「琵琶湖湖底遺跡・下坂浜千軒遺跡の調査」『淡海文化財論叢』第２輯、 同刊行会	平成19	2007
20	朝妻湊跡遺跡（米原市、古代（奈良）～中世、その他（港跡））			
	1	『滋賀県史蹟名勝天然紀念物概要』滋賀県史蹟名勝天然記念物調査会	昭和11	1936
21	尚江千軒遺跡（米原市、古代～中世、散布地）			
	1	『米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　筑摩湖岸遺跡・磯湖岸遺跡試掘調査報告書』米原町教育委員会	昭和60	1985
	2	『米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅴ　筑摩湖岸遺跡発掘調査報告書』米原町教育委員会	昭和61	1986
	3	林博通『尚江千軒遺跡－琵琶湖湖底遺跡の調査・研究－』サンライズ出版	平成16	2004
	4	林博通・釜井俊孝・原口強「琵琶湖湖底遺跡・尚江千軒遺跡の考古学的調査と地盤工学的調査」『人間文化　第22号』滋賀県立大学	平成19	2007
22	磯湖底遺跡（米原市、縄文、集落跡）			
	1	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書7　琵琶湖北東部の湖底･湖岸遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成15	2003
23	磯湖岸遺跡（米原市、弥生～古墳、散布地）			
24	土川湖底遺跡（米原市、縄文～中世（鎌倉）、集落跡）			
	1	『近江町文化財調査報告書第1集　近江町内遺跡分布調査報告書』近江町教育委員会	昭和62	1987
25	世継遺跡（米原市、縄文～中世（鎌倉）、集落跡）			
	1	『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書19-3　坂田郡近江町世継遺跡・長浜市金剛寺遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和62	1987

	2	『近江町文化財調査報告書第1集　近江町内遺跡分布調査報告書』近江町教育委員会	昭和62	1987
26	矢倉川遺跡（彦根市、縄文～古代（平安）、散布地）			
	1	滋賀県百科事典刊行会編『滋賀県百科事典』大和書房	昭和59	1984
27	多景島遺跡（彦根市、弥生～近世（江戸）、散布地）			
	1	『多景島湖底遺跡Ⅰ』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和58	1983
	2	角上寿行「水深５ｍの湖底で炉跡を発見(彦根市八坂町地先多景島湖底遺跡)」『滋賀文化財だよりNo.85』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和59	1984
	3	滋賀総合研究所編『びわ湖と埋蔵文化財』水資源開発公団琵琶湖開発事業建設部	昭和59	1984
	4	喜多貞裕「湖底で古墳時代の炉跡検出(彦根市地先多景島湖底遺跡)」『滋賀文化財だよりNo.99』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和60	1985
	5	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書14　琵琶湖東部の湖底・湖岸遺跡長命寺湖底遺跡・長命寺遺跡・大房遺跡・牧湖岸遺跡・岡山城遺跡・多景島遺跡　第1分冊本文編』滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会	平成26	2014
	6	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書14　琵琶湖東部の湖底・湖岸遺跡長命寺湖底遺跡・長命寺遺跡・大房遺跡・牧湖岸遺跡・岡山城遺跡・多景島遺跡　第2分冊写真図版編』滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会	平成26	2014
28	栗見出在家遺跡（東近江市、その他、散布地）			
	1	滋賀総合研究所編『びわ湖と埋蔵文化財』水資源開発公団琵琶湖開発事業建設部	昭和59	1984
29	長命寺湖底遺跡（近江八幡市、縄文・弥生、散布地）			
	1	『琵琶湖湖岸･湖底遺跡分布調査概要Ⅰ』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和48	1973
	2	宮崎幹也「縄文晩期の丸木舟・櫂など出土(近江八幡市長命寺町長命寺湖底遺跡)」『滋賀文化財だよりNo.86』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和59	1984
	3	滋賀総合研究所編『びわ湖と埋蔵文化財』水資源開発公団琵琶湖開発事業建設部	昭和59	1984
	4	『長命寺湖底遺跡発掘調査概要近江八幡市』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和59	1984
	5	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書14　琵琶湖東部の湖底・湖岸遺跡長命寺湖底遺跡・長命寺遺跡・大房遺跡・牧湖岸遺跡・岡山城遺跡・多景島遺　跡第1分冊本文編』滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会	平成26	2014
	6	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書14　琵琶湖東部の湖底・湖岸遺跡長命寺湖底遺跡・長命寺遺跡・大房遺跡・牧湖岸遺跡・岡山城遺跡・多景島遺跡　第2分冊写真図版編』滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会	平成26	2014
30	沖島赤鼻西遺跡（近江八幡市、その他、散布地）			
31	沖島湖底遺跡（近江八幡市、縄文～弥生、散布地）			
32	沖島赤鼻遺跡（近江八幡市、古代（奈良）、その他(古銭出土地)）			
	1	『滋賀県史蹟名勝天然紀念物概要』滋賀県史蹟名勝天然記念物調査会	昭和11	1936
	2	『琵琶湖湖岸･湖底遺跡分布調査概要Ⅰ』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和48	1973
33	三香院遺跡（近江八幡市、その他、社寺跡）			
34	沖島赤鼻湖底遺跡（近江八幡市、縄文～弥生・古代（白鳳）、散布地）			
	1	『琵琶湖湖岸･湖底遺跡分布調査概要Ⅰ』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和48	1973
35	宮ヶ浜湖底遺跡（近江八幡市、旧石器、散布地）			

36	牧湖岸遺跡（近江八幡市、古代（飛鳥）・近世（江戸）、散布地）			
	1	『琵琶湖湖岸･湖底遺跡分布調査概要Ⅰ』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和48	1973
	2	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書14　琵琶湖東部の湖底・湖岸遺跡長命寺湖底遺跡・長命寺遺跡・大房遺跡・牧湖岸遺跡・岡山城遺跡・多景島遺跡　第1分冊本文編』滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会	平成26	2014
	3	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書14　琵琶湖東部の湖底・湖岸遺跡長命寺湖底遺跡・長命寺遺跡・大房遺跡・牧湖岸遺跡・岡山城遺跡・多景島遺跡　第2分冊写真図版編』滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会	平成26	2014
37	大房湖岸遺跡（近江八幡市、縄文・弥生、散布地）			
	1	『琵琶湖湖岸･湖底遺跡分布調査概要Ⅰ』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和48	1973
	2	滋賀総合研究所編『びわ湖と埋蔵文化財』水資源開発公団琵琶湖開発事業建設部	昭和59	1984
38	新畑湖岸遺跡（近江八幡市、弥生、散布地）			
39	佐波江湖岸遺跡（近江八幡市、弥生～古墳、散布地）			
	1	『琵琶湖湖岸･湖底遺跡分布調査概要Ⅰ』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和48	1973
40	赤野井浜遺跡（守山市、弥生～古墳、集落跡、陸地化）			
	1	『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書13-1』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和61	1986
	2	『守山市文化財調査報告書昭和61年度・62年度国庫補助事業』守山市教育委員会	昭和63	1988
	3	『守山市文化財調査報告書平成3年度国庫補助対象遺跡』守山市教育委員会	平成4	1992
	4	『ほ場整備関係（水質保全対策）遺跡発掘調査報告書35-2　弘前遺跡・赤野井遺跡守山市矢島町・赤野井町』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成20	2008
	5	『琵琶湖（赤野井湾）補助河川環境整備事業に伴う発掘調査報告書　赤野井浜遺跡　守山市赤野井町・杉江町地先』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成21	2009
41	小津浜遺跡（守山市、弥生～古墳、集落跡）			
	1	小竹森直子「縄文時代晩期~弥生時代中期の遺物多量に出土(守山市山賀小津浜遺跡)」『滋賀文化財だよりNo.117』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和62	1987
	2	『新守山川改修工事関連遺跡発掘調査概要Ⅳ守山市山賀遺跡･小津浜遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和62	1987
	3	岡本武憲「野洲川下流域の初期農耕集落(守山市杉江小津浜遺跡)」『滋賀文化財だよりNo.126』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和63	1988
	4	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　昭和62年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和63	1988
	5	岡本武憲「小津浜遺跡ＳＸ-1出土の弥生土器」『滋賀考古創刊号』滋賀考古学研究会	平成元	1989
	6	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　昭和63年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成元	1989
	7	小竹森直子「近江における条痕文土器の1例」『紀要第4号』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成2	1990
	8	井上洋介「滋賀県における打製石斧の消長についての一予察」『滋賀文化財だよりNo.189』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成5	1993
	9	伊庭功「小津浜遺跡から出土した特異な弥生土器について」『滋賀考古第15号』滋賀考古学研究会	平成8	1996
	10	伊庭功『滋賀考古第19号』滋賀考古学研究会	平成10	1998

	11	濱修「赤野井湾・小津浜遺跡出土の鉄鎌」『滋賀文化財だよりNo.240』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成10	1998
	12	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書6　小津浜遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成14	2002
42	赤野井湾湖底遺跡（守山市、縄文～古墳、集落跡）			
	1	濱修「赤野井湾遺跡出土の道具瓦について」『滋賀考古学論叢第3集－佐藤宗男先生還暦記念論集－』滋賀考古学論叢刊行会	昭和61	1986
	2	濱修「琵琶湖の水位変動を知る貴重な湖底遺跡(守山市赤野井地先赤野井湾遺跡)」『滋賀文化財だよりNo.110』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和61	1986
	3	『湖岸堤（赤野井南工区）工事に係る埋蔵文化財試掘調査概要報告書　赤野井湾遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和61	1986
	4	『湖岸堤天神川水門工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　赤野井湾遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和61	1986
	5	『赤野井港建設に係る埋蔵文化財発掘調査概要報告書　赤野井湾遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和61	1986
	6	『赤野井消波堤工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　赤野井湾遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和61	1986
	7	平井美典「守山市赤野井湾遺跡出土の縄文時代の耳飾り」『滋賀考古学論叢　第４集』滋賀考古学論叢刊行会	昭和62	1987
	8	濱修「古墳時代の祭祀遺物が出土(守山市赤野井赤野井湾遺跡)」『滋賀文化財だよりNo.117』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和62	1987
	9	平井美典「アカホヤ火山灰層下で遺構(守山市赤野井赤野井湾遺跡(浚渫Ａ))」『滋賀文化財だよりNo.117』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和62	1987
	10	『湖岸堤天神川水門工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書2　赤野井湾遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和62	1987
	11	平井美典「守山市赤野井湾遺跡出土の縄文時代耳飾り」『滋賀考古学論叢第4集－南光雄先生退任記念論集－』滋賀考古学論叢刊行会	昭和63	1988
	12	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　昭和62年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和63	1988
	13	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　昭和63年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成元	1989
	14	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　平成元年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成2	1990
	15	濱修「赤野井湾・小津浜遺跡出土の鉄鎌」『滋賀文化財だよりNo.240』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成10	1998
	16	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書2　赤野井湾遺跡　第2分冊』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成10	1998
	17	『赤野井湾補助河川環境整備に伴う発掘調査概要報告書2　赤野井湾遺跡　守山市山賀町』滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会	平成24	2012
43	木浜湖底遺跡（守山市、中世（室町）、その他(古銭出土地)）			
44	矢橋湖底遺跡（草津市、縄文～近世（江戸）、散布地）			
	1	『矢橋沖浄化センター建設に伴う発掘調査報告』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和52	1977
	2	『湖南中部流域下水道矢橋処理場中間水路浚渫工事予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書Ⅰ』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和57	1982

	3	『湖南中部流域下水道矢橋処理場中間水路浚渫工事予定地内矢橋湖底遺跡試掘調査報告書Ⅱ 滋賀県草津市矢橋町所在』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和57	1982
	4	滋賀総合研究所編『びわ湖と埋蔵文化財』水資源開発公団琵琶湖開発事業建設部	昭和59	1984
	5	『石田遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和61	1986
	6	『湖岸堤矢橋工区埋蔵文化財試掘調査概要報告書』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和61	1986
	7	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書12　琵琶湖東南部草津川地域の湖底・湖岸遺跡北山田湖底遺跡・矢橋湖底遺跡・矢橋港跡・北萱遺跡　第1分冊本文編』滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会	平成25	2013
	8	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書12　琵琶湖東南部草津川地域の湖底・湖岸遺跡北山田湖底遺跡・矢橋湖底遺跡・矢橋港跡・北萱遺跡　第2分冊写真図版編』滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会	平成25	2013
45	矢橋港跡（草津市、近世（江戸）、その他(港跡)）			
	1	草津市史編纂委員会編『草津市史1~3巻』草津市	昭和56~61	1981~86
	2	別所健二「「矢橋帰帆」の実態確認(草津市矢橋町矢橋港遺跡)」『滋賀文化財だよりNo.73』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和58	1983
	3	滋賀総合研究所編『びわ湖と埋蔵文化財』水資源開発公団琵琶湖開発事業建設部	昭和59	1984
	4	滋賀県百科事典刊行会編『滋賀県百科事典』大和書房	昭和59	1984
	5	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書12　琵琶湖東南部草津川地域の湖底・湖岸遺跡北山田湖底遺跡・矢橋湖底遺跡・矢橋港跡・北萱遺跡　第1分冊本文編』滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会	平成25	2013
	6	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書12　琵琶湖東南部草津川地域の湖底・湖岸遺跡北山田湖底遺跡・矢橋湖底遺跡・矢橋港跡・北萱遺跡　第2分冊写真図版編』滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会	平成25	2013
46	北山田湖底遺跡（草津市、縄文～近世（江戸）、散布地）			
	1	滋賀総合研究所編『びわ湖と埋蔵文化財』水資源開発公団琵琶湖開発事業建設部	昭和59	1984
	2	『志那･北山田湖底遺跡調査報告書』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和60	1985
	3	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　昭和62年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和63	1988
	4	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　昭和63年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成元	1989
	5	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書12　琵琶湖東南部草津川地域の湖底・湖岸遺跡北山田湖底遺跡・矢橋湖底遺跡・矢橋港跡・北萱遺跡　第1分冊本文編』滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会	平成25	2013
	6	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書12　琵琶湖東南部草津川地域の湖底・湖岸遺跡北山田湖底遺跡・矢橋湖底遺跡・矢橋港跡・北萱遺跡第2分冊写真図版編』滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会	平成25	2013
47	七条浦遺跡（草津市、弥生、散布地、陸地化）			
	1	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　平成元年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成2	1990
	2	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書10　七条浦遺跡・志那湖底遺跡　第1分冊本文編』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成23	2011
	3	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書10　七条浦遺跡・志那湖底遺跡　第2分冊写真図版編』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成23	2011

48	津田江湖底遺跡（草津市、縄文～古墳、散布地）			
	1	『琵琶湖湖岸･湖底遺跡分布調査概要Ⅰ』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和48	1973
	2	井上洋介「縄文時代前期の甕棺か？(草津市津田江津田江遺跡)」『滋賀文化財だよりNo.118』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和62	1987
	3	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　昭和62年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和63	1988
	4	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　昭和63年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成元	1989
	5	井上洋介「津田江湖底遺跡の表採遺物について」『紀要第4号』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成2	1990
	6	寒川旭「湖国の地震考古学（下）」『文化財教室シリーズ115』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成2	1990
	7	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　平成元年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成2	1990
	8	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　平成2年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成3	1991
	9	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　平成3年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成4	1992
	10	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　平成5年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成4	1992
	11	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　平成8年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成4	1992
	12	田井中洋介「草津市津田江湖底遺跡出土の特異な石器について」『滋賀考古第16号』滋賀考古学研究会	平成8	1996
	13	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書9　烏丸崎遺跡・津田江湖底遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成20	2008
49	烏丸崎遺跡（草津市、縄文～古代（平安）、集落跡・その他（墓跡））			
	1	滋賀総合研究所編『びわ湖と埋蔵文化財』水資源開発公団琵琶湖開発事業建設部	昭和59	1984
	2	岡本隆子「弥生期の玉作り工房などを検出(草津市下物町地先烏丸崎遺跡)」『滋賀文化財だよりNo.100』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和60	1985
	3	兼康保明・前角和夫「弥生時代中期の周溝墓群(草津市下物地先烏丸崎遺跡)」『滋賀文化財だよりNo.110』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和61	1986
	4	伊庭功「弥生時代中期の方形周溝墓と木棺検出(草津市下物烏丸崎遺跡)」『滋賀文化財だよりNo.126』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和63	1988
	5	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　昭和62年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和63	1988
	6	伊庭功「烏丸崎遺跡出土の弥生中期の土器について」『滋賀考古創刊号』滋賀考古学研究会	平成元	1989
	7	横田明「烏丸崎遺跡の発掘調査」『滋賀考古第2号』滋賀考古学研究会	平成元	1989
	8	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　昭和63年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成元	1989
	9	横田明「弥生前期土壙群と中期方形周溝墓群(草津市下物町烏丸崎遺跡)」『滋賀文化財だよりNo.147』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成2	1990
	10	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　平成元年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成2	1990

	11	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　平成2年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成3	1991
	12	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　平成3年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成4	1992
	13	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　平成6年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成4	1992
	14	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　平成7年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成4	1992
	15	仲川靖・清水ひかる「滋賀県烏丸崎遺跡」『日本考古学年報』44(1991年度版)』日本考古学協会	平成5	1993
	16	岩橋隆浩「草津市烏丸崎遺跡の調査(草津市下物町烏丸崎遺跡)」『滋賀文化財だよりNo.194』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成6	1994
	17	濱修「≪特集・地震の考古学10≫－滋賀県(1)」『古代学研究第142号』古代学研究会	平成10	1998
50	志那湖底遺跡（草津市、縄文～中世、集落跡）			
	1	『滋賀県史蹟名勝天然紀念物概要』滋賀県史蹟名勝天然記念物調査会	昭和11	1936
	2	滋賀総合研究所編『びわ湖と埋蔵文化財』水資源開発公団琵琶湖開発事業建設部	昭和59	1984
	3	『粟津貝塚湖底遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和59	1984
	4	『志那･北山田湖底遺跡調査報告書』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和60	1985
	5	奈良俊哉「縄文時代後期の遺物包含層・弥生時代中期の溝など検出(草津市志那中町地先志那湖底遺跡)」『滋賀文化財だよりNo.110』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和61	1986
	6	『湖岸堤管理用道路志那北その2工区建設に伴う志那湖底遺跡試掘調査報告書　草津市志那中町地先』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和61	1986
	7	『志那漁港工区発掘調査概要報告書』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和61	1986
	8	『湖岸堤管理用道路志那北その2工区志那湖底遺跡発掘調査概要報告書　草津市志那中町地先所在』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和62	1987
	9	『志那湖底遺跡発掘調査概要志那南その2工区』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和62	1987
	10	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　昭和62年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和63	1988
	11	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　昭和63年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成元	1989
	12	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書10　七条浦遺跡・志那湖底遺跡第1分冊本文編』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成23	2011
	13	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書10　七条浦遺跡・志那湖底遺跡第2分冊写真図版編』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成23	2011
51	山ノ下遺跡（大津市、弥生、散布地）			
	1	林屋辰三郎他編『新修大津市史　第1巻・第3巻・第7巻・第8巻・第9巻』大津市	昭和53~62	1978~87
	2	『琵琶湖湖岸･湖底遺跡分布調査概要Ⅱ　大津市堅田~瀬田川河口』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和56	1981
52	浮御堂遺跡（大津市、古代（奈良）～近世（江戸）、散布地）			
	1	『琵琶湖湖岸･湖底遺跡分布調査概要Ⅱ　大津市堅田~瀬田川河口』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和56	1981
	2	滋賀総合研究所編『びわ湖と埋蔵文化財』水資源開発公団琵琶湖開発事業建設部	昭和59	1984

	3	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書8　琵琶湖西南部の湖底・湖岸遺跡真野舟溜・浮御堂遺跡・穴太遺跡・唐崎遺跡・大江湖底遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成20	2008
53	今堅田城跡（大津市、中世（室町）～近世、城館跡）			
	1	『琵琶湖湖岸･湖底遺跡分布調査概要Ⅱ大津市堅田~瀬田川河口』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和56	1981
	2	『滋賀県中世城郭分布調査報告9　旧滋賀郡の城』滋賀県教育委員会	平成4	1992
54	坂本城跡（大津市、中世（安土・桃山）、城館跡）			
	1	『滋賀県史蹟名勝天然紀念物概要』滋賀県史蹟名勝天然記念物調査会	昭和11	1936
	2	林屋辰三郎他編『新修大津市史　第1巻・第3巻・第7巻・第8巻・第9巻』大津市	昭和53~62	1978~87
	3	吉水真彦「近江坂本城跡の発掘調査<速報>」『滋賀文化財だよりNo.33』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和54	1979
	4	吉水真彦・松浦俊和「文化財レポート坂本城の発掘調査」『日本歴史第387号』吉川弘文館	昭和55	1980
	5	『琵琶湖湖岸･湖底遺跡分布調査概要Ⅱ　大津市堅田~瀬田川河口』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和56	1981
	6	吉水真彦「新たに白鳳期の寺院跡を発見(大津市坂本本町字八条坂本城遺跡)」『滋賀文化財だよりNo.84』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和59	1984
	7	滋賀県百科事典刊行会編『滋賀県百科事典』大和書房	昭和59	1984
	8	『滋賀県中世城郭分布調査報告9　旧滋賀郡の城』滋賀県教育委員会	平成4	1992
	9	『織豊期城郭基礎調査報告書1』滋賀県教育委員会・滋賀県安土城郭調査研究所	平成8	1996
	10	『滋賀県埋蔵文化財調査年報　平成6年度』滋賀県教育委員会	平成8	1996
	11	『大津市埋蔵文化財調査報告書　坂本城跡発掘調査報告書』大津市教育委員会	平成20	2008
	12	『大津市埋蔵文化財調査報告書（134）坂本城跡遺跡発掘調査報告書』大津市教育委員会	令和2	2020
	13	『大津市埋蔵文化財調査報告書（143）坂本城跡発掘調査報告書』大津市教育委員会	令和3	2021
	14	『京都橘大学歴史遺産調査報告2022　坂本城跡、南畑古墳群、宇佐山城跡』京都橘大学文学部	令和5	2023
	15	『京都橘大学歴史遺産調査報告2023　宇佐山城跡、坂本城跡、南畑古墳群』京都橘大学文学部	令和６	2024
	16	『京都橘大学歴史遺産調査報告2024　宇佐山城跡、坂本城跡、中富片山古墳、豊倉１号墳、北牧野古墳群』京都橘大学文学部	令和７	2025
55	唐崎遺跡（大津市、弥生～近世、散布地）			
	1	林屋辰三郎他編『新修大津市史　第1巻・第3巻・第7巻・第8巻・第9巻』大津市	昭和53~62	1978~87
	2	『琵琶湖湖岸･湖底遺跡分布調査概要Ⅱ大津市堅田~瀬田川河口』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和56	1981
	3	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　昭和62年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和63	1988
	4	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　昭和63年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成元	1989
	5	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　平成2年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成3	1991

	6	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書8　琵琶湖西南部の湖底・湖岸遺跡真野舟溜・浮御堂遺跡・穴太遺跡・唐崎遺跡・大江湖底遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成20	2008
56	大津城跡（大津市、中世（安土・桃山）、城館跡）			
	1	『滋賀県史蹟名勝天然紀念物概要』滋賀県史蹟名勝天然記念物調査会	昭和11	1936
	2	林屋辰三郎他編『新修大津市史　第1巻・第3巻・第7巻・第8巻・第9巻』大津市	昭和53~62	1978~87
	3	田辺昭三「滋賀県における考古学研究の現状と展望」『近江地方史研究第10号』近江地方史研究会	昭和54	1979
	4	『琵琶湖湖岸･湖底遺跡分布調査概要Ⅱ　大津市堅田~瀬田川河口』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和56	1981
	5	『大津市埋蔵文化財調査報告書(1)大津城跡発掘調査報告書Ⅰ』大津市教育委員会	昭和56	1981
	6	『大津市埋蔵文化財調査報告書(4)埋蔵文化財調査集報Ⅰ』大津市教育委員会	昭和57	1982
	7	滋賀県百科事典刊行会編『滋賀県百科事典』大和書房	昭和59	1984
	8	松浦俊和「滋賀・大津城跡」『木簡研究第7号』木簡学会	昭和60	1985
	9	『滋賀県中世城郭分布調査報告9　旧滋賀郡の城』滋賀県教育委員会,	平成4	1992
	10	『大津市埋蔵文化財調査報告書(70)大津城跡遺跡発掘調査報告書』大津市教育委員会	平成25	2013
57	膳所城跡（大津市、近世（江戸）、城館跡）			
	1	『滋賀県史蹟名勝天然紀念物概要』滋賀県史蹟名勝天然記念物調査会	昭和11	1936
	2	『大津市膳所城趾跡発掘調査報告』大津市教育委員会	昭和30	1955
	3	林屋辰三郎他編『新修大津市史　第1巻・第3巻・第7巻・第8巻・第9巻』大津市	昭和53~62	1978~87
	4	『琵琶湖湖岸･湖底遺跡分布調査概要Ⅱ　大津市堅田~瀬田川河口』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和56	1981
	5	滋賀県百科事典刊行会編『滋賀県百科事典』大和書房	昭和59	1984
	6	大上直樹「古絵図より見た膳所城」『滋賀文化財だよりNo.97』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和60	1985
	7	『大津市埋蔵文化財調査報告書（16）膳所城本丸跡発掘調査報告書』大津市教育委員会	平成2	1990
	8	『滋賀県中世城郭分布調査報告9　旧滋賀郡の城』滋賀県教育委員会	平成4	1992
	9	『近江大橋有料道路建設工事（西詰交差点改良）に伴う発掘調査報告書2　膳所城遺跡大津市丸の内町』滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会	平成25	2013
58	膳所湖底遺跡（大津市、弥生、散布地）			
	1	林屋辰三郎他編『新修大津市史　第1巻・第3巻・第7巻・第8巻・第9巻』大津市	昭和53~62	1978~87
	2	『琵琶湖湖岸･湖底遺跡分布調査概要Ⅱ　大津市堅田~瀬田川河口』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和56	1981
59	粟津湖底遺跡（大津市、縄文・古墳～古代（白鳳）、散布地・その他（貝塚））			
	1	藤岡謙二郎『先史地域及び都市域の研究 －地理学における地域変遷史的研究の立場－』柳原書店	昭和30	1955
	2	京都市埋蔵文化財研究所編「遺跡確認法の調査研究」『昭和55年度実施報告水中遺跡の調査』文化庁	昭和56	1981
	3	『琵琶湖湖岸･湖底遺跡分布調査概要Ⅱ　大津市堅田~瀬田川河口』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和56	1981

	4	丸山竜平「世界最大の淡水貝塚(大津市晴嵐地先粟津湖底遺跡)」『滋賀文化財だよりNo.73』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和58	1983
	5	滋賀総合研究所編『びわ湖と埋蔵文化財』水資源開発公団琵琶湖開発事業建設部	昭和59	1984
	6	『粟津貝塚湖底遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和59	1984
	7	伊庭功「湖底に沈んだ縄文中期の貝塚－大津市粟津湖底遺跡－」『季刊考古学第36号』雄山閣出版	平成3	1991
	8	伊庭功「粟津湖底遺跡の発掘調査－湖底に沈んだ縄文時代中期の貝塚－」『滋賀考古第5号』滋賀考古学研究会	平成3	1991
	9	岩橋隆浩・瀬口真司「滋賀県粟津湖底貝塚第3貝塚」『季刊考古学第41号』雄山閣出版	平成4	1992
	10	伊庭功・岩橋隆浩「滋賀県大津市粟津湖底遺跡」『日本考古学年報』43(1990年度版)』日本考古学協会	平成4	1992
	11	伊庭功「粟津湖底遺跡の地形環境」『紀要第5号』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成4	1992
	12	伊東隆夫「粟津湖底遺跡出土の木質遺物」『紀要第5号』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成4	1992
	13	奈良国立文化財研究所「木器集成図録近畿原始編」『奈良国立文化財研究所史料第36冊』奈良国立文化財研究所	平成5	1993
	14	稲葉正子「粟津湖底遺跡第3貝塚出土の海産貝類」『滋賀文化財だよりNo.227』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成8	1996
	15	中川治美「粟津湖底遺跡第3貝塚出土のﾋﾒｸﾞﾙﾐの垂飾品－縄文時代のくるみの選択に関する覚え書き－」『滋賀文化財だよりNo.227』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成8	1996
	16	松井章「粟津湖底遺跡の成果－縄文人の生活と環境－」『滋賀文化財教室シリーズ173』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成10	1998
	17	伊庭功「考古資料としての動植物遺体－粟津貝塚の事例研究－」『食の復元－遺跡・遺物から何を読み取るか』岩田書院	平成11	1999
	18	瀬口眞司『琵琶湖に眠る縄文文化・粟津湖底遺跡　シリーズ「遺跡を学ぶ」107』新泉社	平成28	2016
60	蛍谷遺跡（大津市、縄文、散布地・その他（貝塚））			
	1	滋賀県百科事典刊行会編『滋賀県百科事典』大和書房	昭和59	1984
	2	粟津貝塚湖底遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和59	1984
	3	濱修「縄文時代~平安時代の遺物包含層を検出(大津市螢谷地先螢谷遺跡)」『滋賀文化財だよりNo.102』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和60	1985
	4	濱修・寒川旭「滋賀県大津市の蛍谷遺跡において認められた地震跡」『地質ニュース』390』—	昭和62	1987
	5	寒川旭「湖国の地震考古学（下）」『文化財教室シリーズ115』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成2	1990
	6	瀬田川浚渫工事他関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ　螢谷遺跡･石山遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成4	1992
	7	進藤武』「滋賀県のナイフ形石器」『滋賀文化財だよりNo.203』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成6	1994
	8	緊急地域雇用特別交付金事業に伴う出土文化財管理業務報告書』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成14	2002
61	大江湖底遺跡（大津市、縄文～中世、散布地）			
	1	滋賀総合研究所編』『びわ湖と埋蔵文化財』水資源開発公団琵琶湖開発事業建設部	昭和59	1984
	2	県立琵琶湖漕艇場浚渫工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　大江湖底遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和61	1986

	3	琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書8　琵琶湖西南部の湖底・湖岸遺跡真野舟溜・浮御堂遺跡・穴太遺跡・唐崎遺跡・大江湖底遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成20	2008
62	唐橋遺跡（大津市、弥生・古代（飛鳥）～近世、その他(古戦場)）			
	1	林屋辰三郎他編『新修大津市史第1巻・第3巻・第7巻・第8巻・第9巻』大津市	昭和53~62	1978~87
	2	『唐橋遺跡瀬田川浚渫工事関連文化財範囲確認調査』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和62	1987
	3	喜多貞裕「勢多橋橋脚遺構の発見について－大津市・唐橋遺跡－」『滋賀考古』創刊号』滋賀考古学研究会	平成元	1989
	4	大沼芳幸「唐橋遺跡の調査(大津市瀬田唐橋遺跡)」『滋賀文化財だよりNo.133』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成元	1989
	5	小笠原好彦編『勢多唐橋－橋にみる古代史－』六興出版	平成2	1990
	6	大沼芳幸「滋賀県大津市唐橋遺跡」『日本考古学年報41（1988年度版）』日本考古学協会	平成2	1990
	7	林博通「高句麗の都平壌高麗の都開城を訪ねて~後編~」『滋賀文化財だよりNo.146』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成2	1990
	8	横田洋三「勢多橋と古道」『考古学ジャーナルNo.332』ニュー・サイエンス社	平成3	1991
	9	『瀬田川浚渫工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　唐橋遺跡（本文編）』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成4	1992
	10	『大津市埋蔵文化財調査報告書(20)上高砂遺跡発掘調査報告書』大津市教育委員会	平成4	1992
	11	大沼芳幸「滋賀県瀬田唐橋遺跡」『季刊考古学第46号』雄山閣出版	平成6	1994
	12	大沼芳幸「勢多橋・漁師・琵琶湖－唐橋遺跡出土の漁撈用具からみた琵琶湖の水位変化－」『研究紀要第2号』滋賀県安土城郭調査研究所	平成6	1994
	13	『近江八幡大津線特定交通安全施設整備事業に伴う発掘調査報告書　唐橋遺跡　大津市瀬田2丁目』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成18	2006
63	北小松湖岸遺跡（大津市、古代（平安）、散布地）			
64	西浜遺跡（高島市、中世～近世、その他(石垣)）			
	1	滋賀総合研究所編『びわ湖と埋蔵文化財』水資源開発公団琵琶湖開発事業建設部	昭和59	1984
	2	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書11　琵琶湖西北部の湖底・湖岸遺跡西浜遺跡・森浜遺跡・針江浜遺跡・外ヶ浜遺跡・四津川遺跡・大溝湖底遺跡　第1分冊本文編』滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会	平成26	2014
65	浜分浜遺跡（高島市、近世（江戸）、その他（墓跡））			
	1	『今津町内遺跡分布調査報告書』今津町教育委員会	平成2	1990
66	三矢千軒遺跡（高島市、中世、集落跡）			
	1	林博通ほか『地震で沈んだ湖底の村－琵琶湖湖底遺跡を科学する－』サンライズ出版	平成24	2012
	2	林博通「琵琶湖湖底遺跡の研究－三ツ矢千軒遺跡の調査－」『環琵琶湖地域論』思文閣出版	平成15	2003
67	白浜遺跡（高島市、古墳～中世、散布地）			
68	伝三矢千軒遺跡（高島市、近世、その他(石塁跡)）			
	1	中村英世「琵琶湖の水没集落へのいざない－三ツ矢千軒、永田浜遺跡、萩ノ浜北・南遺跡を通じて－」『滋賀考古第14号』滋賀考古学研究会	平成7	1995
	2	白井忠雄「伝承・三矢千軒遺跡あらわる(高島町三矢千軒遺跡)」『滋賀文化財だよりNo.210』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成7	1995

69	永田浜遺跡（高島市、古代（奈良・平安）、散布地）			
	1	中村英世「琵琶湖の水没集落へのいざない－三ツ矢千軒、永田浜遺跡、萩ノ浜北・南遺跡を通じて－」『滋賀考古第14号』滋賀考古学研究会	平成7	1995
70	萩之浜北遺跡（高島市、中世・近世、散布地）			
	1	中村英世「琵琶湖の水没集落へのいざない－三ツ矢千軒、永田浜遺跡、萩ノ浜北・南遺跡を通じて－」『滋賀考古第14号』滋賀考古学研究会	平成7	1995
71	萩之浜南遺跡（高島市、古代（奈良・平安）、散布地）			
	1	中村英世「琵琶湖の水没集落へのいざない－三ツ矢千軒、永田浜遺跡、萩ノ浜北・南遺跡を通じて－」『滋賀考古第14号』滋賀考古学研究会	平成7	1995
72	森浜遺跡（高島市、弥生・古墳、集落跡）			
	1	『琵琶湖湖岸･湖底遺跡分布調査概要Ⅰ』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和48	1973
	2	『森浜遺跡発掘調査報告書（図版編）』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和53	1978
	3	『森浜遺跡（新川舟溜り航路部分）発掘調査報告書　高島郡新旭町針江地先湖中所在』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和54	1979
	4	滋賀総合研究所編『びわ湖と埋蔵文化財』水資源開発公団琵琶湖開発事業建設部	昭和59	1984
	5	滋賀県百科事典刊行会編『滋賀県百科事典』大和書房	昭和59	1984
	6	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書11　琵琶湖西北部の湖底・湖岸遺跡西浜遺跡・森浜遺跡・針江浜遺跡・外ヶ浜遺跡・四津川遺跡・大溝湖底遺跡　第1分冊本文編』滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会	平成26	2014
	7	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書11　琵琶湖西北部の湖底・湖岸遺跡西浜遺跡・森浜遺跡・針江浜遺跡・外ヶ浜遺跡・四津川遺跡・大溝湖底遺跡　第2分冊写真図版編』滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会	平成26	2014
73	針江浜遺跡（高島市、縄文～弥生、集落跡）			
74	深溝遺跡（高島市、その他、社寺跡）			
	1	『国道161号線･高島バイパス遺跡分布調査概要報告書』滋賀県教育委員会	昭和46	1971
	2	『琵琶湖湖岸･湖底遺跡分布調査概要Ⅰ』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和48	1973
	3	『琵琶湖湖岸･湖底遺跡分布調査概要Ⅰ』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和48	1973
	4	『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書7-4』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和55	1980
	5	大沼芳幸「弥生時代中期の埋没林と地震跡発見(新旭町針江針江浜遺跡)」『滋賀文化財だより№125』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和63	1988
	6	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　昭和62年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和63	1988
	7	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　昭和63年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成元	1989
	8	大沼芳幸「新旭町・針江浜遺跡の調査から」『滋賀考古第3号』滋賀考古学研究会	平成2	1990
	9	寒川旭「湖国の地震考古学（下）」『文化財教室シリーズ』115』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成2	1990
	10	『文化財調査出土遺物仮収納保管業務　平成元年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成2	1990

	11	大沼芳幸「針江浜遺跡発掘調査報告(1)-針江浜水泳場部分の調査-」『滋賀文化財だよりNo.201』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成6	1994
	12	大沼芳幸「針江浜遺跡発掘調査報告(2)-針江浜水泳場部分の調査-」『滋賀文化財だよりNo.202』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成6	1994
	13	横田洋三・近藤広「≪特集・地震の考古学10≫－滋賀県(2)」『古代学研究第143号』古代学研究会	平成10	1998
	14	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書11　琵琶湖西北部の湖底・湖岸遺跡西浜遺跡・森浜遺跡・針江浜遺跡・外ヶ浜遺跡・四津川遺跡・大溝湖底遺跡　第1分冊本文編』滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会	平成26	2014
	15	琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書11　琵琶湖西北部の湖底・湖岸遺跡西浜遺跡・森浜遺跡・針江浜遺跡・外ヶ浜遺跡・四津川遺跡・大溝湖底遺跡　第2分冊写真図版編』滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会	平成26	2014
75	深溝浜遺跡（高島市、弥生・古代（奈良・平安）、散布地）			
76	外ヶ浜遺跡（高島市、その他、散布地）			
	1	『琵琶湖湖岸･湖底遺跡分布調査概要Ⅰ』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和48	1973
	2	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書　11琵琶湖西北部の湖底・湖岸遺跡西浜遺跡・森浜遺跡・針江浜遺跡・外ヶ浜遺跡・四津川遺跡・大溝湖底遺跡　第1分冊本文編』滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会	平成26	2014
	3	『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書11　琵琶湖西北部の湖底・湖岸遺跡西浜遺跡・森浜遺跡・針江浜遺跡・外ヶ浜遺跡・四津川遺跡・大溝湖底遺跡　第2分冊写真図版編』滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会	平成26	2014
77	源氏浜遺跡（高島市、その他、散布地）			
	1	『琵琶湖湖岸･湖底遺跡分布調査概要Ⅰ』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和48	1973

●余呉湖の水中遺跡　関係文献一覧（『令和３年度　滋賀県遺跡地図』は省略）

1	余呉湖底遺跡（長浜市、集落跡、縄文、余呉湖）			
	1	『余呉町埋蔵文化財発掘調査報告書1余呉湖底遺跡・松田遺跡』余呉町教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和60	1985

●琵琶湖の内湖の水中遺跡　関係文献一覧（『令和３年度　滋賀県遺跡地図』は省略）

1	早崎遺跡（長浜市、縄文～弥生、集落跡、早崎内湖・一部再生内湖・一部陸地化（水田））			
	1	『琵琶湖湖岸･湖底遺跡分布調査概要Ⅰ』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和48	1973
	2	『県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ-3　びわ町早崎遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和61	1986
2	入江内湖西野遺跡（米原市、弥生～古墳、集落跡、入江内湖・陸地化（水田））			
	1	小江慶雄「琵琶湖湖底遺跡再考」『京都学芸大学学報Ａ№13』京都学芸大学	昭和33	1958
	2	彦根市編『彦根市史上冊』彦根市役所	昭和35	1960
	3	『矢倉川中小河川改修に伴う入江内湖西野遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和52	1977
	4	『米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅵ　入江内湖遺跡発掘調査報告書米原町立米原小学校新設に伴う発掘調査』米原町教育委員会	昭和62	1987

	5	土井一行「古墳時代前期の掘立柱建物集落跡(米原町入江西野入江西野遺跡)」『滋賀文化財だよりNo.157』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成3	1991
	6	『県道彦根米原線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書　入江内湖西野遺跡坂田郡米原町磯』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成14	2002
3	入江内湖遺跡（米原市、縄文～古代（平安）、集落跡、入江内湖・陸地化（水田））			
	1	梅原末治「珍しい鹿角器」『考古學雑誌第42巻第3号』日本考古学会	昭和32	1957
	2	小江慶雄「琵琶湖湖底遺跡再考」『京都学芸大学学報Ａ No.13』京都学芸大学	昭和33	1958
	3	彦根市編『彦根市史上冊』彦根市役所	昭和35	1960
	4	近江郷土史研究編集部編「入江干拓地の遺跡と鹿角製戈」『近江郷土史研究第1巻第3号』近江考古学研究会	昭和48	1973
	5	滋賀県百科事典刊行会編『滋賀県百科事典』大和書房	昭和59	1984
	6	春成秀爾「鉤と霊－有鉤短剣の研究」『国立歴史民俗博物館研究報告第7集』国立歴史民俗博物館	昭和60	1985
	7	田中勝弘「入江内湖遺跡とその遺物」『滋賀考古学論叢　第３集』 滋賀考古学論叢刊行会	昭和61	1986
	8	中井均「入江内湖周辺遺跡出土木製品の概要」『古代学研究第111号』古代学研究会	昭和61	1986
	9	中井均「入江内湖周辺遺跡出土の木製品について」『滋賀県埋蔵文化財センター紀要2』滋賀県埋蔵文化財センター	昭和61	1986
	10	田中勝弘「入江内湖遺跡とその遺物」『滋賀考古学論叢第3集－佐藤宗男先生還暦記念論集－』滋賀考古学論叢刊行会	昭和61	1986
	11	『米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅵ入江内湖遺跡発掘調査報告書米原町立米原小学校新設に伴う発掘調査』米原町教育委員会	昭和62	1987
	12	『米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅸ　入江内湖遺跡(行司町地区)発掘調査報告書滋賀県立文化産業交流会館建設に伴う発掘調査』米原町教育委員会	昭和63	1988
	13	『一般国道8号米原バイパス建設に伴う発掘調査報告書1　入江内湖遺跡Ⅰ米原市入江』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成19	2007
	14	『一般国道8号米原バイパス建設に伴う発掘調査報告書2　入江内湖遺跡Ⅱ米原市入江』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成20	2008
	15	『一般国道8号米原バイパス建設に伴う発掘調査報告書3　入江内湖遺跡Ⅲ米原市入江』滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会	平成27	2015
	16	『滋賀県内遺跡発掘調査報告書　平成26年度埋蔵文化財緊急調査費国庫補助事業（県内遺跡発掘調査等）』滋賀県教育委員会	平成28	2016
4	野田沼遺跡（彦根市、古墳～古代（平安）、散布地、野田沼・陸地化（水田・畑地））			
5	曽根沼遺跡（彦根市、古代（平安）、集落跡、曽根沼・一部陸地化（水田））			
6	松原内湖網代口遺跡（彦根市、古墳～古代（平安）、散布地、松原内湖・一部陸地化（水田））			
7	松原内湖小屋遺跡（彦根市、古墳～古代（平安）、散布地、松原内湖・一部陸地化（水田））			
8	松原内湖遺跡（彦根市、旧石器～近世、集落跡、松原内湖・陸地化（水田その他）・山林）			
	1	浜崎悟司「5.5㎝の銅鐸形銅製品(彦根市松原町矢倉川口遺跡)」『滋賀文化財だよりNo.108』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和61	1986
	2	細川修平「旧内湖岸の縄文後・晩期遺跡(彦根市松原町松原内湖遺跡)」『滋賀文化財だよりNo.115』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和62	1987
	3	浜崎悟司「松原内湖遺跡出土の銅鐸形銅製品」『滋賀考古学論叢第4集－南光雄先生退任記念論集－』滋賀考古学論叢刊行会	昭和63	1988
	4	中川正人「松原内湖遺跡出土巻胎漆器断片の技法について」『滋賀考古学論叢第４集－南光雄先生退任記念論集－』 滋賀考古学論叢刊行会	昭和63	1988

	5	山口庄司「松原内湖出土の琴等の復元その1」『滋賀文化財だよりNo.128』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和63	1988
	6	山口庄司「松原内湖出土の琴等の復元その2」『滋賀文化財だよりNo.129』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和63	1988
	7	吉田秀則「彦根市松原内湖遺跡出土の耳栓について－資料紹介－」『滋賀文化財だよりNo.151』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成2	1990
	8	西田弘「近江の古鏡Ⅳ」『文化財教室シリーズ』111』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成2	1990
	9	吉田秀則「縄文時代の丸木舟未製品出土(彦根市松原町松原内湖遺跡)」『滋賀文化財だよりNo.169』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成4	1992
	10	『琵琶湖流域下水道彦根長浜処理区東北部浄化センター建設に伴う松原内湖遺跡発掘調査報告書Ⅱ木製品（本文編）』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成4	1992
	11	『琵琶湖流域下水道彦根長浜処理区東北部浄化センター建設に伴う松原内湖遺跡発掘調査報告書Ⅰ　彦根市松原町（本文編）』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成5	1993
	12	『琵琶湖流域下水道事業（東北部浄化センター増設工事）に伴う発掘調査報告書　松原内湖遺跡彦根市松原町』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成18	2006
	13	『琵琶湖流域下水道事業（東北部浄化センター増設工事）に伴う発掘調査報告書Ⅱ　松原内湖遺跡彦根市松原町』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成23	2011
	14	『平成26年度松原内湖遺跡から出土した鎌倉時代末期の巻数板（勧請板）について』公益財団法人滋賀県文化財保護協会	平成26	2014
	15	『琵琶湖流域下水道事業（東北部浄化センター増設工事）に伴う発掘調査報告書Ⅲ松原内湖遺跡Ⅲ　彦根市松原町』滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会	平成27	2015
9	大中の湖東遺跡（東近江市、縄文、散布地、大中の湖・陸地化（水田））			
	1	『能登川町埋蔵文化財調査報告書第3集　町内遺跡分布調査報告書』能登川町教育委員会	昭和61	1986
	2	『能登川町埋蔵文化財調査報告書第61集　殿衛遺跡(4次)・石田遺跡(22次)・大中の湖南遺跡・大中の湖東遺跡・獅子鼻B遺跡』東近江市教育委員会	平成18	2006
10	城東Ａ遺跡（東近江市、縄文・弥生、散布地、大中の湖・陸地化（水田・宅地））			
11	城東Ｂ遺跡（東近江市、縄文・弥生、散布地、大中の湖・陸地化（水田・宅地））			
12	獅子鼻Ｂ遺跡（東近江市、縄文・弥生、散布地、大中の湖・陸地化（水田・宅地））			
	1	『獅子鼻Ｂ遺跡発掘調査報告書　神崎郡能登川町きぬがさ所在』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和58	1983
13	川西遺跡（近江八幡市、弥生・古墳・古代（平安）、集落跡、大中の湖・陸地化（宅地・水田・湖岸））			
	1	『近江八幡市埋蔵文化財発掘調査報告書32　南田遺跡・大殿遺跡・八幡山城遺跡・浅小井城跡・川西遺跡・高座遺跡』近江八幡市教育委員会	平成8	1996
14	白王遺跡（近江八幡市、縄文、散布地、大中の湖・陸地化（水田、宅地））			
	1	佐藤宗男「近江八幡市白王町大中の湖西遺跡出土の異形石器」『滋賀文化財だよりNo.106』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和60	1985
	2	『緊急地域雇用特別交付金事業に伴う出土文化財管理業務報告書』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成14	2002
15	切通遺跡（近江八幡市、縄文～古墳、散布地、大中の湖・陸地化（水田））			
16	水茎Ａ遺跡（近江八幡市、縄文、散布地、水茎内湖・陸地化（水田））			
17	水茎Ｂ遺跡（近江八幡市、縄文、散布地、水茎内湖・陸地化（水田））			
	1	『滋賀県文化財調査概要第2集　近江八幡市元水茎町遺跡調査概要』滋賀県教育委員会	昭和41	1966
18	水茎Ｃ遺跡（近江八幡市、縄文・古墳・古代（奈良）、散布地、水茎内湖・陸地化（水田））			
	1	『滋賀県文化財調査概要第2集　近江八幡市元水茎町遺跡調査概要』滋賀県教育委員会	昭和41	1966

	2	『緊急地域雇用特別交付金事業に伴う出土文化財管理業務報告書』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成14	2002
19	芦刈遺跡（近江八幡市、縄文・弥生、散布地、大中の湖・陸地化（宅地、水田、畑地））			
20	竜ヶ崎Ａ遺跡（近江八幡市、縄文・古代（白鳳）、集落跡・社寺跡、大中の湖・陸地化（水田））			
	1	梅原末治「近江安土山麓出土の鬼板の復原」『史迹と美術第21輯ノ3』史迹美術同攷会	昭和26	1951
	2	『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書30-2　弁天島遺跡･竜ヶ崎A遺跡蒲生郡安土町下豊浦』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成15	2003
	3	宮田佳樹・小島孝修・松谷暁子・遠部慎・西本豊弘「西日本最古のキビ-竜ヶ崎Ａ遺跡の土器付着炭化物」『国立歴史民俗博物館研究報告』国立歴史民俗博物館	平成18	2006
	4	『ほ場整備関係（経営体育成基盤整備）遺跡発掘調査報告書33-1　竜ヶ崎A遺跡　蒲生郡安土町下豊浦』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成18	2006
	5	宮田佳樹・遠部慎・小島孝修「竜ヶ崎Ａ遺跡出土土器付着炭化物の炭素14年代測定結果（補遺）」『紀要第20号』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成19	2007
21	弁天島遺跡（近江八幡市、縄文、集落跡、大中の湖・陸地化（宅地、水田、湖岸））			
	1	京都教育大学考古学研究会「考古学資料室所蔵の縄文時代遺物資料紹介－醍醐遺跡・番の面遺跡・安土弁天島遺跡・石山貝塚・滋賀里遺跡－」『史想第22号』京都教育大学考古学研究会	平成元	1989
	2	小島孝修「弁天島遺跡出土の玦状耳飾」『滋賀文化財だよりNo.271』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成13	2001
	3	『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書29-5　弁天島遺跡蒲生郡安土町下豊浦』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成14	2002
	4	『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書30-2　弁天島遺跡･竜ヶ崎A遺跡蒲生郡安土町下豊浦』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成15	2003
	5	『安土町埋蔵文化財発掘調査報告書第48集　安土町内遺跡緊急発掘調査概要報告書　平成19年度調査報告書』安土町教育委員会	平成21	2009
22	大中の湖南遺跡 （近江八幡市、縄文～古代（平安）・中世（室町）、集落跡、大中の湖・陸地化（畑地）・一部史跡）			
	1	『滋賀県文化財調査概要第5集　大中の湖南遺跡調査概要』滋賀県教育委員会	昭和42	1967
	2	佐藤宗男「大中の湖南遺跡出土の皇朝十二銭について」『滋賀文化財研究所月報4』滋賀文化財研究所	昭和43	1968
	3	飛田喜功「大中の湖南遺跡発見隆平永宝宋銭の調査」『滋賀文化財研究所月報12』滋賀文化財研究所	昭和44	1969
	4	滋賀県百科事典刊行会編『滋賀県百科事典』大和書房	昭和59	1984
	5	佐藤宗男「土器片を利用した紡錘車の製作」『滋賀文化財だよりNo.106』財団法人滋賀県文化財保護協会	昭和60	1985
	6	市川三次・嶋倉巳三郎・横山和正・堤良彦「滋賀県大中の湖遺跡出土遺物の種同定及び古環境復元基礎調査報告」『山梨県立女子短期大学紀要第22号』山梨県立女子大学	平成元	1989
	7	小竹森直子「館蔵品資料調査報告大中の湖南遺跡出土の石器類について」『紀要第3号』滋賀県立安土城考古博物館	平成7	1995
	8	小竹森直子「大中の湖南遺跡出土の石器類について」『紀要第3号』滋賀県立安土城考古博物館	平成7	1995
	9	小竹森直子「館蔵品資料調査報告大中の湖南遺跡出土の石器類について－補遺編－」『紀要第4号』滋賀県立安土城考古博物館	平成8	1996
	10	坂梨咲子「安土町大中の湖南遺跡の調査について」『滋賀文化財だよりNo.277』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成14	2002

	11	『緊急地域雇用特別交付金事業に伴う出土文化財管理業務報告書』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成14	2002
	12	辻川哲朗「安土山・繖山周辺の埴輪」『紀要第23号』財団法人滋賀県文化財保護協会	平成22	2010
	13	『緊急雇用創出特別対策事業に伴う出土文化財資料化収納業務報告書Ⅰ』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成16	2004
	14	『ほ場整備関係（経営体育成基盤整備）遺跡発掘調査報告書32-2　芦刈遺跡・大中の湖南遺跡　蒲生郡安土町下豊浦』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会	平成17	2005
	15	阿刀弘史「安土町大中の湖南遺跡出土木製品の樹種同定資料「滋賀県大中の湖遺跡出土遺物の種同定及び古環境復元基礎調査報告」から」『淡海文化財論叢第1輯』淡海文化財論叢刊行会	平成18	2006
	16	『よみがえる弥生のムラ－大中の湖南遺跡発掘五〇年－』滋賀県安土城考古博物館	平成27	2015
23	野田沼遺跡（野洲市、古墳～中世（室町）、集落跡、野田沼・陸地化（水田・畑地））			
24	大溝城遺跡（高島市、近世（安土桃山）、城館跡、乙女ケ池、陸地化（その他））			
	1	『高島町文化財資料集4：大溝城Ⅰ-高島郡鷹島町大字勝野所在-』高島町教育委員会	昭和59	1984
	2	『高島町文化財資料集18：大溝城周辺遺跡』高島町教育委員会	平成８	1996
	3	『高島町歴史民俗叢書9：高島町旧大溝城下町の民家』高島町教育委員会	平成13	2001
	4	『高島市文化財調査報告書16：高島市内遺跡調査報告書』高島市教育委員会	平成23	2011
	5	『大溝城遺跡発掘調査報告書　高島市文化財調査報告書第36集』高島市教育委員会	令和2	2020



図 34　「大溝城下古図」（近世以降）

資料６　検討体制と経過

１　検討の体制

本構想は、水中考古学、考古学に関する学識経験者からなる「琵琶湖の水中遺跡保存活用基本構想検討会議」を設置し、文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門の文化財調査官をオブザーバー、滋賀県文化スポーツ部文化財保護課を事務局とした体制で検討を行いました。

令和６年度

検討会議委員　　50音順

氏　　名	所　属　等	分　野
池　田　榮　史	國學院大學研究開発推進機構教授	水中考古学
木　村　　淳	東海大学人文学部准教授	水中考古学
禰 冝 田　佳 男	大阪府立弥生文化博物館館長	考古学

オブザーバー

氏　　名	所　属　等
芝　康 次 郎	文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門文化財調査官
長　　直　信	文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門文化財調査官

事　務　局

氏　　名	所　属　等
永　井　利　憲	滋賀県文化スポーツ部文化財保護課長
木　戸　雅　寿	同課　参事員
北　村　圭　弘	同課　参事兼記念物・埋蔵文化財係長
大　﨑　哲　人	同課　記念物・埋蔵文化財係専門幹
細　川　修　平	同課　記念物・埋蔵文化財係副主幹
福　西　貴　彦	同課　記念物・埋蔵文化財係主査
田　中　　稔	同課　記念物・埋蔵文化財係技師
園 田　万 佑 香	同課　記念物・埋蔵文化財係技師
岡　田　郁　代	同課　記念物・埋蔵文化財係会計年度任用職員

令和７年度

検討会議委員　　50音順

氏　　名	所　属　等	分　　野
池　田　榮　史	國學院大學研究開発推進機構教授	水中考古学
木　村　　淳	東海大学人文学部准教授	水中考古学
禰 宜 田　佳 男	大阪府立弥生文化博物館館長	考古学

オブザーバー

氏　　名	所　属　等
長　　直　信	文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門文化財調査官
田 中　龍 一	文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門文化財調査官

事　務　局

氏　　名	所　属　等
永　井　利　憲	滋賀県文化スポーツ部文化財保護課長
木　戸　雅　寿	同課　参事員
福　西　貴　彦	同課　記念物・埋蔵文化財係長
北　村　圭　弘	同課　記念物・埋蔵文化財係専門幹
細　川　修　平	同課　記念物・埋蔵文化財係副主幹
田　中　　稔	同課　記念物・埋蔵文化財係技師
園 田　万 佑 香	同課　記念物・埋蔵文化財係技師
岡　田　郁　代	同課　記念物・埋蔵文化財係会計年度任用職員

２ 検討の経過

（１）令和６年度

① 第１回　令和６年８月５日　滋賀県庁本館４Ａ会議室

・琵琶湖に眠る水中遺跡魅力発掘・発信事業の目的について

・琵琶湖の水中遺跡の現状とこれまでの調査成果

・琵琶湖の水中遺跡保存活用基本構想について

② 第２回　令和６年 12 月３日　滋賀県庁本館４Ａ会議室

・琵琶湖の水中遺跡保存活用基本構想（案）の検討　第１～３章

・琵琶湖に眠る水中遺跡魅力発掘・発信事業の次年度事業計画について

③ 第３回　令和７年３月４日　滋賀県庁本館４Ａ会議室
・琵琶湖の水中遺跡保存活用基本構想（案）の検討　第４・５章
・琵琶湖に眠る水中遺跡魅力発掘・発信事業の次年度事業計画について

（２）令和７年度
① 第１回　令和７年６月 30 日　滋賀県危機管理センター災害対策室７
・琵琶湖の水中遺跡保存活用基本構想（案）の検討　第１～５章
・令和７年度琵琶湖に眠る水中遺跡魅力発掘・発信事業の事業計画について
（令和７年度日本における水中遺跡保護体制の整備充実に関する
調査研究事業にともなうパイロット事業を含む）
② 第２回　令和７年 10 月 22 日　滋賀県庁本館４Ａ会議室
・琵琶湖の水中遺跡保存活用基本構想（案）の検討　第１～６章・資料編
・琵琶湖に眠る水中遺跡魅力発掘・発信事業の事業進捗について
（令和７年度日本における水中遺跡保護体制の整備充実に関する
調査研究事業にともなうパイロット事業を含む）
③ 第３回　令和８年１月 26 日　滋賀県危機管理センター災害対策室２
・琵琶湖の水中遺跡保存活用基本構想（案）の検討　第１～６章・資料編
・琵琶湖に眠る水中遺跡魅力発掘・発信事業の事業進捗について
（令和７年度日本における水中遺跡保護体制の整備充実に関する
調査研究事業にともなうパイロット事業を含む）
・策定の公表に向けて
・令和８年度以降の事業に向けて



写真 52　第１回琵琶湖の水中遺跡保存活用基本構想検討会議　令和６年８月５日　滋賀県庁

資料６　図・表・写真の出典等

図の出典

図１：滋賀県『滋賀県基本構想　変わる滋賀　続く幸せ -Evolving SHIGA-』（令和元（2019）年）p.18 図より転載

図２・３：滋賀県

図４：滋賀県『シガリズム観光振興ビジョン～シガリズムでつなぐ 滋賀らしい観光の創出をめざして～』（令和４（2022）年）p.31 図 3-2 を参照して作成

図５：滋賀県『滋賀県文化財保存活用大綱―知る・守る・活かす 滋賀の宝 わたしたちの文化財―』（令和２（2021）年）p.17 図より転載

図６：滋賀大学湖沼研究所編『びわ湖２ 開発のゆくえ：三共科学選書２』（三共出版　昭和 49（1974）年）p.12 図４ びわ湖をめぐる交通路と港湾より転載

図７：林博通『尚江千軒遺跡　琵琶湖湖底遺跡の調査・研究』（平成 16（2004）年、サンライズ出版）P５の第１図、『水中考古学の世界－びわ湖底の遺跡を掘る－』（平成 21 年（2009 年）、および滋賀県立安土城考古博物館、財団法人滋賀県文化財保護協会）P4 の図 1 を参考に今回作成

図８：産業技術総合研究所 地質調査総合センターウェブサイト　地質図 Navi　活断層データベース（産業技術総合研究所(2024) 2024 年 8 月 23 日版）（https://gbank.gsj.jp/activefault/）より転載（一部加工）

図９：滋賀県『琵琶湖ハンドブック四訂版 』（令和７（2025）年）p.223 図 9-4-1 滋賀県の河川概要図より転載

図 10：滋賀大学湖沼研究所編『びわ湖２ 開発のゆくえ：三共科学選書２』（三共出版　昭和 49（1974）年）p.22 図５ 湖辺における内湖の分布より転載

図 11：滋賀県立図書館提供（「滋賀県立図書館近江デジタル歴史街道　『近江国大絵図／近江国細見図』」より転載）

図 12：栗東歴史民俗博物館提供（『里内文庫』「琵琶湖水理淀川水制資料」のうち『明治二十九年大洪水浸水区域之図』）

図 13～14：今回作成

図 15：滋賀県立図書館提供（同館ウェブサイト「滋賀県立図書館近江デジタル歴史街道　『膳所城之図』」より転載）

図 16：滋賀県『シガリズム観光振興ビジョン～シガリズムでつなぐ 滋賀らしい観光の創出をめざして～』（令和４（2022）年）p.32 図 3-3 より転載

図 17～20：今回作成

図 21～22：滋賀県

図 23：滋賀県『葛籠尾崎湖底遺跡調査報告書』（令和８（2026）年）p.9 図 4 を参

考に作成（ベース図は、国土地理院ウェブサイト琵琶湖「４竹生島」（https://www.gsi.go.jp/kankyochiri/kinki-biwako.html）より転載）

図 24：独立行政法人水資源機構　琵琶湖総合管理所ウェブサイト「琵琶湖の特徴」（https://www.water.go.jp/kansai/biwako/html/about_biwa/ab_biwa_01.html）を転載（一部改変）

図 25：滋賀県立図書館提供（同館ウェブサイト「滋賀県立図書館近江デジタル歴史街道　『近江国絵図／元禄（1701 年）』」）

図 26～33：『滋賀県遺跡地図』をベースに作成

図 34：高島市　中江藤樹・たかしまミュージアム提供（『大溝城下古図（寛文４年（1664）年』）

表の出典

表１：滋賀県立安土城考古博物館・財団法人滋賀県文化財保護協会『水中考古学の世界－びわ湖底の遺跡を掘る－』（平成 21（2009）年）p.34　年表を転載（一部改変）

表２～４：今回作成

表５：滋賀県立安土城考古博物館・財団法人滋賀県文化財保護協会『水中考古学の世界－びわ湖底の遺跡を掘る－』（平成 21（2009）年）p.14　年表を転載（一部改変）

表６～７：今回作成

表８：『滋賀県遺跡地図』に基づき作成

写真の出典等

写真２・４・５・７～17・20～22・24～31・33～52：滋賀県撮影

写真１・３：公益社団法人びわこビジターズビューロー提供（同ウェブサイト　滋賀・びわ湖観光情報　滋賀フォトライブラリーより転載）

写真６：滋賀県立図書館提供（同館ウェブサイト「滋賀県立図書館近江デジタル歴史街道　明治 29 年大津市内水害絵はがき（複製）／西川口　写真に見る明治 29 年大洪水」）

写真 18：びわ湖フローティグスクール提供

写真 19：公益社団法人長浜観光協会・一般社団法人びわ湖の素 DMO 提供（同ウェブサイト　長浜・米原を楽しむ観光情報サイトフォトライブラリーより転載（https://kitabiwako.jp/photo_library））

写真 23：長浜市長浜城歴史博物館　葛籠尾崎湖底遺跡　縄文土器

写真 28：滋賀県撮影（立命館大学・認定 NPO 法人びわ湖トラスト提供）

写真 32：滋賀県立安土城考古博物館提供（「第 51 回企画展よみがえる弥生のムラ-大中の湖南遺跡発掘 50 年-」（平成 27（2015）年）p.2　写真１）

琵琶湖の水中遺跡保存活用基本構想

令和８年（2026 年）年３月 31 日

滋賀県文化スポーツ部文化財保護課
滋賀県大津市京町四丁目１番１号
電話　077(528)4674